大東市埋蔵文化財調査報告第７集

中垣内遺跡発掘調査報告書

―― 関西電力株式会社東大阪変電所内所在 ――

１９９０年９月

大東市教育委員会

はしがき

中垣内遺跡は、昭和34年に発見された弥生時代の遺跡です。当時は簡単な調査が行われただけでありましたが、竪穴住居跡や杭列が見つかり、弥生時代前期の集落が営まれていたことがわかりました。また、そこから出土した土器は当時の弥生土器研究にとって大変貴重な資料でありました。その後長らく発掘調査の機会がなく、集落の営まれた時期や範囲については、不明であったにもかかわらず、これまで中垣内遺跡の名前だけが一人歩きしてきた感があります。

今回実施しました調査も各調査区の面積が100㎡前後という狭いものでしたが、遺跡の規模を知るうえでも有意義な調査であったものと思われます。中垣内遺跡の調査は始まったばかりといっても過言ではなく、今後の調査例が増えれば集落の全貌も明らかになることでしょう。そして、これらの調査の結果得られた新しい資料が、弥生時代研究の一助になれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査、整理について多大なるご協力を頂いた関西電力株式会社をはじめ、関係諸機関、諸氏に感謝の意を表するとともに、今後とも一層の御指導、御鞭撻をお願い申し上げる次第です。

平成２年９月

大東市教育委員会

教育長　中　野　昭　明

例　言

1．　本書は、大東市中垣内５丁目にある関西電力株式会社東大阪変電所敷地内に所在する中垣内遺跡の発掘調査概要報告書である。

2．　調査は大東市教育委員会歴史民俗資料館、黒田淳を担当者として、昭和62年10月14日～同年11月１日、昭和63年５月３日～同年５月６日、昭和63年10月13日～同年11月20日、平成１年７月14日～同年８月19日の計４回の現地調査を実施し、引き続き内業整理及び報告書作成作業に取りかかり、平成２年８月31日にすべての整理作業を終了した。

3．　発掘調査に係る費用すべては関西電力株式会社がこれを負担した。

4．　調査及び遺物整理においては、以下の人々の協力を得た。

石井裕己、石田昌世、大谷聡、大山清、岡田幸博、北田亨子、金弘美、谷崎光子、玉本雅巳、辻本智英、中村亘登、野村香枝、東坂宣欣、広瀬悟郎、深沢吉隆、増田耀子、松本哲、三加茂憲明、三宅秀男、森石千枝子、山村俊之、山本裕子、山本芳子、吉田すみ子、吉村早苗、渡辺新平。

また、帝塚山短期大学教授田代克巳、大阪府教育委員会文化財保護課技師松岡良憲、三宅正浩、(財)大阪文化財センター技師三好孝一諸氏からは有意義な御指導を受けた。記して感謝の意を表す。

5．　本書の執筆、編集は黒田が行った。

6．　調査において作成した写真、実測図、カラースライド等は、大東市歴史民俗資料館に保管されている。広く利用されることを希望する。

本　文　目　次

第１章　序説……1
1.位置と環境……1
2.調査に至る経過……3
第２章　調査成果……5
1.Ａ区（ＮＧＴ－Ⅱ）の調査……5
2.Ｂ区（ＮＧＴ－Ⅲ）の調査……11
3.Ｃ区（ＮＧＴ－Ⅳ）の調査……29
4.Ｄ区（ＮＧＴ89－１）の調査……51
第３章　まとめ……59
1.遺構について……59
2.その他の出土遺物……59
3.中垣内遺跡の集落の範囲について……61
おわりに……66
遺物観察表……67

挿　図　目　次

第１図　周辺の遺跡分布図……2
第２図　調査区位置図……3
第３図　Ａ区遺構平面図……5
第４図　Ａ区北壁土層断面図……7、8
第５図　Ａ区出土土器……9
第６図　Ａ区出土木器……10
第７図　Ｂ区北壁土層断面図……11
第８図　Ｂ区ＢＳＤ－１全体図……12
第９図　ＢＳＤ－１遺物出土状況……13、14
第10図　ＢＳＤ－１出土土器(1)……15
第11図　ＢＳＤ－１出土土器(2)……16
第12図　ＢＳＤ－１出土土器(3)……17

第13図　ＢＳＤ－１出土土器(4) ……18
第14図　ＢＳＤ－１出土土器(5) ……19
第15図　ＢＳＤ－１出土土器(6) ……20
第16図　Ｂ区包含層出土土器……21
第17図　Ｂ区出土土器(1) ……22
第18図　Ｂ区出土木器(2) ……23
第19図　ＢＳＤ－１出土土器……23
第20図　Ｂ区包含層出土土器(1) ……25
第21図　Ｂ区包含層出土土器(2) ……26
第22図　Ｂ区包含層出土土器(3) ……27
第23図　Ｂ区包含層出土土器(4) ……28
第24図　Ｃ区北壁土層断面図……29
第25図　Ｃ区第１遺構面平面図……30
第26図　ＣＳＫ－２，３，４，５遺物出土状況……31
第27図　Ｃ区第２遺構面上層平面図……31
第28図　Ｃ区第２遺構面下層平面図……32
第29図　ＣＳＫ－10遺物出土状況……33
第30図　ＣＳＫ－11遺物出土状況……34
第31図　ＣＳＫ－22遺物出土状況……35
第32図　ＣＳＤ－５上層遺物出土状況……36
第33図　ＣＳＤ－５下層遺物出土状況……36
第34図　ＣＳＤ－６遺物出土出土状況……37
第35図　Ｃ区第３遺構面平面図……38
第36図　ＣＳＲ－１土層断面図……38
第37図　ＣＳＫ－４、５、６、10、11出土土器……39
第38図　ＣＳＫ－14、17、18、21、22、24出土土器……40
第39図　ＣＳＤ－５出土土器……41
第40図　ＣＳＤ－６、８出土土器……42
第41図　ＣＳＰ－15、80出土土器……42
第42図　Ｃ区土器群Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ出土土器……43

第43図　Ｃ区出土木器……44
第44図　Ｃ区出土土器(1)……45
第45図　Ｃ区出土土器(2)……46
第46図　Ｃ区出土土器(3)……47
第47図　Ｃ区出土土器(4)……48
第48図　Ｃ区出土土器(5)……49
第49図　Ｃ区出土土器(6)……50
第50図　Ｄ区西壁土層断面図……51
第51図　Ｄ区第１遺構面平面図……52
第52図　Ｄ区第２遺構面平面図……53
第53図　Ｄ区第３遺構面平面図……54
第54図　Ｄ区第４遺構面平面図……54
第55図　ＤＳＲ－１下層遺物出土状況……54
第56図　Ｄ区第３、４遺構面及びＤＳＲ－１下層出土土器……55
第57図　Ｄ区包含層出土土器(1)……56
第58図　Ｄ区包含層出土土器(2)……56
第59図　Ｄ区包含層出土土器(3)……57
第60図　Ｄ区出土土石器(1)……57
第61図　Ｄ区出土土石器(2)……58
第62図　ＤＳＲ－１下層出土木器……58
第63図　Ｃ区出土高熱を受けた跡の残る土器片……60
第64図　Ｂ区出土蓋形土製品、匙形土製品……61
第65図　外部の特徴を持つ土器……61
第66図　関西電力東大阪変電所保管の木器(1)……62
第67図　関西電力東大阪変電所保管の木器(2)……63

表　目　次

第１表　中垣内遺跡調査区一覧表……3
第２表　Ａ区遺構一覧表……5

第３表　Ｄ区第１遺構面遺構一覧表……52
第４表　Ｄ区第２遺構面遺構一覧表……53

図　版　目　次

図版１　Ａ区遺構　調査地全景、第１遺構面（西より）、第１遺構面（東より）
図版２　Ａ区遺構　第２遺構面ＡＳＲ－１、ＡＳＲ－１断面、第３遺構面ＡＳＤ－２、調査区西壁断面
図版３　Ｂ区遺構　ＢＳＤ－１（北より）、ＢＳＤ－１（南より）
図版４　Ｂ区遺構　ＢＳＤ－１遺物出土状況（南端付近）、ＢＳＤ－１遺物出土状況（中央付近）
図版５　Ｃ区遺構　１区第２遺構面上層（西より）、ＣＳＤ－５遺物出土状況
図版６　Ｃ区遺構　１区第２遺構面上層（北より）、ＣＳＤ－５遺物出土状況
図版７　Ｃ区遺構　３区第２遺構面上層（南より）、３区ＣＳＤ－６遺物出土状況
図版８　Ｃ区遺構　４区第２遺構面上層（南より）、４区ＣＳＤ－６遺物出土状況
図版９　Ｃ区遺構　５区第２遺構面上層（南より）、ＣＳＫ－10上層・下層遺物出土状況ＣＳＫ－11上層・下層遺物出土状況
図版10　Ｄ区遺構　第４遺構面（南より）、ＤＳＲ－１下層木器出土状況、ＤＳＲ－１下層断面、調査区西壁断面（ＤＳＲ－１）、ＤＳＰ－５
図版11　ＢＳＤ－１出土土器
図版12　ＢＳＤ－１出土土器
図版13　ＢＳＤ－１出土土器、Ｂ区包含層出土土器、蓋形土製品、匙形土製品
図版14　ＢＳＤ－１出土土器
図版15　ＢＳＤ－１出土土器
図版16　ＢＳＤ－１出土土器
図版17　ＢＳＤ－１出土土器、Ｂ区包含層出土土器
図版18　Ｂ区包含層出土土器及び外部の特徴を持つ土器
図版19　Ｂ区出土木器
図版20　Ｂ区包含層出土石器
図版21　ＢＳＤ－１出土土器、Ｂ区包含層出土石器

図版22　ＣＳＫ－４、５、６、10、11、ＣＳＤ－５出土土器
図版23　Ｃ区土器群、ＣＳＤ－５出土土器及び高熱を受けた跡の残る土器片
図版24　Ｃ区出土石器
図版25　Ｃ区出土石器
図版26　Ｃ区出土石器及び木器
図版27　Ｄ区包含層出土土器
図版28　ＤＳＲ－１下層出土木器及び出土石器
図版29　関西電力東大阪変電所保管の木器
図版30　関西電力東大阪変電所保管の木器
図版31　関西電力東大阪変電所保管の木器

第1章　序　説

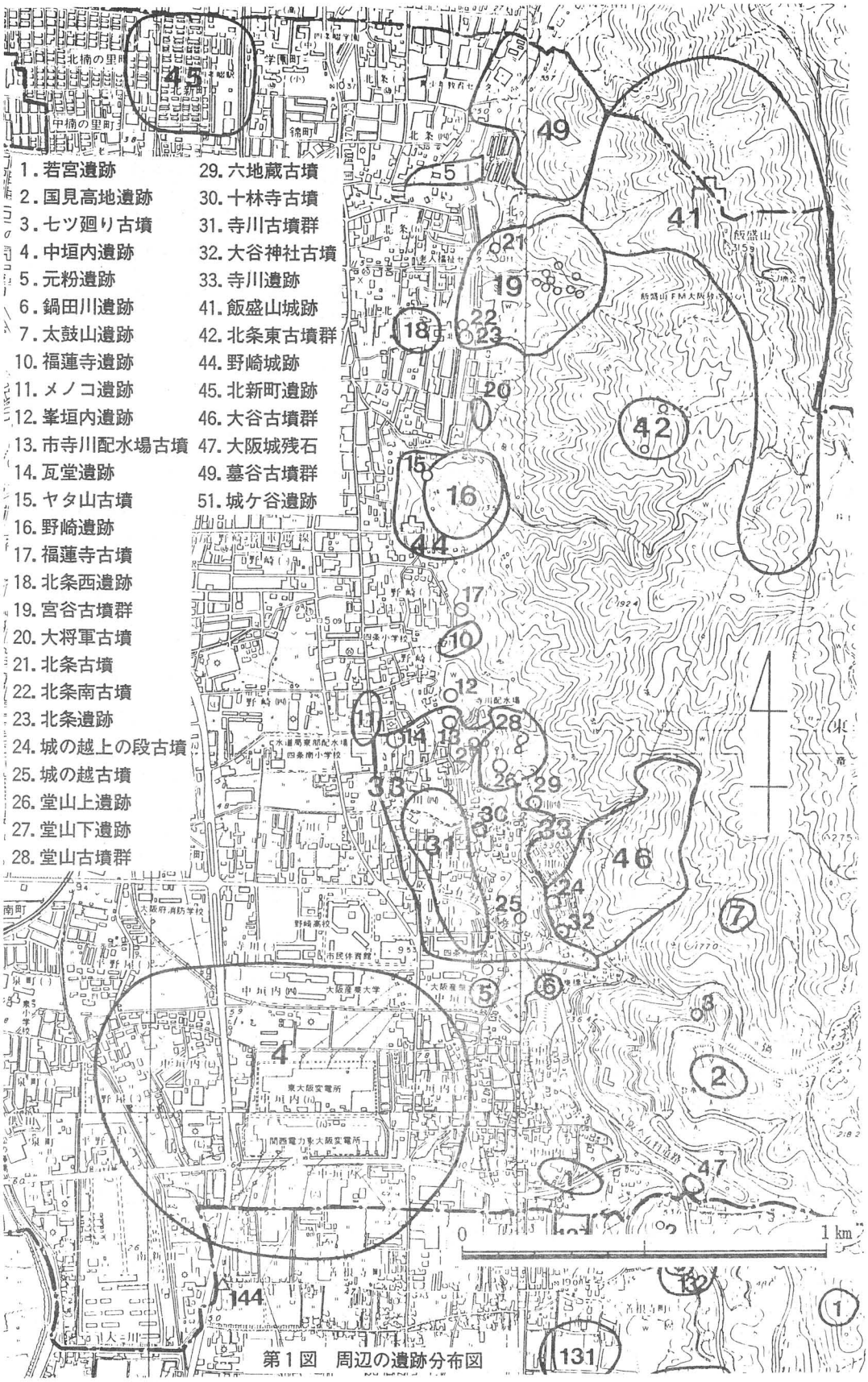
1．位置と環境

中垣内遺跡は大東市中垣内～東大阪市善根寺町にかけて所在する、推定で東西1㎞南北800mの範囲で広がっている遺跡である。遺跡は河内平野の北東部に位置しており、一昔前までは田園地帯であった。しかし、現在は関西電力株式会社東大阪変電所の広大な敷地以外は、宅地化などの開発が急速に進みつつある地域である。遺跡は東方の生駒飯盛山系より流れ出す大谷川、鍋田川などによって形成された扇状地の扇端部にあたる、標高3.5m～6.0mの地点に位置している。

河内平野には、縄文時代に始まる海進の現象により、河内湾が形成されていた。河内湾は現在の生駒山麓際まで及んでいたため、縄文時代の遺跡もおのずから、河内湾の縁辺部である生駒西麓地域や、或いは、高地であった上町台地に立地している。それよりも前の旧石器時代の遺跡は、生駒山地の北方に広がる枚方台地に数多く知られているが、本市域でも宮谷古墳群、北条遺跡で有舌尖頭器が出土している。[註(1)] 縄文時代の遺跡としては本遺跡の南方に東大阪市日下遺跡、馬場川遺跡があるが、残念ながら本市域では今のところ、北新町遺跡で縄文中後期、[註(2)] 城ケ谷遺跡で晩期の土器が出土しているのみで、[註(3)] それに伴う遺構は検出されていない。弥生時代になると遺跡の量、質はともに飛躍的に増大するが、弥生時代前期の遺跡としては本遺跡以外に、四条畷市雁屋遺跡、[註(4)] 東大阪市鬼虎川遺跡がある。いずれも河内湖縁辺部に立地している遺跡で拠点的集落として知られているが中期まで存続するようである。中期以降になると遺跡の立地場所は拡大し、丘陵状にもみられるようになる。中期の土器片が出土した国見高地性遺跡の他、[註(5)] 丘陵の各遺跡では後期の土器が出土している。[註(6)] 古墳時代になると鍋田川遺跡、[註(7)] 中垣内遺跡、北新町遺跡で前期の集落、水田跡が検出されているが、前期に属する古墳は今のところ本市域では見つかっていない。近くに存在する前期古墳は、四条畷市忍ケ岡古墳である。中期になると本市域でも堂山1号墳が築造されて以後、東方の丘陵地に古墳が造営されるようになる。[註(8)]

奈良時代から平安時代にかけての遺構は、寺川遺跡で奈良時代の柱穴が、[註(9)] 北新町遺跡で奈良時代水田跡が検出されている。[註(10)] 鎌倉時代では北新町遺跡で集落跡が検出されているが、[註(11)] 今のところこの時代の様相は明らかにされていない。

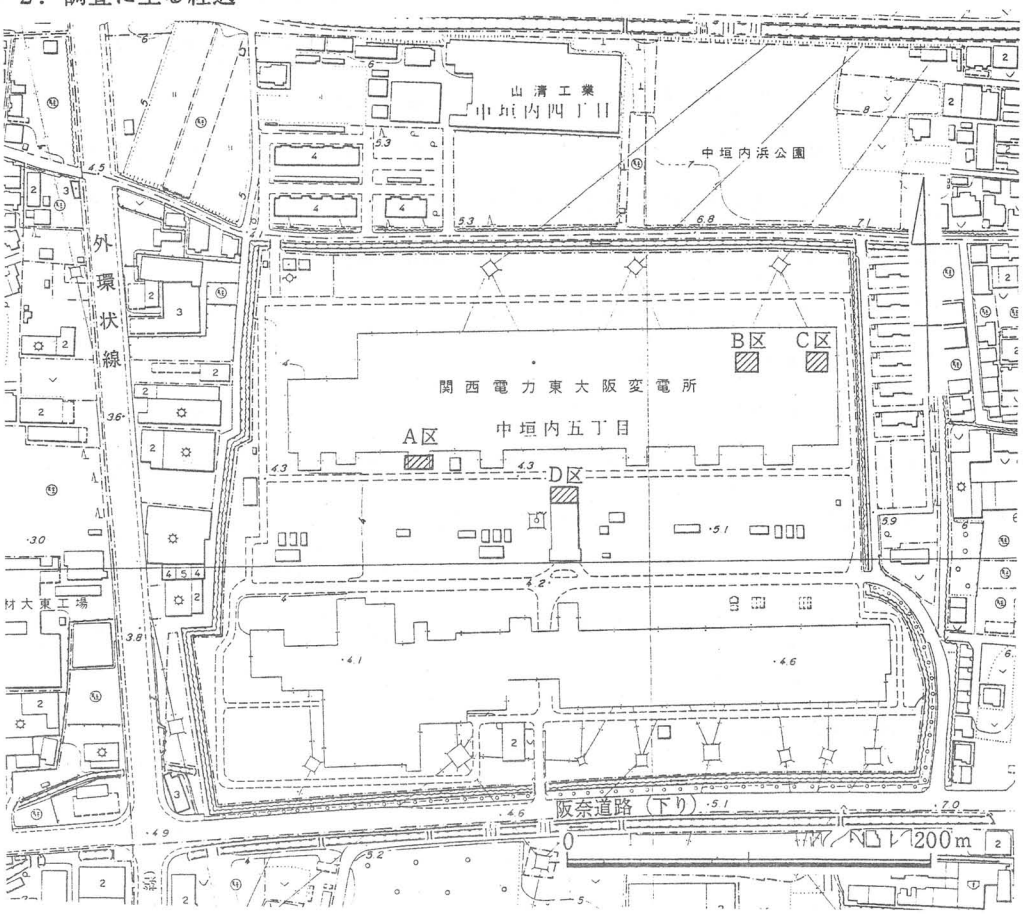
戦国時代では、一時、畿内支配に成功した三好長慶の居城であった飯盛山城や、キリシタンで有名な三箇サンチョの居城である三箇城がある。



第1図　周辺の遺跡分布図

江戸時代になると、古代河内湖は深野池としてその姿をとどめていたが、1704年の大和川付け替えを契機として、新田の開発が行われ、市内には今も新田の名が残っている。

2．調査に至る経過



第２図　調査区位置図

第１表　中垣内遺跡調査区一覧表

調査区名	所在地	面積	用途	調査期間	備考
A区(NGT-Ⅱ)	大東市中垣内	51㎡	遮断器取替	87.10.14～87.10.30	関西電力敷地内
B区(NGT-Ⅲ,88-1)	大東市中垣内5丁目3番1号	100㎡	遮断器取替	88.5.1～88.5.8	関西電力敷地内
C区(NGT-Ⅳ,88-3)	大東市中垣内3丁目	100㎡	遮断器取替	88.10.11～88.11.30	関西電力敷地内
D区(NGT-89-1)	大東市中垣内5丁目	127.5㎡	建物	89.7.25～89.8.18	関西電力敷地内
NGT-Ⅰ	大東市	714㎡	校舎	87.7.1～87.10.14	大阪産業大学構内 古墳時代前期集落跡
NGT-88-2	大東市中垣内2丁目793	53.13㎡	個人住宅	88.9.14	土師器、弥生土器片出土
NGT-88-4	大東市平野屋2丁目397-1他	238.92㎡	工場	88.10.26～88.12.3	遺物、遺構なし
NGT-88-5	大東市中垣内2丁目547-2,4	60㎡	共同住宅	88.11.1	旧水路、土師器、須恵器片
NGT-88-6	大東市平野屋2丁目346-1	1,694.3㎡	倉庫	88.11.8	遺物、遺構なし

中垣内遺跡は、昭和34年関西電力株式会社東大阪変電所建設の際に発見された遺跡である。現在、変電所の敷地面積は約12,000㎡と広大であるが、当時において発掘調査を実施

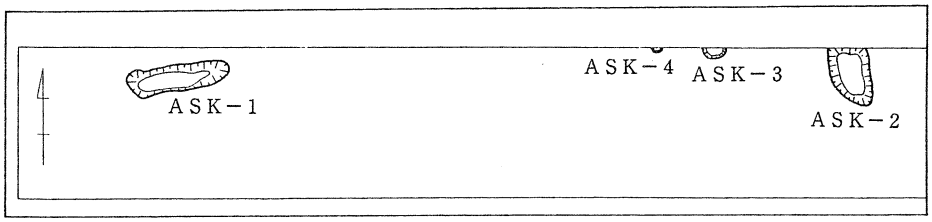
しえたのは、変電所敷地の北東隅（南地区）と敷地の北側（北地区）との２ケ所のみで、しかも15日間という短い調査期間であった。それにもかかわらず大量の遺物が出土し、南地区では一辺約２ｍの方形の竪穴住居跡が検出され、弥生時代前期土器や磨製石斧、石包丁、打製石鏃、獣骨、淡水産貝殻、炭化米などが出土し、北地区では東北から南西に走る杭列が検出され、弥生時代前期から後期の土器、小量の土師器、須恵器の他、磨製石斧、打製石鏃、木製鋤、網代が出土した。このように調査範囲は狭小であったが多くの成果が得られ、ここに弥生時代前期の集落が存在したことが判明した。出土した弥生土器は、小林行雄氏の『弥生土器集成』に掲載されており[註02]、集落の規模は未だ不明であるが、今日では寝屋川市高宮遺跡、四条畷市雁屋遺跡等と同様に、弥生時代前期の拠点的集落として位置付けられている重要な遺跡である。

その後長らく発掘調査の機会がなかったが、昭和62年７月に変電所敷地の北西にある大阪産業大学校内において調査を実施し、古墳時代前期の堀立柱建物跡や竪穴住居跡が検出され、古墳時代に入っても、集落が営まれていたことが裏付けられた。

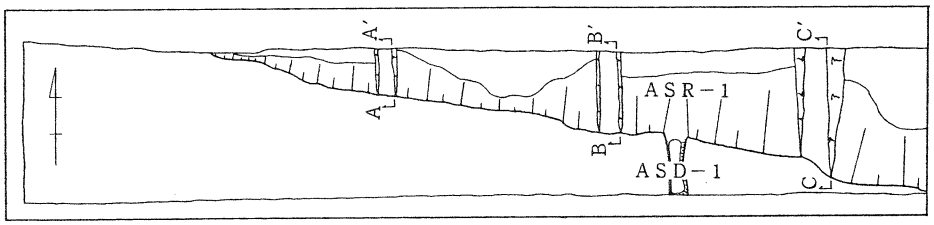
変電所敷地内でも機器の老朽化のため順次建替え工事が行われるようになり、それに伴う発掘調査を実施した。調査位置と調査期間は図と表に示すとおりであるが、本報告では便宜上、敷地内で調査を実施した地区を順番にＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ区とし、また参考までに敷地以外の調査地点も表に示した。

第2章　調査成果

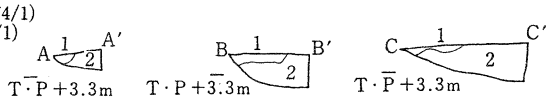
1．A区（NGT－Ⅱ）の調査



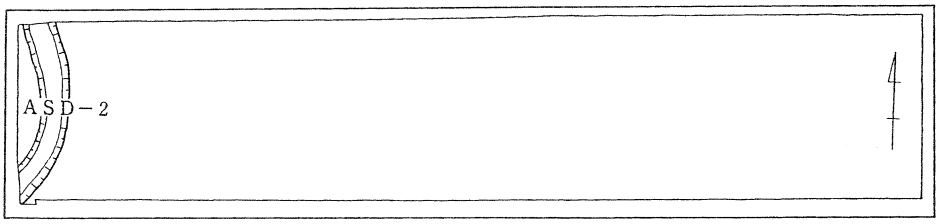
第1遺構面



1．暗オリーブ灰色シルト黄砂層（5GY4/1）
2．明オリーブ灰色粗層～礫層（2GY7/1）



第2遺構面



第3遺構面

第3図　A区遺構面平面図

(1) 基本層序

A区では、60以上の土層と3時期の遺構面を確認している。それらを仔細にみていくとかなり煩雑になるため、ここでは大まかな説明を加えることにとどめておくことにする。なお詳細は、土層断面図（第4図）を参照されたい。

1層（盛土）　層厚60～80cm。変電所建設時のものである。

2層（黒褐色粘質土）　旧耕作土である。変電所建設前の地表で、変電所建設時の削平の

第2表　A　区　遺　構　一　覧　表

遺構名	形状	平面規模(縦×横)cm	深さcm	埋土	備考
第1遺構面					
SK－1	隅丸長方形	44×164	9～11	黒色粘質土	植物遺体を多量に含む
SK－2	隅丸長方形	96× 62	12	〃	
SK－3	不整な円形	38× 38	7	〃	
SK－4	不整な円形	6× 18	6	〃	
第2遺構面					
SR－1		236×1160	6～60	暗オリーブ灰色シルト質砂層 明オリーブ灰色粗砂～礫層	
第3遺構面					
SD－2	弓状	302× 56	3～5	黒色粘質土	

影響を受けているものの、層厚を異にしながら調査区全体で認められる。

3層（暗青灰色砂混じり粘質土）　水田の床土であろう、鉄分とマンガンの沈着がみられ、調査区全体で認められる。

4～13層　粘質土、シルトなどが交互に堆積する。

14層（黄褐色粘質土）、15層（暗灰黄色砂混じり粘質土）、16層（灰色砂混じり粘質土）断面で杭を検出している。目立った出土遺物はないが、伊万里染付け小片を含んでおり、調査では検出しえなかったが近世の遺構面であった可能性が強い。なお杭は水路などの遺構に伴うものであろう。この遺構面のベースとなっている層は14層及び21層である。以下47層（灰色細砂）までは砂、粘土、シルトが交互に堆積しているが、遺構面は存在しなかった。

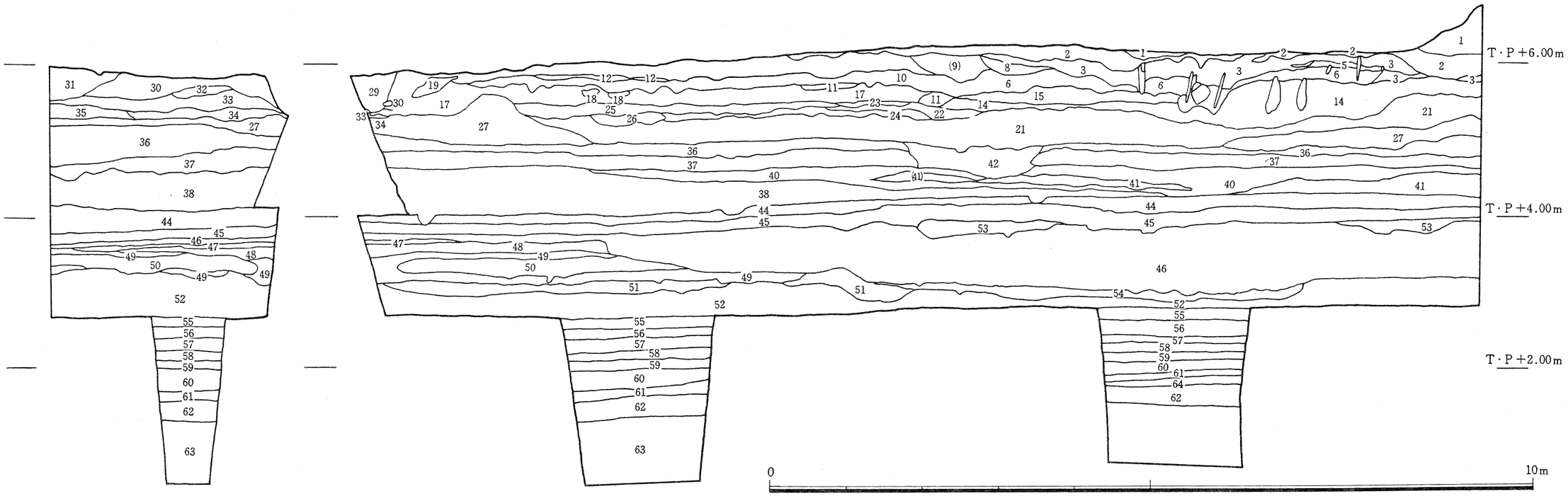
47層（灰色細砂）　第1遺構面のベースとなる層であり、また、第2遺構面で検出した自然流路ＡＳＲ－1の埋土である。砂層中には植物遺体が含まれていた。

(2) 遺構（第3図・第2表）

Ａ区では、3面の遺構面を検出しているが、14層及び21層をベースとする近世の遺構面を含めると計4面の遺構面が存在したことになる。

第1遺構面では4個の土坑を検出している。土坑内の埋土はいずれも黒色粘質土で、そのうちＡＳＫ－1・2から弥生土器片が出土しているが、他の土坑からは遺物は出土しなかった。

第2遺構面では調査区の北側で自然流路ＡＳＲ－1を検出している。肩の1部を検出しただけで全体の規模は明らかではないが、東から西へ流れていた自然河川流路であろう。



1　盛　　土
2　黒褐色粘質土　(2.5Y　3/1)
3　暗青灰色砂混じり粘質土　(10BG　4/1)
4　灰オリーブ色粘質土　(5Y　5/3)
5　灰オリーブ色粗砂混り粘質土　(5Y　6/2)
6　にぶい黄橙色粗砂　(10YR　6/4)
7　灰色粘質土　(N　6/)
8　暗オリーブ灰色粘質土　(2.5GY4/1)
9　灰色粘質土　(5Y　4/1)
10　オリーブ灰色砂混り粘質シルト(2.5GY6/1)
11　緑灰色細砂混りシルト　(7.5GY5/1)
12　オリーブ灰色シルト　(2.5GY5/1)
13　灰オリーブ砂混り粘質土　(7.5Y　6/2)
14　黄褐色粘質土　(2.5Y　5/4)
15　暗灰黄色砂混り粘質土　(2.5Y　5/2)
16　灰色砂混り粘質土　(5Y　5/1)
17　灰色砂混り粘質土　(7.5Y　5/1)
18　灰色粘質土　(10Y　5/1)
19　灰色砂礫混り粘質土　(5Y　5/1)
20　暗灰色粘土　(N　3/)
21　暗青灰色砂混り粘質土　(10BG　3/1)
22　暗緑灰色粘土　(10G　4/1)
23　灰白色細砂　(N　8/)
24　青灰色粘質シルト　(5B　5/1)
25　青灰色細砂混りシルト　(5B　6/1)
26　青灰色粘質土　(5B　4/1)
27　暗緑灰色砂層　(10GY　4/1)
28　青灰色砂層　(5B　5/1)
29　攪　　乱
30　灰色砂混り粘質土　(5Y　5/1)
31　暗青灰色砂混り粘質土　(5BG　4/1)
32　灰色砂礫混り粘質土　(7.5Y　5/1)
33　暗灰黄色砂混り粘質土　(2.5Y　4/1)
34　にぶい黄褐色粘質土　(10YR　5/3)
35　黄灰色砂混り粘質土　(2.5Y　5/1)
36　暗緑灰色砂層やゝ粘性あり　(5G　3/1)
37　黒色砂　　やゝ粘性あり　(N　2/)
38　暗オリーブ灰色砂層～礫（5GY 4/1）ラミナー状の粘質土
　　暗オリーブ灰色（2GY 4/1）との互層
39　オリーブ灰色粘質土　(2.5GY5/)
40　オリーブ黒色粘質土　(5GY　2/1)
41　暗緑灰色粘質土（10GY 4/1）と中粒砂との互層
42　オリーブ灰色粗砂層　(2.5GY6/1)
43　明褐色砂層　(7.5YR5/6)
44　黒色粘質土　植物遺体を含む　(7.5YR2/1)
45　黒色粘質土　一部細砂との互層、植物遺体含む　(2.5Y　2/1)
46　灰色細砂層、北壁では粗砂～礫又植物遺体を多量に含む(5Y 5/1)
47　黒色シルト　やゝ粘性あり　(N　1.5/)
48　灰色シルト　(7.5Y　4/1)
49　黒色シルト質粘土　植物遺体を含む　(10Y　2/1)
50　黒色細砂～粗砂層やゝ粘性あり　(5YR1.7/1)
51　暗オリーブ灰色シルト一部細砂との混層　(5GY　4/1)
52　灰色粗砂～礫層(7.5Y 5/1)西壁では暗灰色シルト(N 3/)が
　　ラミナー状に入る　北壁の東天板付近で黒褐色粘土(5Y 2/1)
　　がラミナー状に入る
53　赤褐色砂質粘土　植物遺体含む　(2.5YR1.7/1)
54　黒褐色粘土　植物遺体を含む　(5Y　2/1)
55　黒色粘土　植物遺体をわずかに含む　(10YR1.7/1)
56　暗灰色粘土　(N　3/)
57　黒色砂質粘土　(7.5YR1.7/1)
58　暗灰色粘土　(N　3/)
59　黒色粘土　(7.5YR2/1)
60　黒色粘土、植物遺体を含む　(5YR1.7/1)
61　灰色砂質粘土　(5Y　4/1)
62　灰色中粒砂と細粒砂との互層(7.5Y　6/1)
63　灰色粗砂　(7.5Y　6/1)
64　灰色粗砂と中粒砂との混層　(5Y　6/1)

第４図　Ａ区北壁土層断面図

埋土は、上層が暗オリーブ灰色シルト質砂層で、下層が暗オリーブ灰色粗砂が堆積しており、遺物は数点の自然木が出土しているだけで、土器は出土していない。

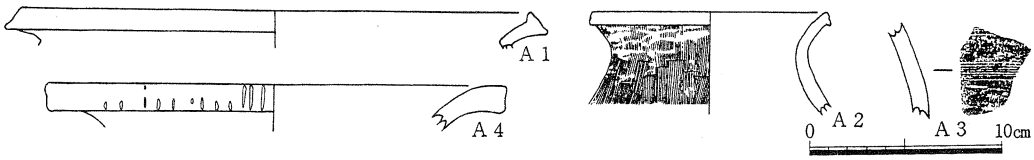
第３遺構面では調査区の西側で溝ＡＳＤ－２を検出しただけである。溝内の埋土は黒色粘質土で、遺物は出土していない。

調査の結果、Ａ区では遺構・遺物共その密度は希薄であった。

(3) 出土遺物

土器（第５図）

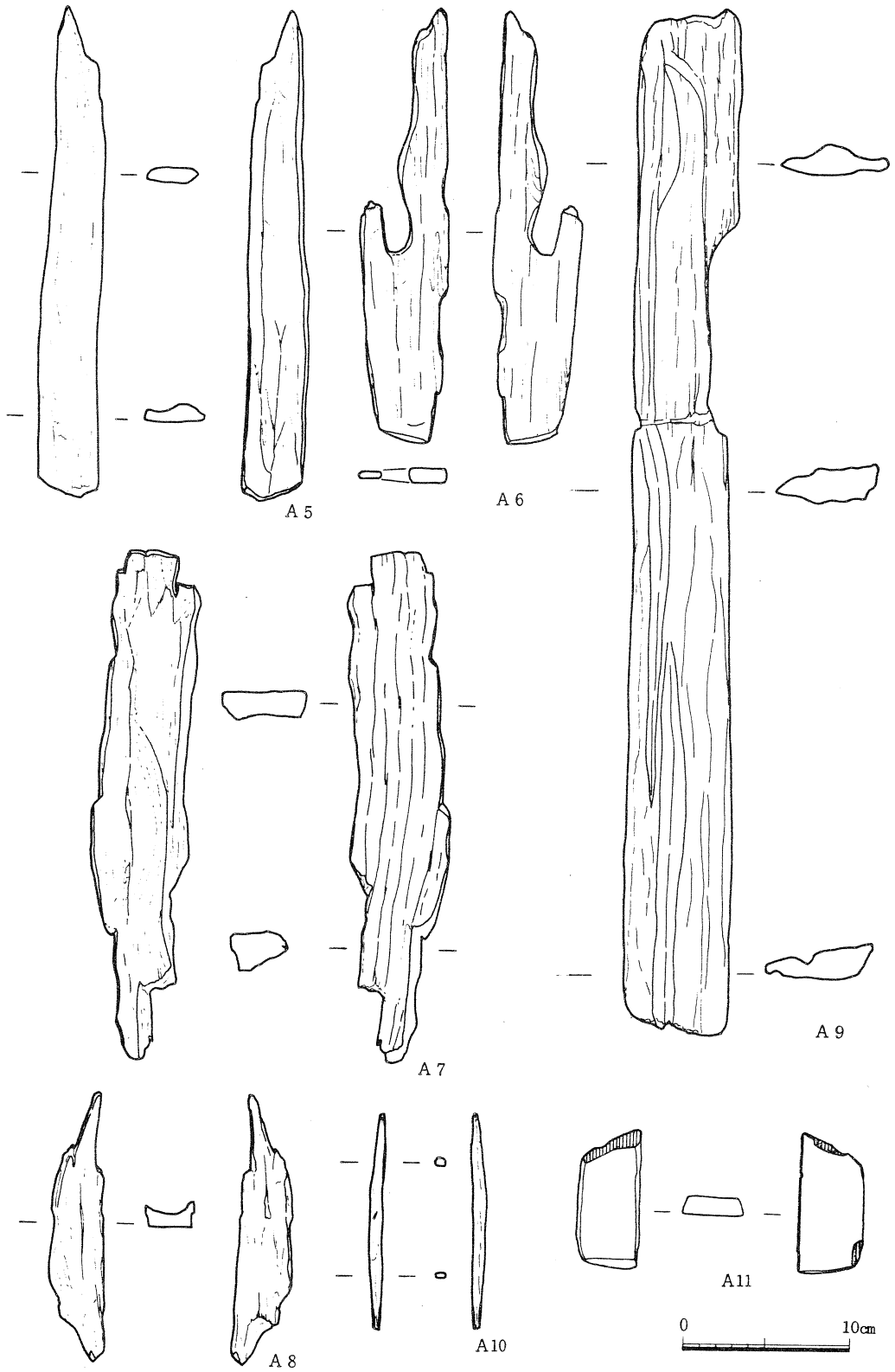
土器はいずれも摩滅が激しいため時期や機種の判別し難いものがほとんどであり、辛うじて数点を図化し得たにとどまった。Ａ１～３までが包含層出土で、Ａ４がＡＳＫ－２出土である。いずれも弥生土器で中期に属するものであろう。



第５図　Ａ区出土土器

木器（第６図）

出土した木器は、自然木か人口のものかの判断は困難であり、何らかの目的、用途によって板状に加工したと推定されるものもあるが、残念ながら製品名を特定することはできなかった。Ａ５～９・11は板状、Ａ10が棒状を呈する。Ａ10は棒状に加工されており、両端は尖っている。刺突具の１種か。



第６図　Ａ区出土木器

2．B区（NGT－Ⅲ）の調査

(1) 基本層序（第７図）

B区は、変電所敷地内の東側に位置し、昭和36年の調査で弥生前期の遺構を検出した北東地区からは、南へ約 150mの距離にある。ここでは、調査区の北壁断面（A－A’）を参考にして説明することにする。

１層（盛土）

２層（黒褐色粘質土～暗赤褐色粘質土）　旧耕作土で、次の３層とともに変電所建設時の削平の影響をかなり受けている。

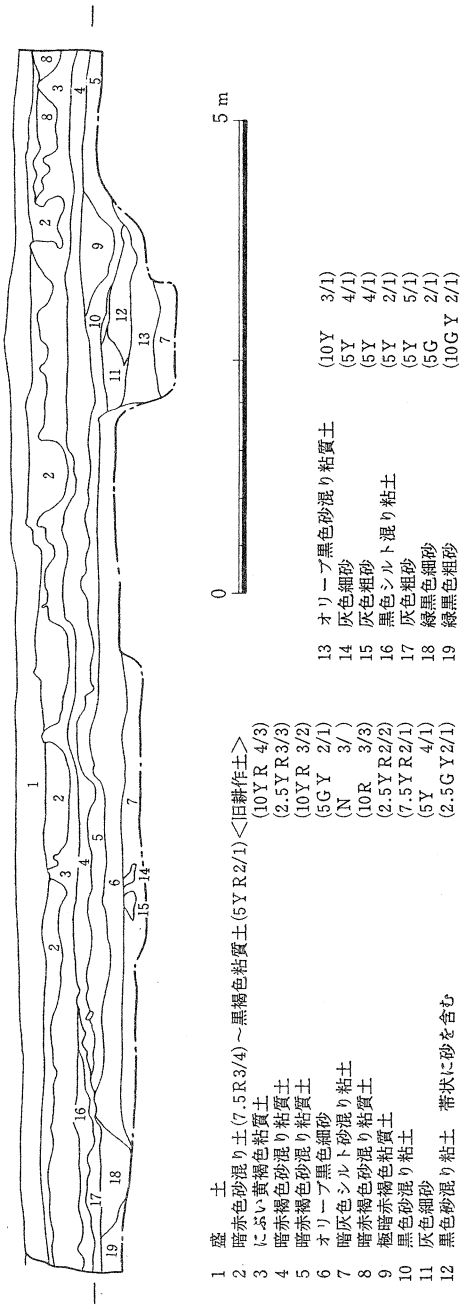
３層（にぶい黄褐色粘質土）　水田の床土と考えられる。遺物は近世の染付や瓦器の他、土師器、須恵器等が含まれている。

４層（暗赤褐色砂混じり粘質土）　調査区全体で認められる弥生時代～古墳時代の遺物が混在する遺物包含層である。

５層（暗赤褐色砂混じり粘質土）　主に弥生時代の遺物を含むが、前期の遺物がほとんどであり、若干中期～後期の遺物が含まれる。

６層（オリーブ黒色細砂）　若干、シルトと粘質土が混ざっているため固くしまっている。遺物は、前期のものが多少含まれる程度である。この層の上面で弥生前期の遺構面を検出している。

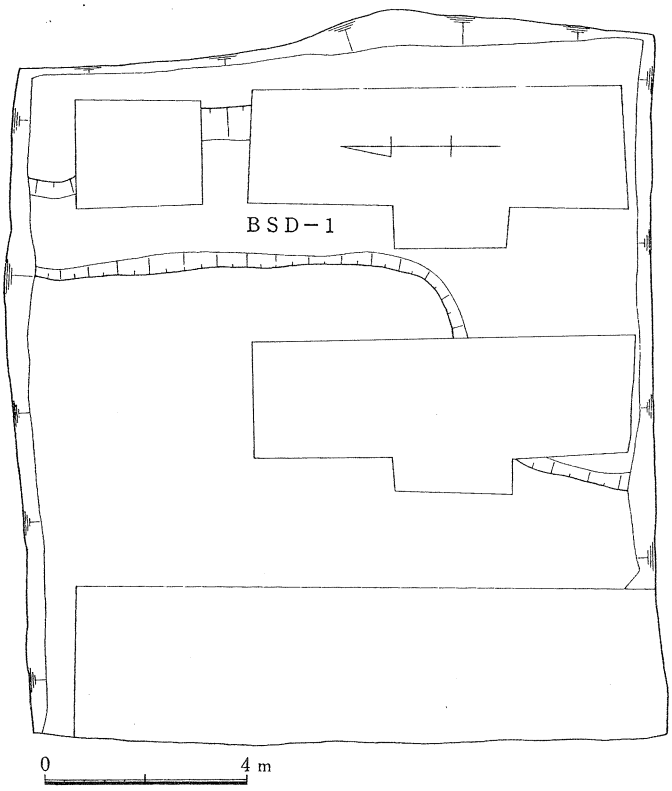
７層（暗灰色シルト混じり粘土）　今回の調査で検出した最下層の層で、遺物は全く含まれておらず、今回の調査では地山と考えた。



第７図　B区北壁土層断面図

(2) 遺構（第８・９図）

遺構面は、後世の削平による影響が大きく、６層上面で、弥生時代前期の遺構面を検出



第8図　B区BSD−1全体図

しただけである。検出した遺構は溝BSD−1が一条のみで、他の遺構は検出されなかった。

BSD−1は、調査区の東側で検出しており、調査区内をほぼ南北方向に走る溝であり、南北両端は調査区外へ続いている。幅 2.4〜5mで、深さは 0.4〜 0.8mを測る。埋土は砂質土若しくは砂混じりの粘質土で、遺物は、完形品を含む大量の前期の土器と数点の木製品、石器が出土している。

(3)　出土遺物

土器

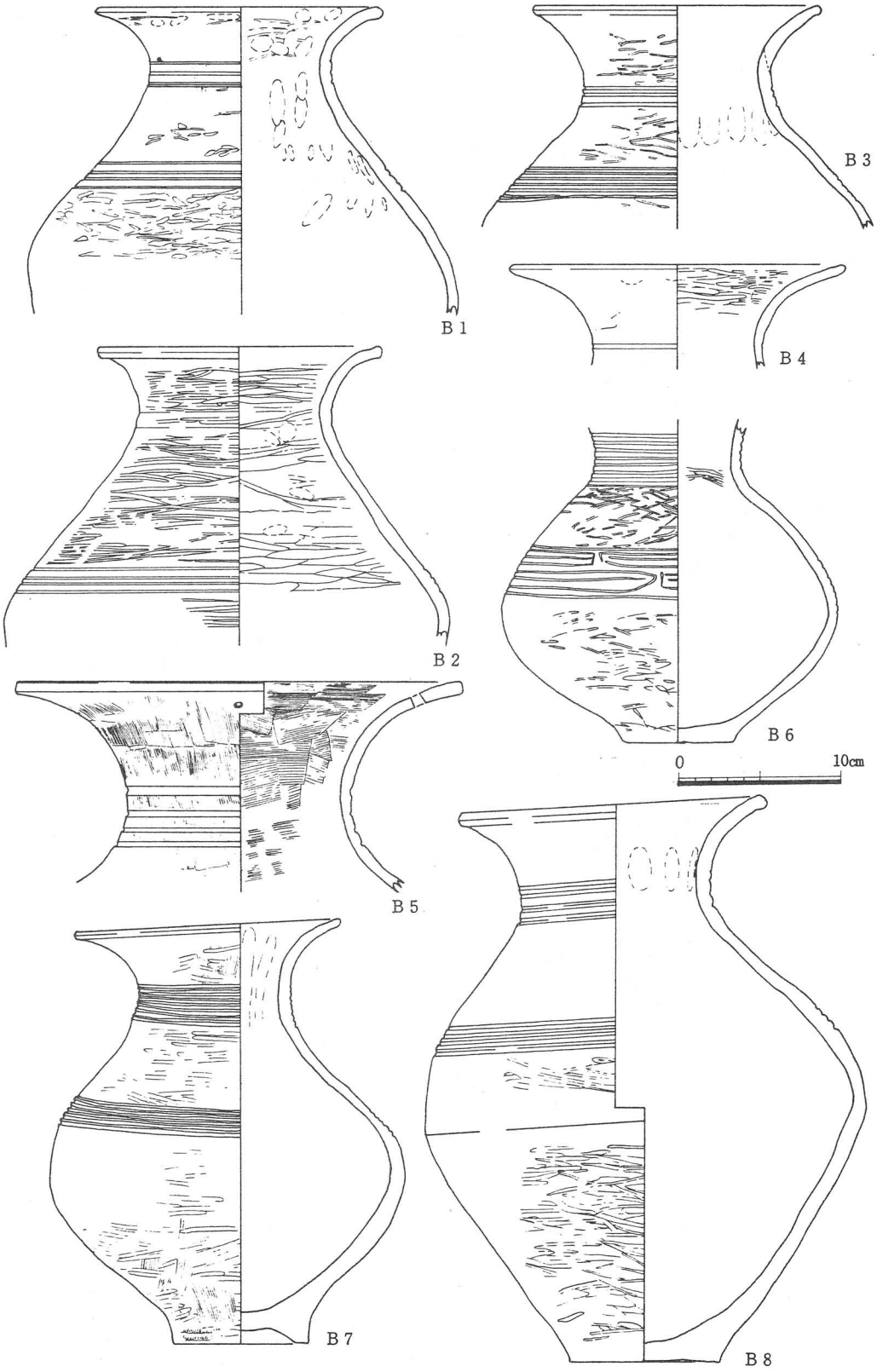
出土土器は上層の遺物包含層から小量の須恵器、土師器、瓦器が出土している他は、ほとんどが弥生時代の土器である。弥生時代は前期から中期のものが出土しており、第Ⅰ様式〜第Ⅲ様式の土器が認められる。出土量は第Ⅰ様式の土器が圧倒的に多く、主としてBSD−1からの出土である。尚、土器の詳細については、本文末の観察表に記した。

BSD−1出土土器（第10〜15図）

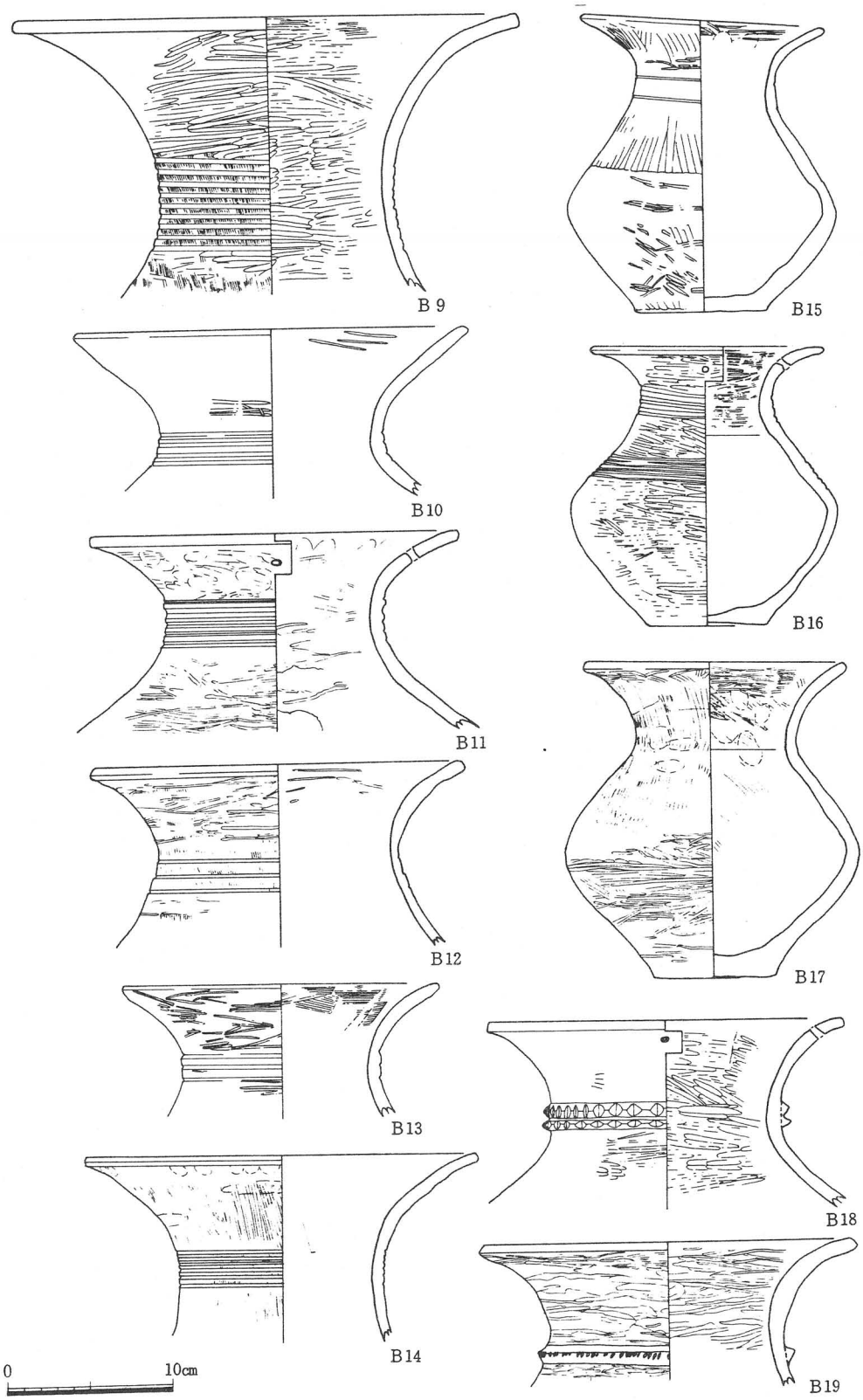
BSD−1からは完形品を含む大量の前期土器が出土しているが、ここに掲載しているのはごく一部に過ぎない。器種別にみると壺、無頸壺、甕、鉢の他、甕蓋（B56・57）があり、また、ミニチュアの壺（B25)、甕（B28)、鉢（B26・27）もある。

壺は肩の張った胴部に外反する口頸部をもつものが大半を占める。短い口頸部に口縁部がラッパ状に大きく開くものや、比較的長い口頸部をもつものがある。文様は頸部と胴部に、一条から数条のヘラ描き沈線文が施されるものがほとんどであるが、胴部に疑似流水

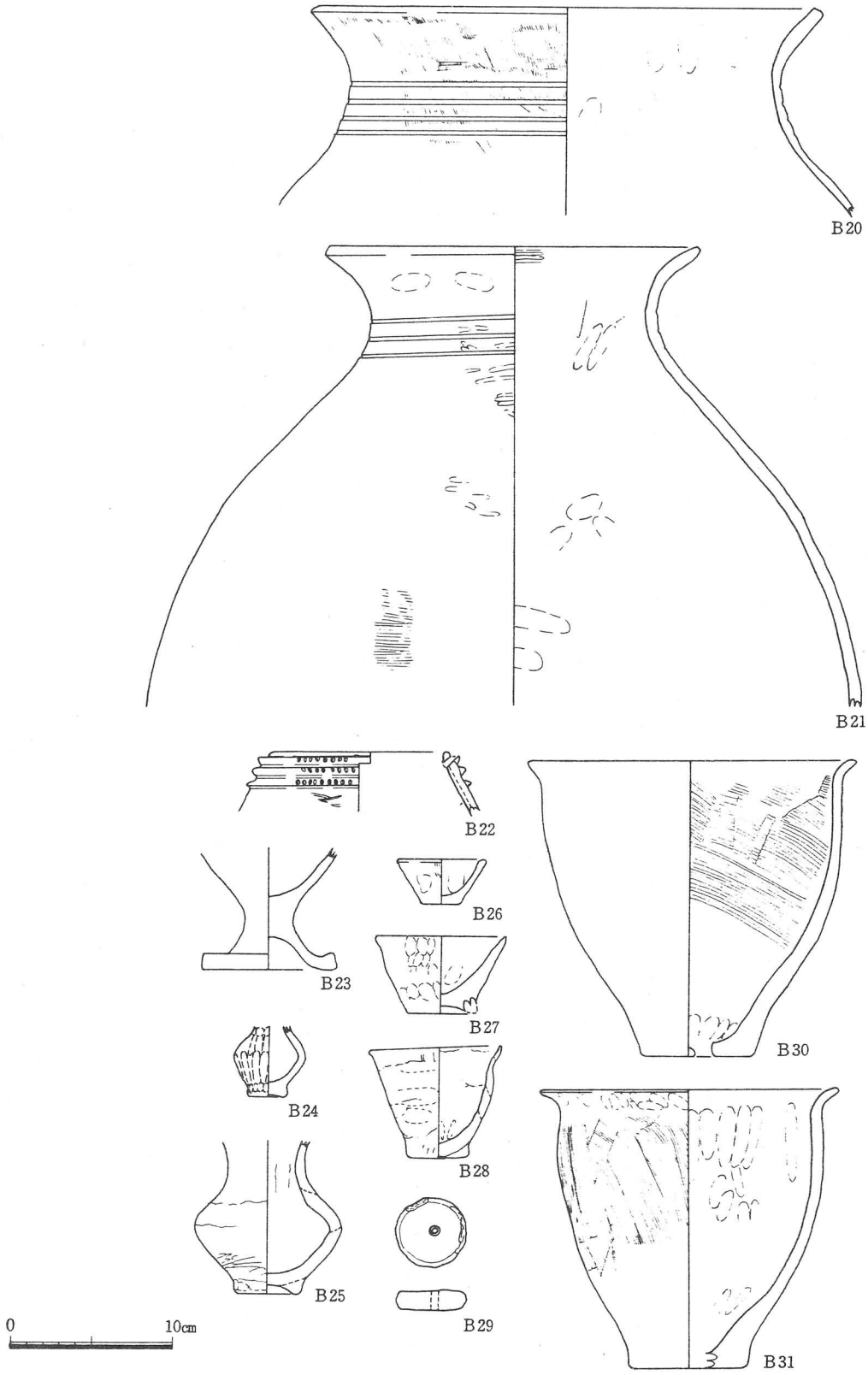
第9図　ＢＳＤ－１　遺物出土状況



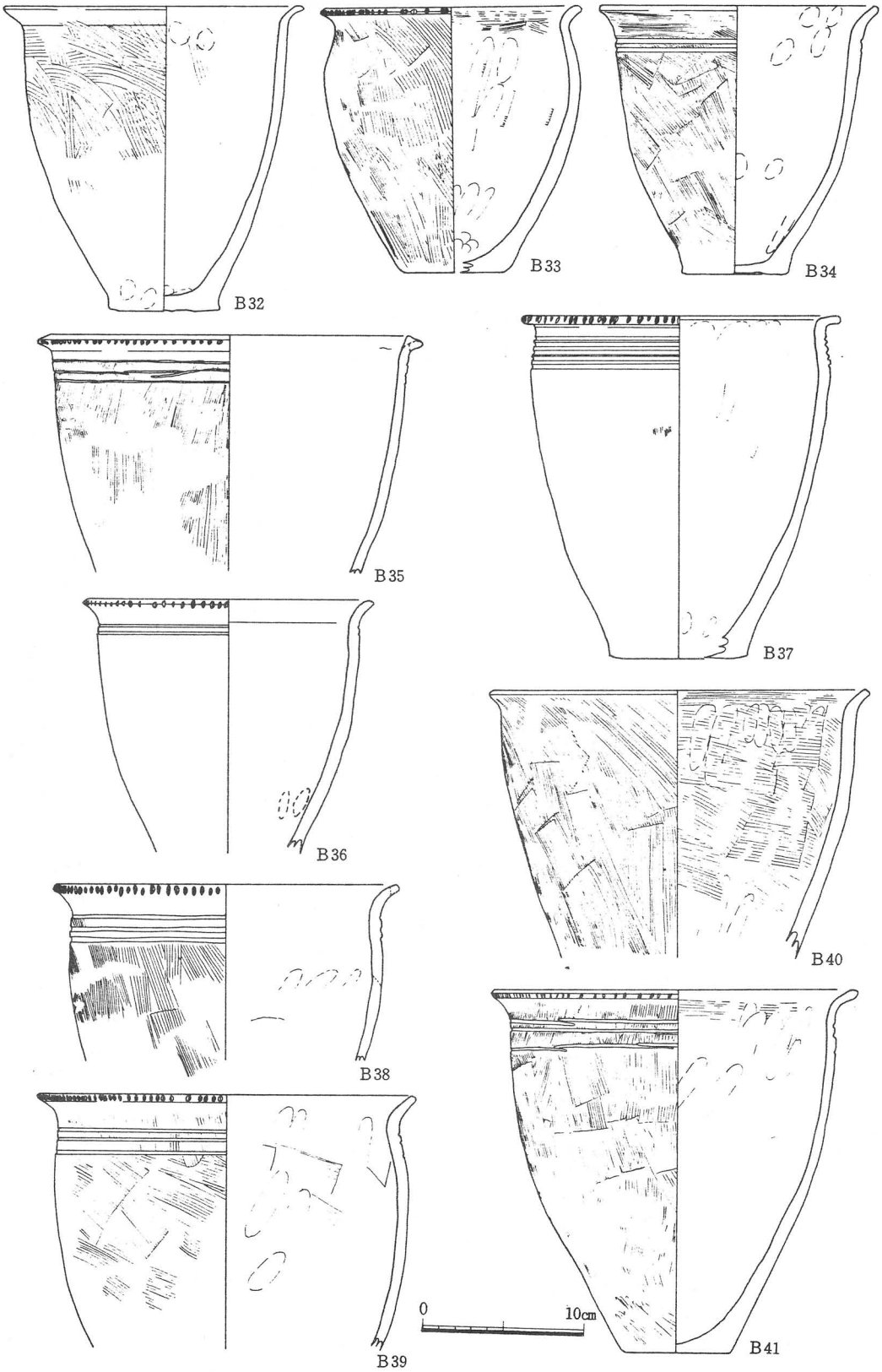
第10図　ＢＳＤ－１　出土土器(1)



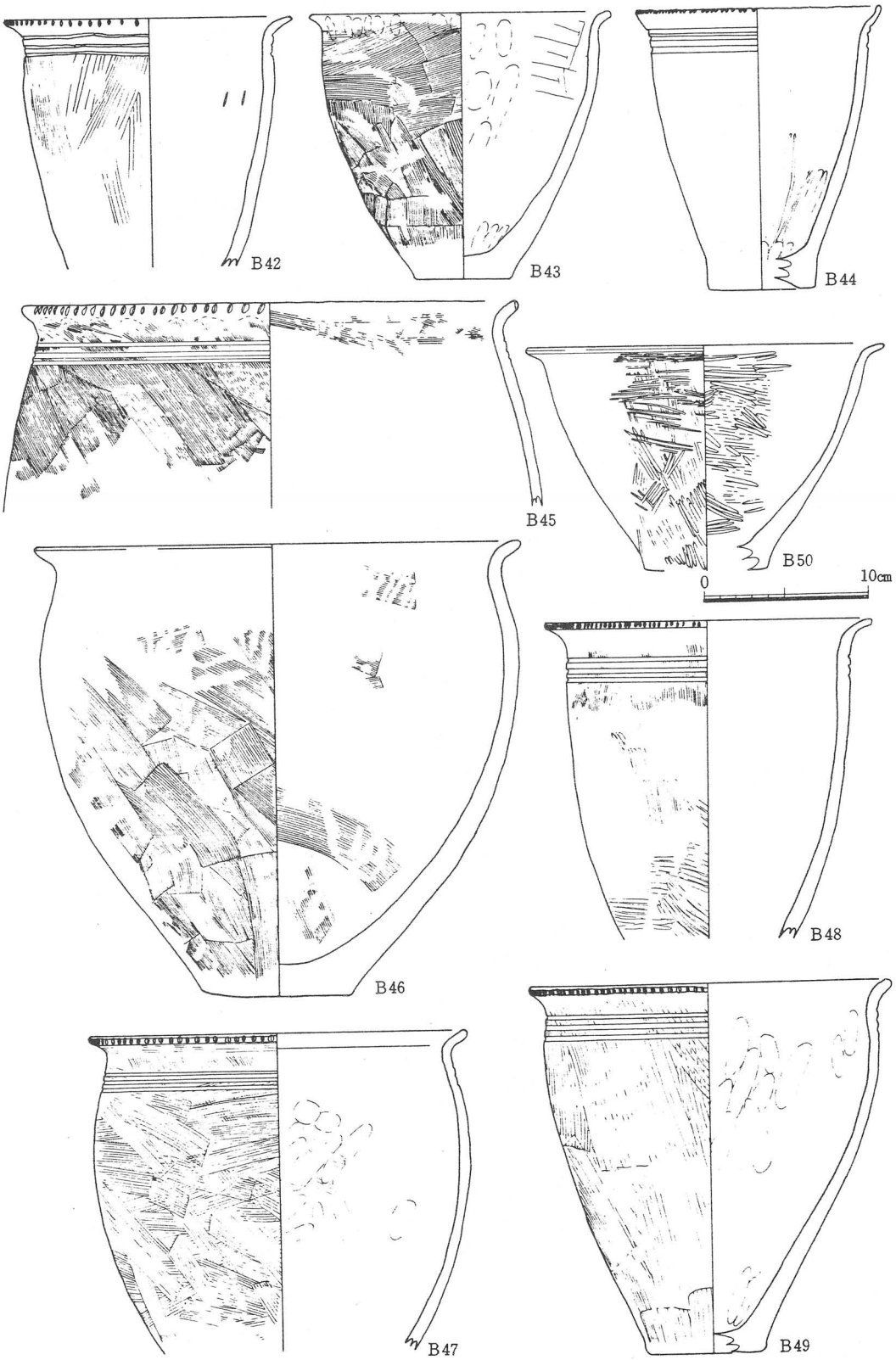
第11図　ＢＳＤ－１　出土土器(2)



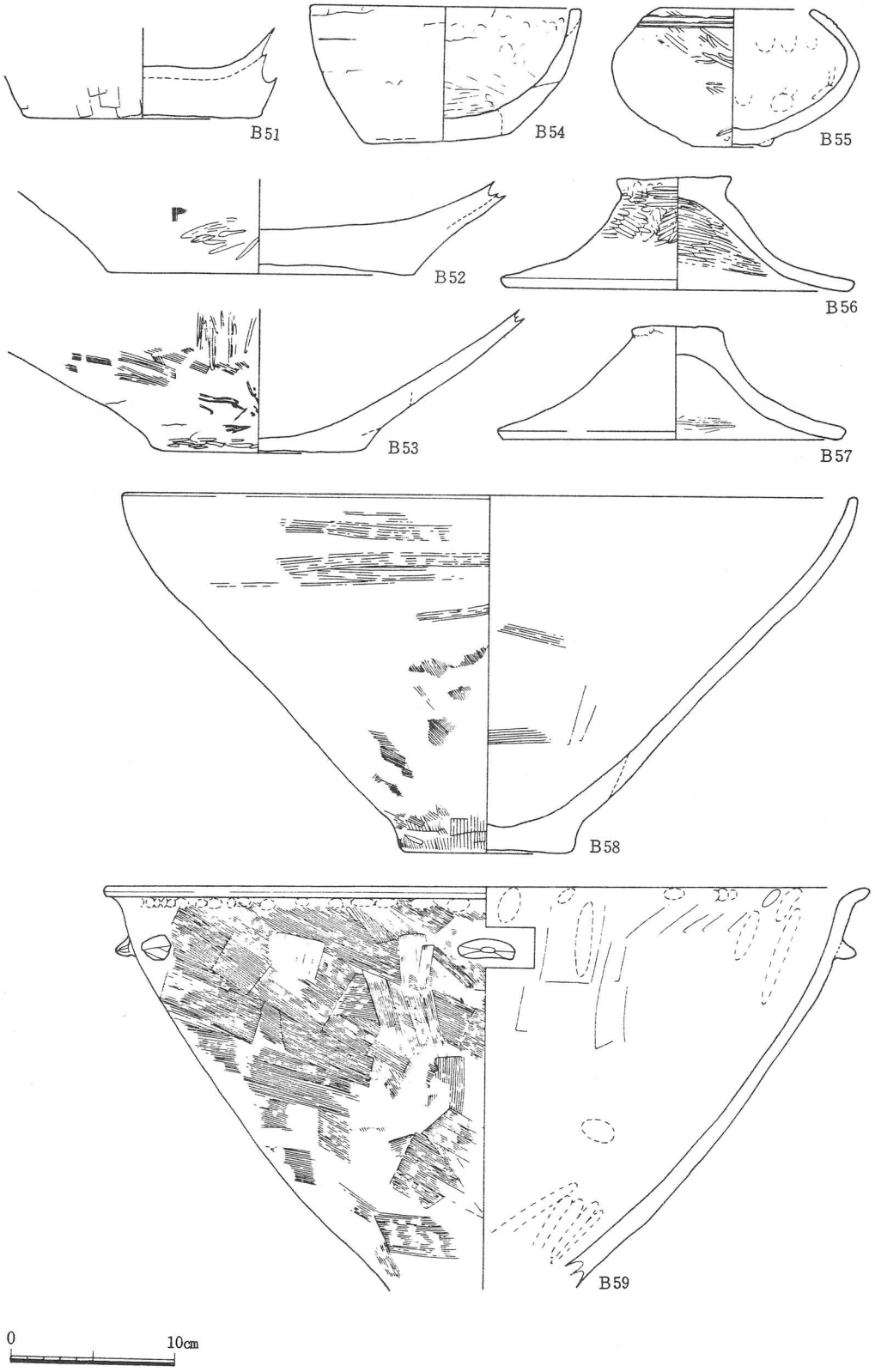
第12図　ＢＳＤ－１　出土土器(3)



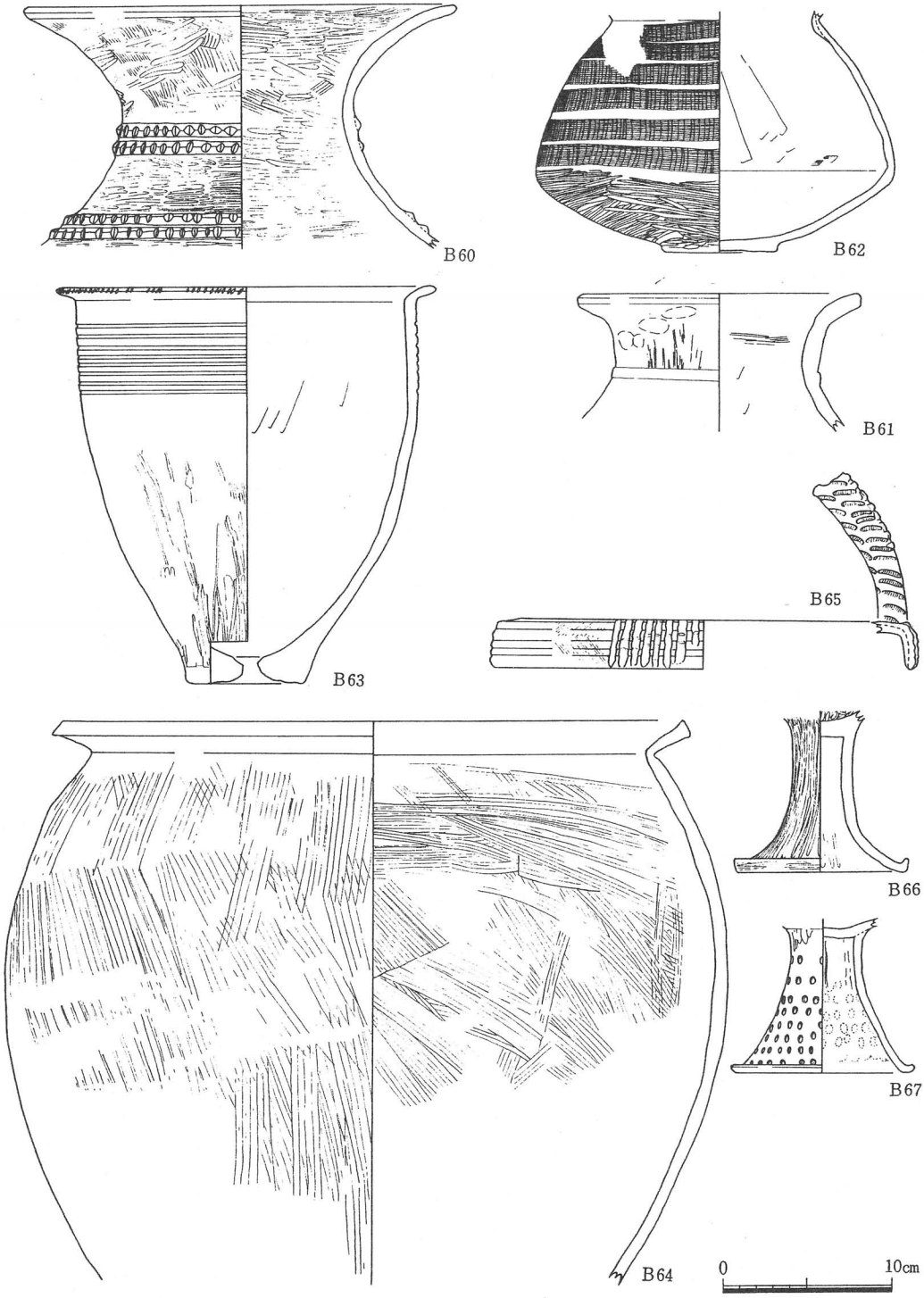
第13図　ＢＳＤ－１　出土土器(4)



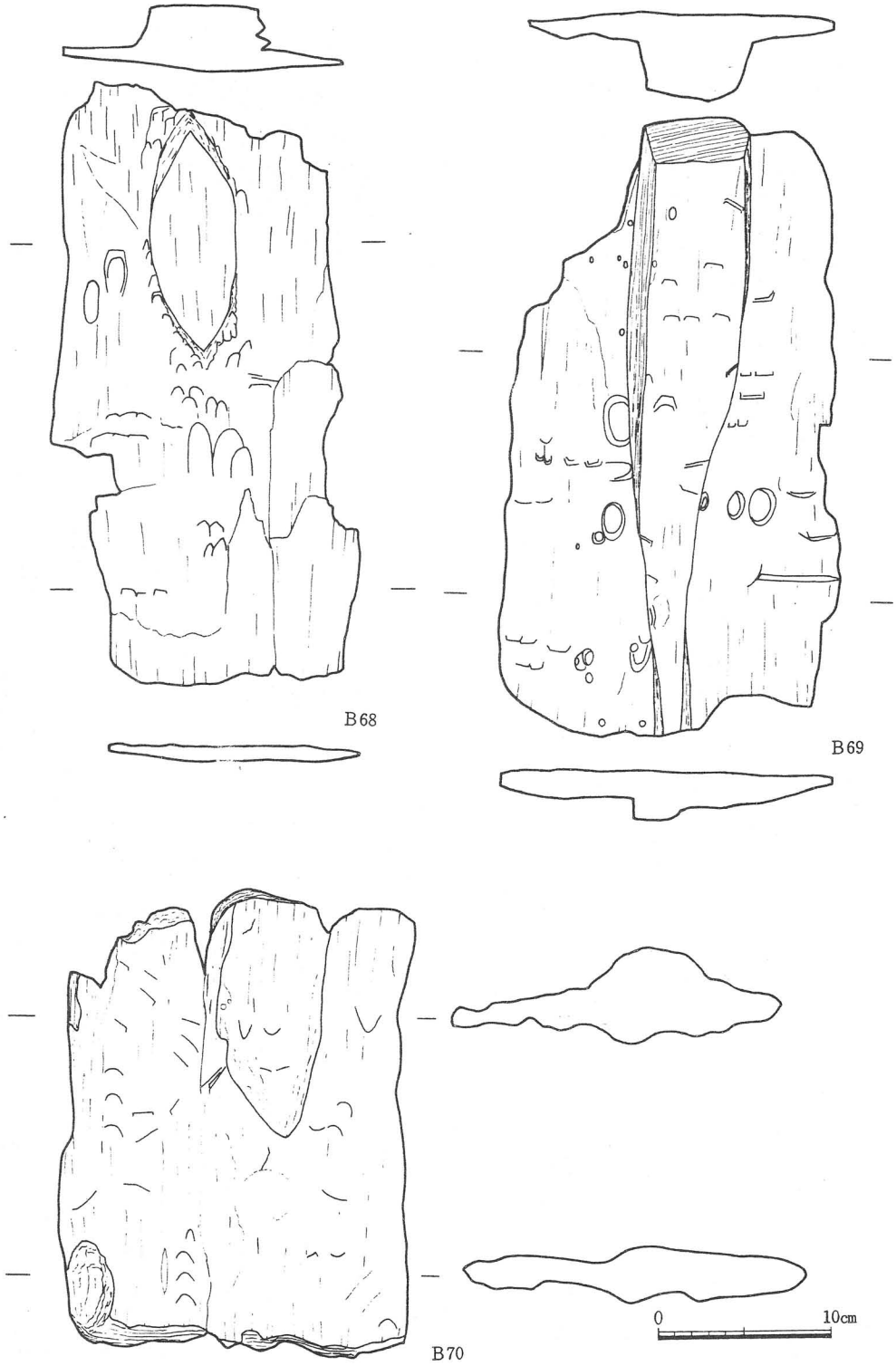
第14図　ＢＳＤ－１　出土土器(5)



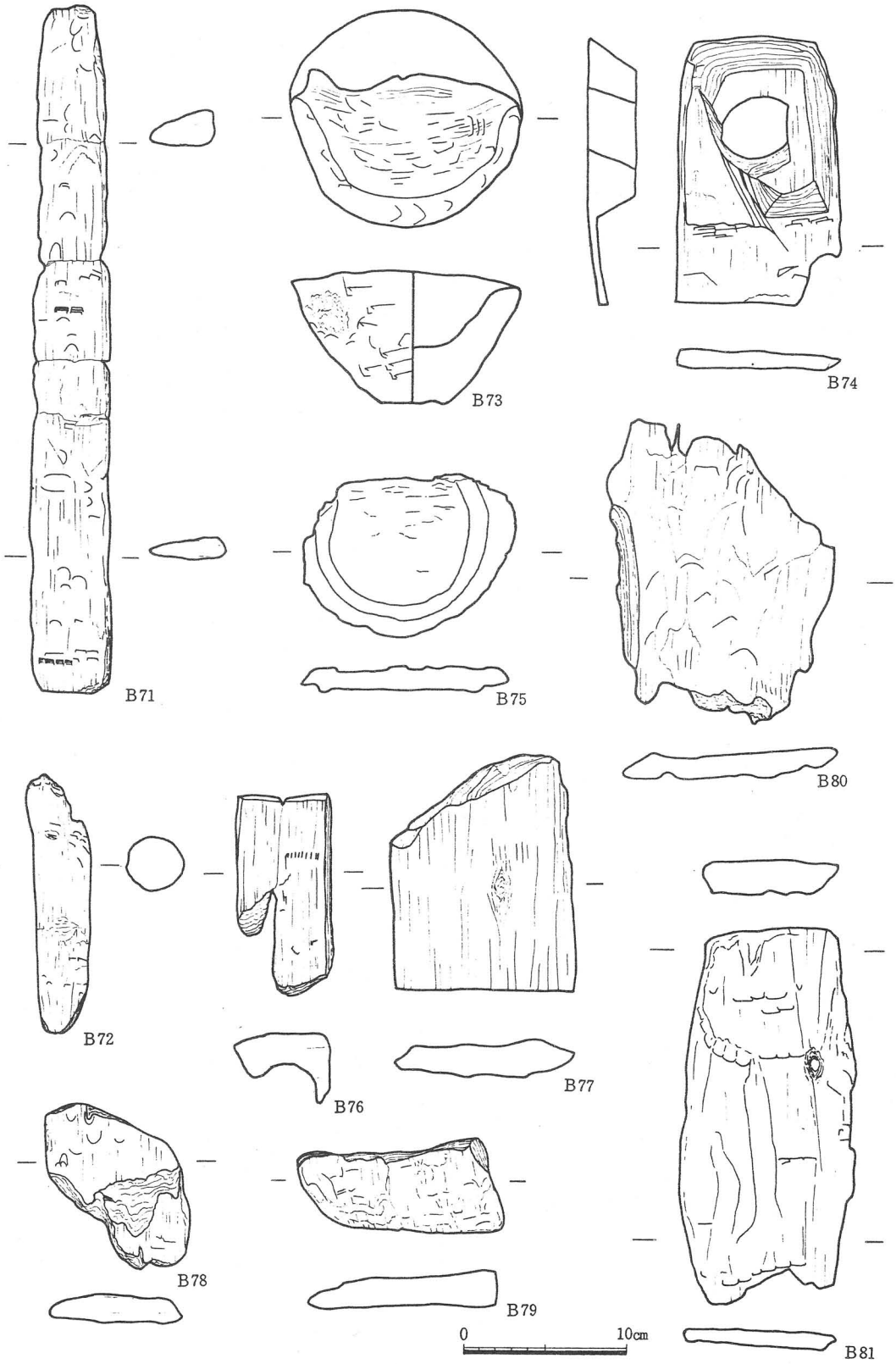
第15図　ＢＳＤ－１　出土土器



第16図　B区包含層出土土器



第17図　B区出土木器(1)

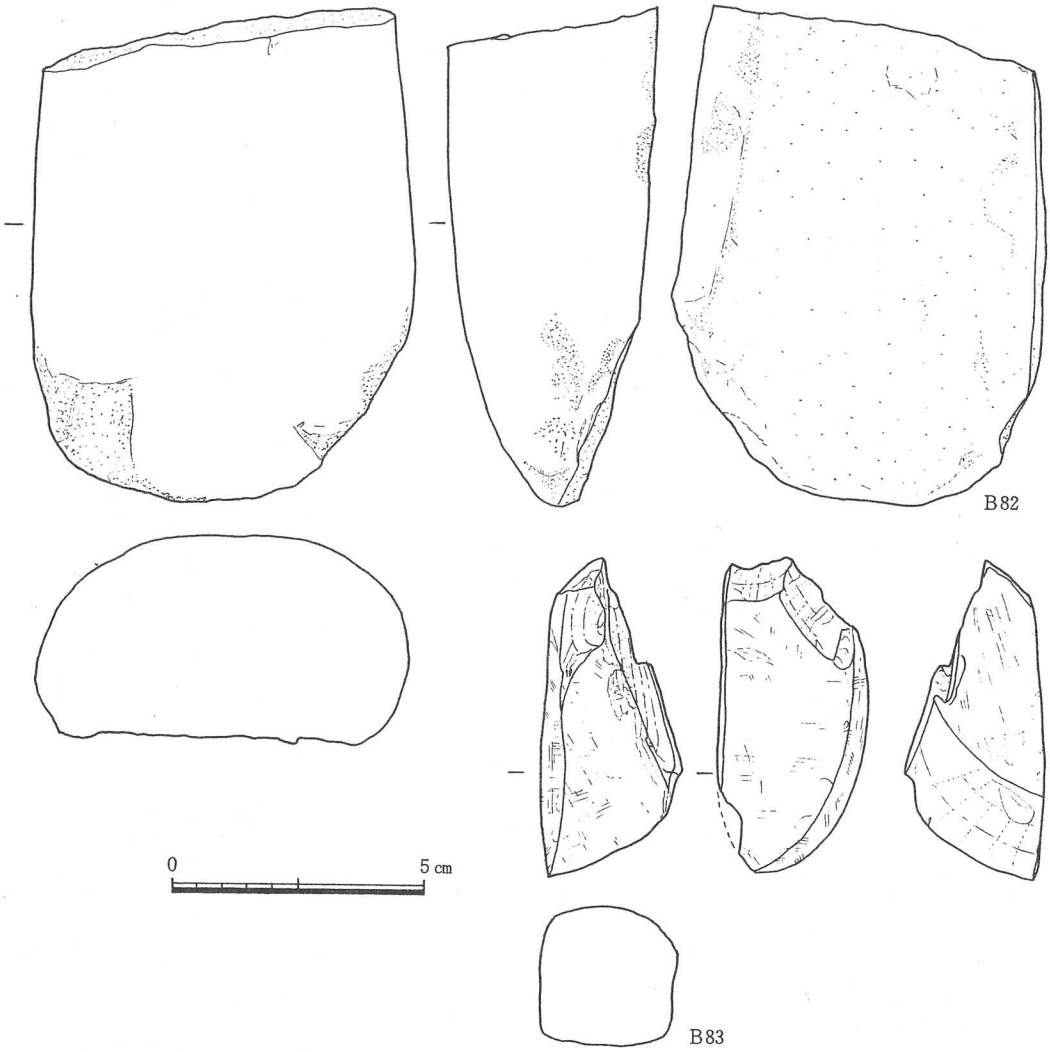


第18図　B区出土木器(2)

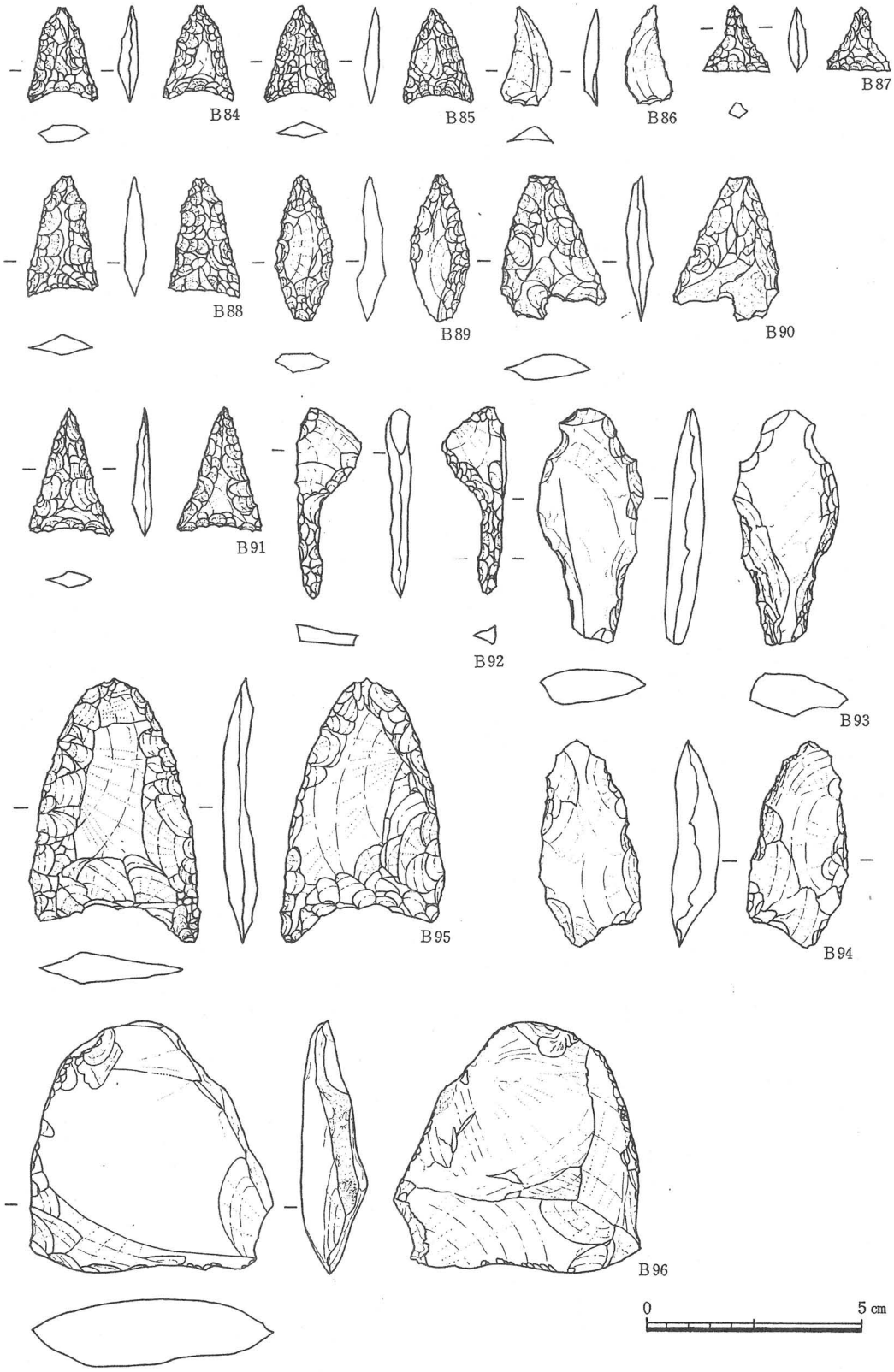
文を施すもの（Ｂ６）や、文様がまったく無いもの（Ｂ17）がある。また、頸部に削り出し突帯をもつもの（Ｂ２・13・15）、貼り付け突帯をもつもの（Ｂ18・19）がある。この他大型の壺（Ｂ20・21・52・53）がある。

無頸壺は口縁部に貼り付け突帯をもつもの（Ｂ22）、内湾した口縁部にヘラ描き沈線を施すもの（Ｂ55）がある。Ｂ55は壺からの転用であろう。

甕は口縁部が短く外反するいわゆる如意形口縁のものや、「くの字」状に外反するものがあるが、口縁部に貼り付け突帯をめぐらすもの（Ｂ35）がある。また、外部の調整をハケメやヘラミガキだけで、ヘラ描き沈線、口縁部に刻目を施さない無文のものが比較的多く出土している。



第19図　ＢＳＤ－１　出土土器



第20図　B区包含層出土土器(1)

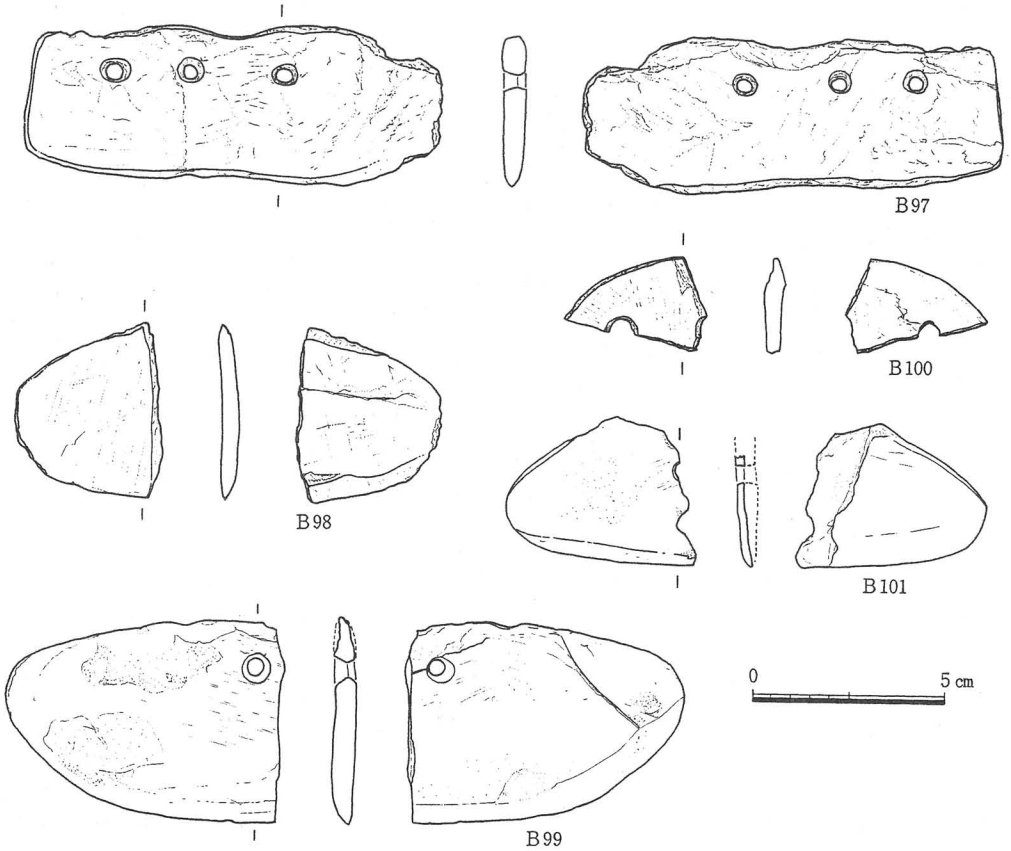
鉢は比較的小型で口縁が直立して終わるもの（B54）、外反するもの（B50）がある。大型の鉢には口縁が直立気味に終わるもの（B58）、口縁部が外反し瘤状突起をもつもの（B59）がある。いずれも外面はハケメを施す。

蓋（B56・57）は甕蓋で、内外面ともヘラミガキ、ハケメを施している。

ＢＳＤ－１出土の土器は第Ｉ様式中段階の特徴をもつものがあるが主に新段階に属しているものと考えられる。

包含層出土土器（第16図）

包含層からは弥生時代前期から中期の土器が出土しているが、やはり量的には前期のものが多い。前期のものでは壺で削り出し突帯（B61）や、貼り付け突帯（B60）をもつもの、甕で如意形口縁を呈し、数条の沈線をめぐらすもの（B63）がみられる。中期のものとしては簾状文を施すもの（B62）、大型の甕（B64）、高杯、鉢の脚部（B66・67）がある。B65は口縁部のみの出土であるが、端面に凹線をめぐらし棒状浮文を縦に付ける。上面には櫛描き烈点文を１～２列施している。



第21図　Ｂ区包含層出土土器(2)

木器（第17～18図）

木製品はすべてＢＳＤ－１からの出土である。平鍬（B68～70、B74）は、B74以外は柄を装着する部分の舟形隆起を削り出しているのみで、加工段階途中の未製品のものである。また、椀状のもの（B73）や、高台状の突起を削り出したもの（B75）がある。この他に、棒状、板状のものがあるが、器種は不明である。

石器（第19、23図）

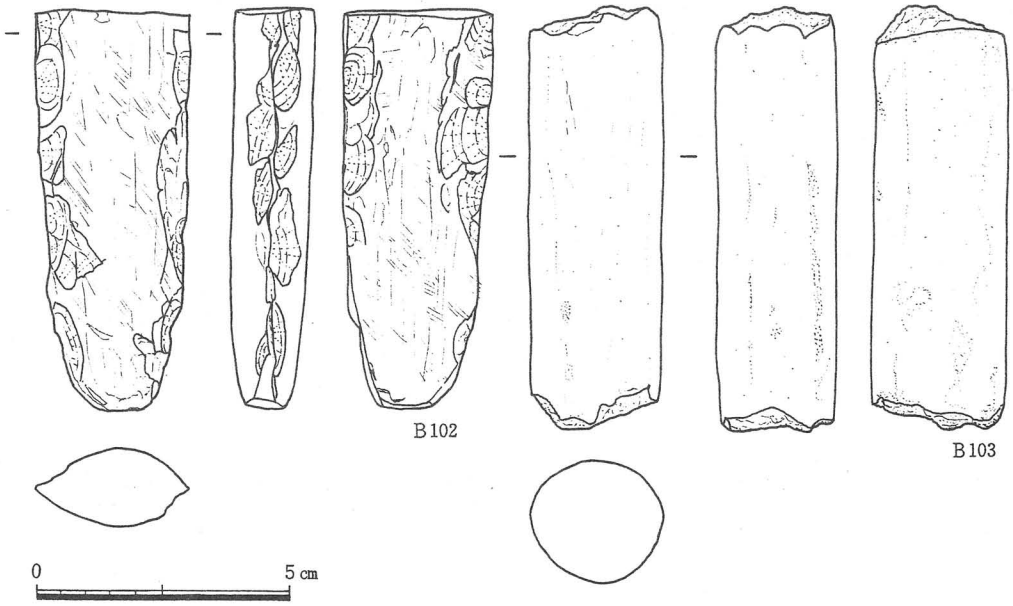
石器はＢＳＤ－１及び包含層から出土している。石器には打製石器（石鏃、石錐、不定石器）、磨製石器（太型蛤刃石斧、柱状片刃石斧、石剣、棒状石製品、石包丁）がある。尚、石器の法量、重量については本文末の遺物観察表に示す。

石鏃

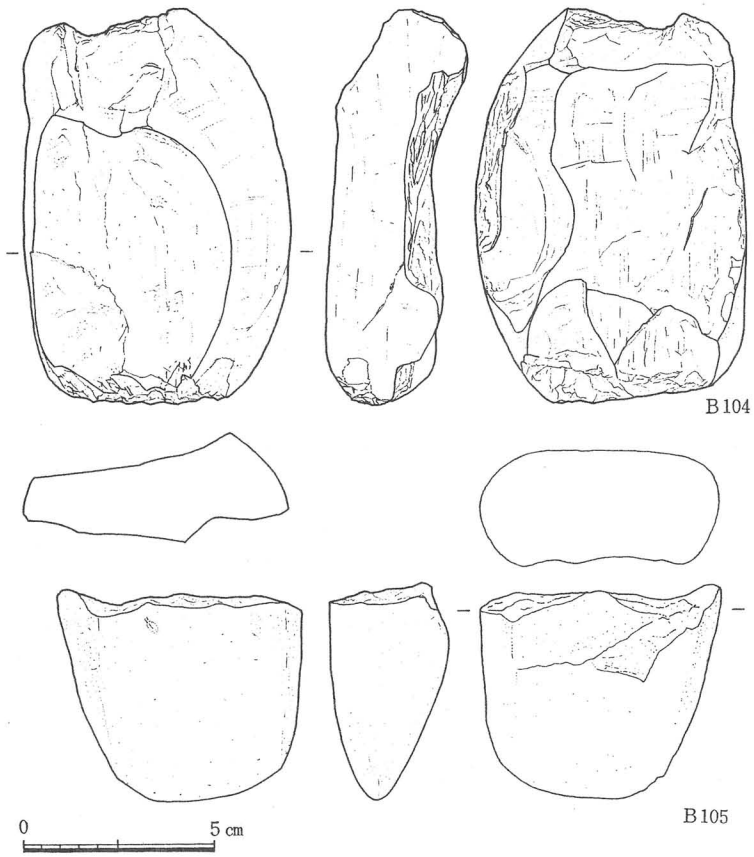
石鏃は凹基式（B84・85・88・90・95）、平基式（B87・91）、尖基式（B89）のものがある。凹基式にはB95のように大型のものがある。石材はすべてサヌカイト製である。

石錐

包含層中から２点出土している。B92は小さい頭部に断面三角形の錐部がつく。B93は錐部の大半を欠損している。いずれもサヌカイト製である。



第22図　Ｂ区包含層出土石器



第23図　B区包含層出土土器(4)

太型蛤刃石斧

ＢＳＤ－１出土（Ｂ82)、包含層出土（Ｂ 104・105）のものがある。Ｂ82は刃部の一部と体部の片面側を欠損。断面は楕円形を呈する。Ｂ 104は体部、刃部とも大きく欠損する。Ｂ 105は刃部のみ残存する。体部断面は楕円形を呈し、刃部は使用により擦り減っている。

柱状片刃石斧（Ｂ83)

ＢＳＤ－１より出土。刃部側のみ残存し、断面は不整方形を呈する。表面は丁寧な研磨により仕上げられている。

石剣（Ｂ 102)

刃部は欠損しているが磨製石剣の柄の部分であろう。サヌカイト製で断面はレンズ状を呈する。両面から剥離を加えたのち、表面を研磨している。研磨は両側面と底部にまで及んでいる。

棒状石製品（Ｂ 103)

両端は欠損しているが石棒の一部であろう。緑泥片岩製で断面はほぼ円形を呈し、表面は丁寧に研磨して仕上げる。

石包丁

包含層より出土しているがいずれも破片である。外彎刃、直線刃のものがあり、石材は緑泥片岩（Ｂ97・99・ 101)、粘板岩（Ｂ98)、流紋岩（Ｂ 100）のものがある。

3．C区（NGT－Ⅳ）の調査

(1) 基本層序（第24図）

C区の調査は断面調査も含めて、現地表面（TP約 7.8m）より深さ2mまで実施し、遺構面を3面検出することができた。層序は基本的には10層に大別することができる。

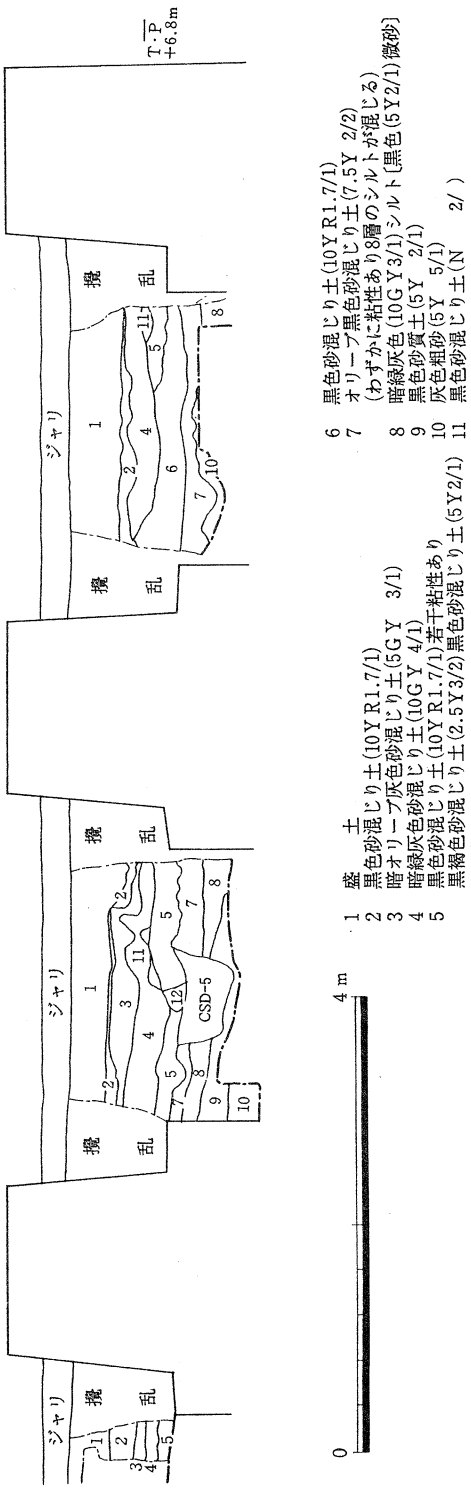
1層（盛土）　変電所建設時の盛土である。C区全域に 0.3～ 0.5mの厚さで堆積している。

2層（黒色土）　旧耕作土である。変電所建設時の削平と整地の影響をかなり受けており層厚は一定しない。削平と整地の影響は次の3層にも影響を及ぼしている。

3層（暗オリーブ灰色砂混じり土）　やはり削平の影響を強く受けているために、層厚は一定していない。場所によっては、完全に削平されてしまっているところがある。

4層（暗緑灰色砂混じり土）　この層も削平の影響を受けているために調査区全域にわたり起伏が認められ、開墾により幾度となく耕されてきたことが窺われる。したがって3層及び4層には染付、瓦器、須恵器の他、弥生土器、サヌカイト石鏃までも含まれている。

5層（黒色砂混じり土）　厚さ約0.15～0.2mで堆積しているが、場所によっては途切れているところもある。この層の上面で中近世の遺構面である第1遺構面を検出



第24図　C区　北壁土層断面図

している。含まれる遺物は弥生時代前期の土器が大多数を占めるが、中期、後期のものも若干含まれている。

6層（黒色砂混じり土）　5層とともに第1遺構面のベースとなっている土である。

7層（オリーブ黒色砂混じり土）　若干粘質土で、場所によってはシルトが混じるところもある。調査区全域にわたり、約0.15～0.25mの厚さで堆積している。この層の上面で弥生時代前期の遺構面である第2遺構面及び第2遺構面下層を検出している。遺物は弥生時代前期の土器が大量に含まれている。

8層（暗緑灰色シルト）　今回の調査では地山と考えた。上面で第3遺構面である自然流路を検出している。

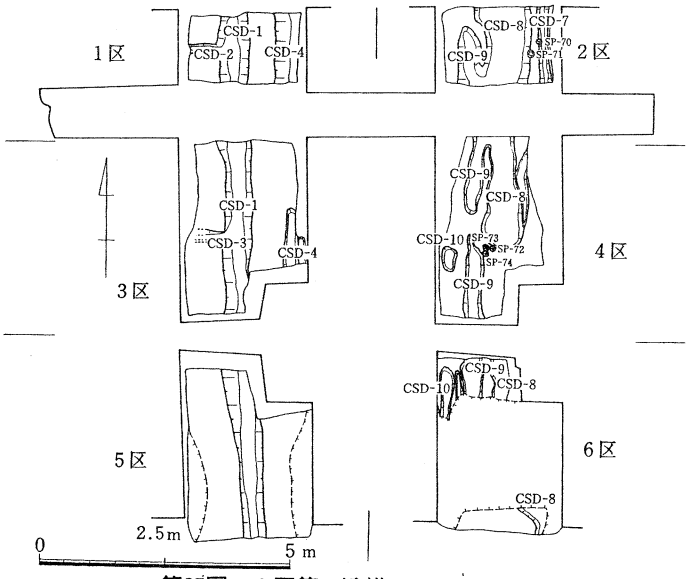
9層（黒色砂質土）　自然流路の埋土と考えられる。

10層（灰色粗砂）　自然流路の埋土である。

(2) 遺構

第1遺構面（第25図）

際立った遺構は検出されておらず、南北方向に走る数条の溝を検出しているだけである。5層の黒色砂混じり土をベースとしているが、遺構が実際に掘り込まれたのはもっと上面からであったと考えられ、遺構上部は後世の削平のため消失していた。溝は幅 0.2～1mで、深さ4～17cmと検出した時点では非常に浅く、削平の影響で途中溝が途切れている場所もあった。溝は7層の弥生時代包含層まで掘り込まれているために、遺物は染付、瓦器、須恵器の他に弥生土器、石鏃等が含まれている。各々の溝は平行に走ることから、畑等に伴う畝状遺構であろう。時期は近世のものと考えられる。



第25図　C区第1遺構面平面図

第2遺構面（第27・28図）

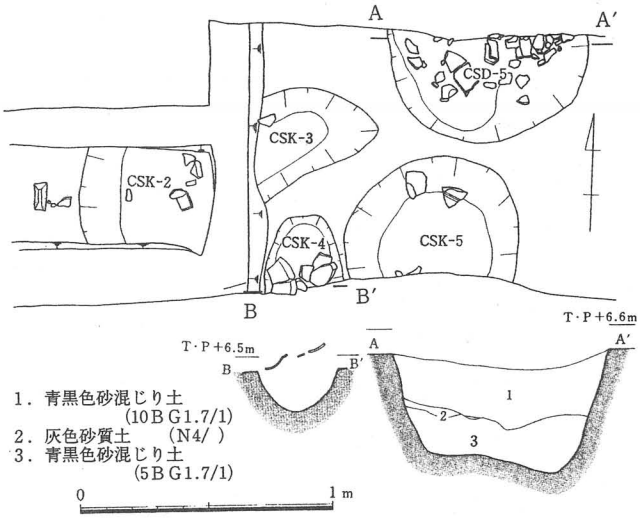
調査区全体で弥生時代前期の土坑、ピット、溝、土器群等が検出された。各遺構からは土器、木器、石器、獣骨、等が出土し

ているが、土器は破片ばかりである。遺構はその切り合い関係により、３若しくは４時期に分かれると考えられるが、調査の段階では、上層、下層の、２面の遺構面として検出している。これらはあまり時間差はないものと思われるため、ここでは第２遺構面として一括に取り扱い、説明することにする。

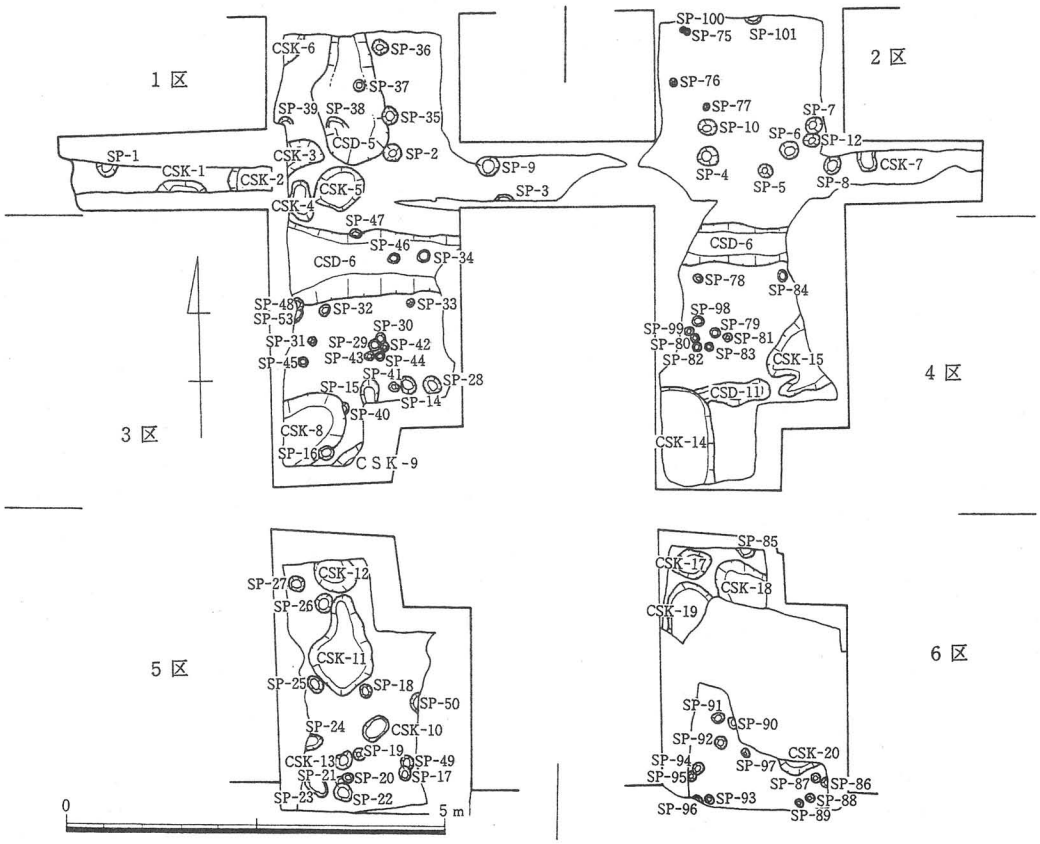
土坑

ＣＳＫ－１

１区の西側で検出した。北側は排水溝によって切られているが、推定で平面円形の土坑である。検出規模は0.58×



第26図　CSK-2, 3, 4, 5　遺物出土状況



第27図　Ｃ区第２遺構面上層平面図

0.14mで、深さ0.18mを測る。埋土は黒色砂混じり土である。

ＣＳＫ－２（第26図）

１区の西側ＣＳＫ－１の東隣で検出した。西側を除く三方を排水溝で切られており、推定で平面円形の土坑である。検出規模は 0.3×0.54m、深さ 0.1mを測る。埋土は黒色砂混じり土である。

ＣＳＫ－３（第26図）

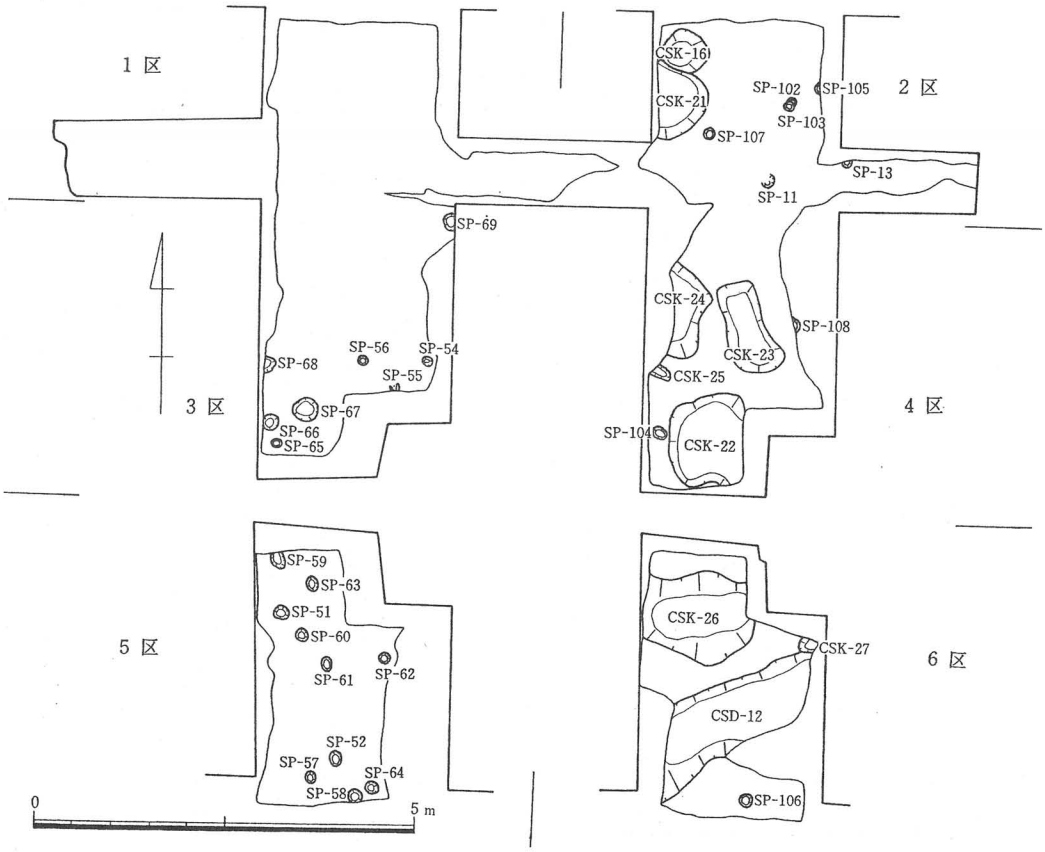
１区の西側ＣＳＫ－２の東隣で検出した不定形の土坑である。西側を排水溝で切られており、検出規模 0.5× 0.4m、深さ0.07mを測る。埋土は黒色砂混じり粘質土である。

ＣＳＫ－４（第26図）

１、２区にまたがって検出した長軸 0.5m、短軸 0.3mの平面楕円形の土坑である。深さ0.16mを測る。埋土は炭化物が若干混入する黒色砂混じり土である。

ＣＳＫ－５（第26図）

ＣＳＫ－４の東隣で検出した長軸 0.7m、短軸0.45mの不整円形の土坑である。深さは



第28図　Ｃ区第２遺構面下層平面図

0.23mを測る。埋土はＣＳＫ－４と同様、炭化物を若干含む黒色砂混じり土である。

ＣＳＫ－６

１区の北側で検出している。北側と西側を排水溝によって切られているため平面形は明らかではない。検出規模 0.4×0.25m、深さ0.19mを測る。埋土は黒色砂混じり粘質土である。土器片と伴に獣骨が出土している。

ＣＳＫ－７

２区の東側で検出している。北側は排水溝で切られているが、推定で平面長円形の土坑である。検出規模は　0.5×0.2mで、深さは0.32mを測る。埋土は黒色砂混じり粘質土である。

ＣＳＫ－８

３区の南西隅で検出した。西側と南側を排水溝によって切られているため形状は不明であるが、検出規模は 0.9×0.12mで、深さは0.17mと浅い。埋土は、上層が青黒色砂混じり土、下層が暗灰色粘質土の二層に分層できた。

ＣＳＫ－９

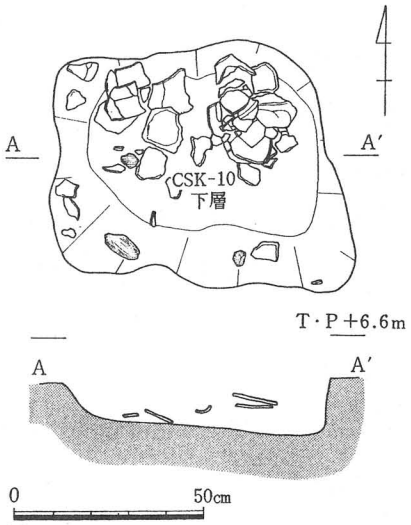
３区の南側で検出しているが、大半を東側と南側の排水溝によって切られているため形状は不明である。検出規模は 0.6×0.14mで、深さは0.11mを測り、埋土は黒色砂混じり土である。

ＣＳＫ－10

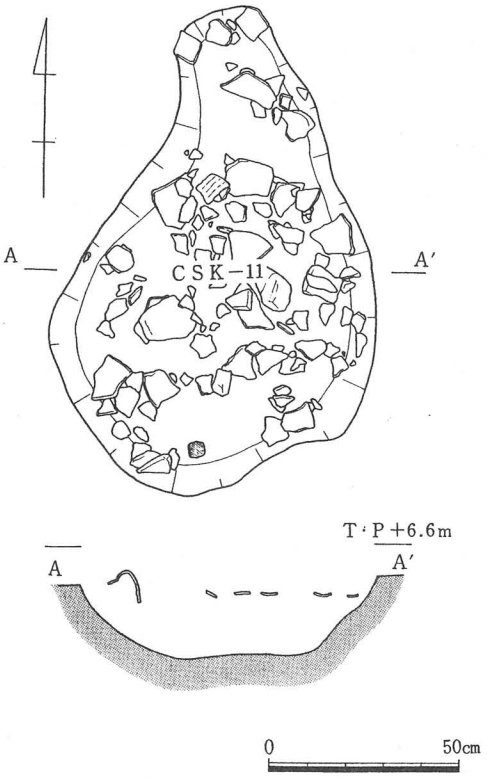
５区の中央部で検出している。当初は0.29×0.37mの平面楕円形の土坑と思われたが、掘り下げていくうちに下層では0.78×0.62mの不定形の土坑となった。埋土は上層が青黒色砂混じり土、下層が暗青灰色砂混じり土で、土器片と伴に太形蛤刃石斧が２点（C 111・112）出土している。

ＣＳＫ－11（第30図）

５区の中央部やや北寄りで検出した、平面不定形の土坑である。長軸は 1.3m、短軸は最大で0.81m、最小で 0.3mを測る。深さは0.21mで、埋土は、上層が暗灰色砂混じり土、下層が黒色砂混じり粘質土である。土器片と伴に獣骨が出土し



第29図　CSK-10遺物出土状況



第30図　ＣＳＫ−11　遺物出土状況

ている。

ＣＳＫ−12

５区の北側で検出しており、北側は排水溝によって切られているため平面形は明らかではない。検出規模は0.55× 0.4m、深さ0.16mを測る。埋土は暗灰色砂混じり土である。

ＣＳＫ−13

５区の0.28× 0.2mの平面楕円形の土坑である。深さは0.23mを測り、埋土は暗灰色砂混じり粘質土である。

ＣＳＫ−14

４区の南西隅で検出している。南側と西側を排水溝によって切られているために、平面形は明らかではない。検出規模は 0.7×0.13mとやや大型の土坑であるが、深さは0.05mと浅い。埋土は暗灰色砂混じり粘質土である。

ＣＳＫ−15

４区で検出している不定形の土坑である。南側と東側を排水溝によって切られており、検出規模 1.0× 0.6mで、深さ0.03mを測る。埋土は暗灰色砂混じり粘質土である。

ＣＳＫ−16

２区で検出している楕円形の土坑で、ＣＳＫ−21によって切られている。規模は 0.6×0.6mで、深さは0.22mを測る。埋土は上層が暗灰色粘質土、下層が炭化物を少量含む黒色粘質土である。

ＣＳＫ−17

６区で検出している楕円形の土坑である。規模は0.65×0.44mで、深さは0.17mを測る。埋土は黒色粘質土である。

ＣＳＫ−18

６区で検出している不定形の土坑である。南側を撹乱によって切られているが、検出規

模は 0.7×0.72m、深さ0.12mを測る。埋土はオリーブ黒色粘質土で土器片と伴に獣骨が出土している。

ＣＳＫ－19

６区で検出している不定形の土坑である。南側を撹乱によって切られているが、検出規模は0.77×0.51m、深さは0.06mを測る。埋土はオリーブ黒色粘土である。土器の他木製の杓の未製品（C78）が出土している。

ＣＳＫ－20

６区の南側で検出している。大半を北側の撹乱によって切られているため、形状は不明である。検出規模は0.55× 0.2m、深さは0.14mを測り、埋土は黒色粘質土である。

ＣＳＫ－21

２区の西側で検出しており、北側にあるＣＳＫ－16を切っている。西側は排水溝によって切られており、検出規模は0.55× 0.2m、深さは0.14mを測る。埋土は上層が暗灰色粘質土、下層が炭化物を少量含む黒色粘質土である。

ＣＳＫ－22（第31図）

４区の南側で検出しており、東側と南側の一部を排水溝によって切られている。検出規模は0.88× 0.6m、深さは0.16mを測り、埋土は上層が暗灰色粘質土、下層が炭化物を少量含む黒色粘質土で、土器片の他不明石製品（C 116）と獣骨が出土している。

ＣＳＫ－23

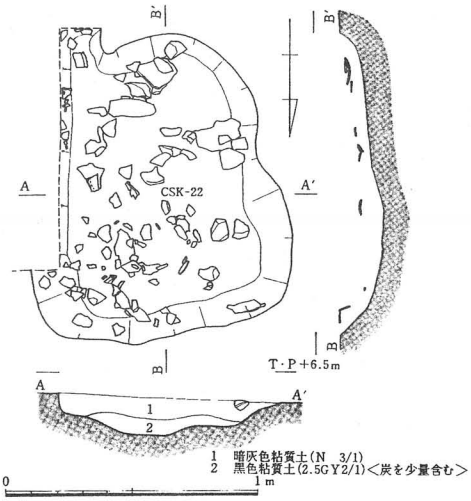
４区の中央部で検出した長軸 1.2m、短軸0.54mの不定形の土坑である。深さは0.08mを測り、埋土は暗灰色粘質土である。土器片と獣骨が出土している。

ＣＳＫ－24

４区の西側で検出している。西側を排水溝によって切られているが、検出規模 1.2×0.5 mを測る比較的大型の土坑である。深さは0.08mで、埋土は黒色砂混じり粘質土で、土器片と獣骨が出土している。

ＣＳＫ－25

４区の西側ＣＳＫ－24のすぐ西側で検出しており、西側を排水溝によって切られているが、検出



第31図　CSK-22　遺物出土状況

規模 0.3×0.16mで推定で平面楕円形の土坑である。深さは0.05mを測り、埋土は黒色砂混じり粘質土である。

ＣＳＫ－26

６区の北側で検出している不定形の土坑である。東側と西側を排水溝によって切られているが、検出規模は、1.35× 1.3m、深さ0.16mを測る。埋土は黒色粘質砂層である。

ＣＳＫ－27

６区の東側ＣＳＤ－12のすぐ北側で検出している。ＣＳＤ－12と接しているが、切り合い関係はないと考えられる。北側と西側を排水溝によって切られているが、検出規模0.28× 0.2m、深さ0.09mを測り、推定で平面楕円形の土坑である。埋土は黒色砂混じり粘質土である。

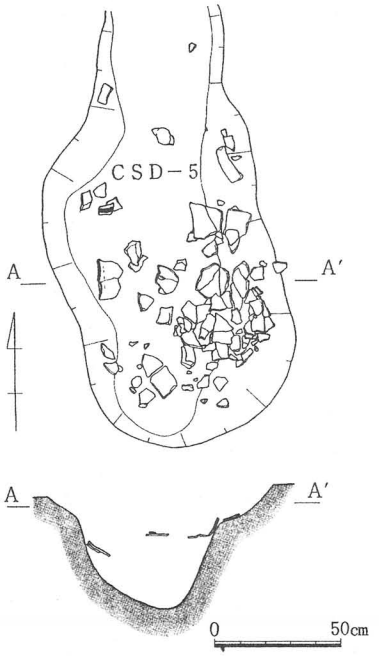
溝

ＣＳＤ－５（第32・33図）

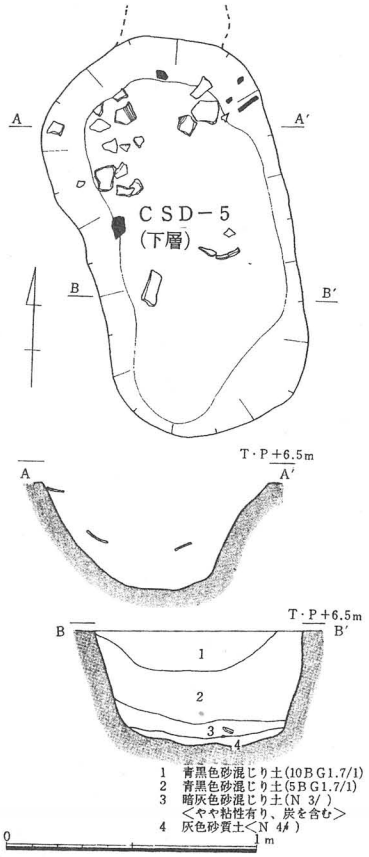
１区で検出している南北方向に走る溝である。北端は排水溝によって切られているが、南端は袋状に終わる。幅0.45～0.9m、深さは0.2～0.5mで、南端部分で深く落ち込んでいる。埋土は落ち込んでいるところで、４層に分けることができ、上層から青黒色砂混じり土、青黒色砂混じり土、炭化物を含む暗灰色砂混じり土、灰色砂質土の順で堆積している。出土遺物は土器の他に石槍（Ｃ82）、獣骨が出土している。

ＣＳＤ－６（第34図）

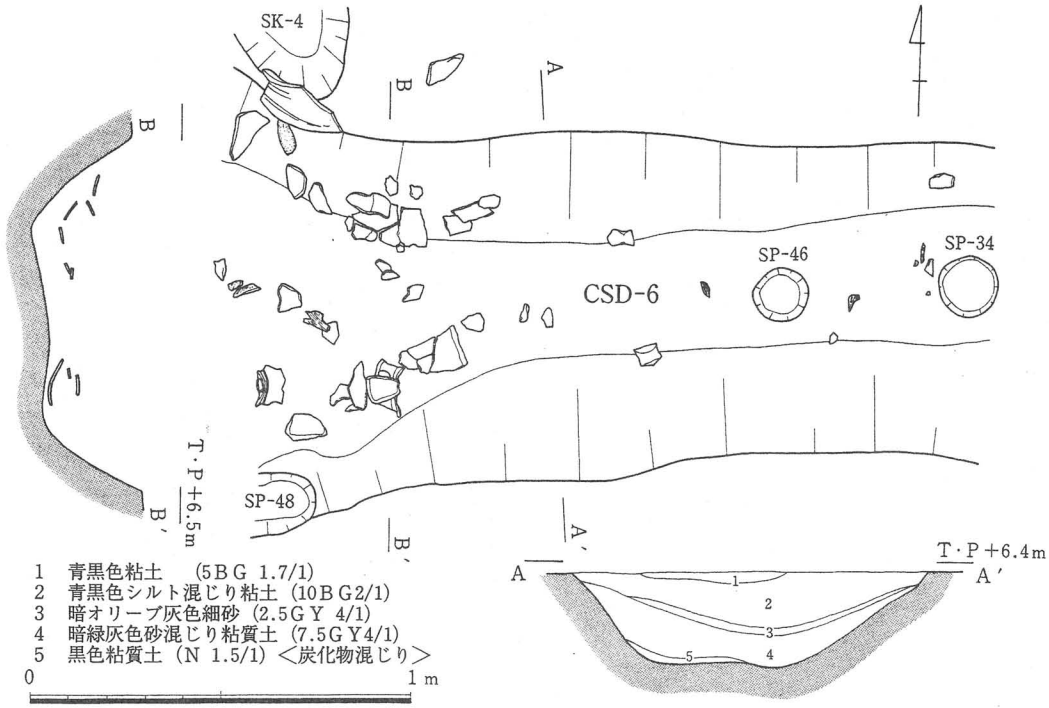
３、４区で検出しており、調査区を東西方向に走る溝である。両端を検出しておらず、さらに調査区外へ



第32図　ＣＳＤ－５　上層遺物出土状況



第33図　CSD-5 下層遺物出土状況



第34図　ＣＳＤ－６　遺物出土状況

続いているものと思われる。幅は0.48～ 1.2mで、４区で幅は狭くなっている。深さは0.16～0.23mを測り、埋土は３区では５層、４区では２層に分層することができる。遺物は土器の他に柱状片刃石斧（C 115)、獣骨が出土している。

ＣＳＤ－11

４区で検出している東西方向の溝で、西側はＣＳＫ－14に切られており、東端は袋状に終わる。幅0.18～ 0.3m、深さ0.05mを測る。埋土は黒色砂混じり粘質土である。

ＣＳＤ－12

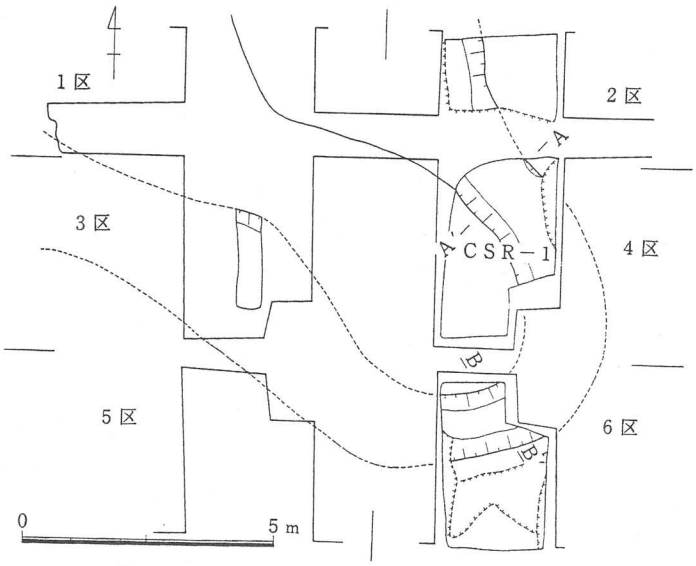
６区で検出している北東から南西方向に走る溝である。撹乱によって肩の一部を切られているが、幅0.78m、深さ0.32mを測る。埋土は上層から黒色砂混じり粘質土、細砂と炭化物が混じる黒色粘質土、暗灰色シルトの３層に分層される。

土器群

第２遺構面上層を検出する過程の６層下層、７層上面の間で検出しており、１区で土器群Ａ、５区で土器群Ｂ・Ｃ、６区で土器群Ｄをそれぞれ検出している。第２遺構面とのレベル差を考えると、第２遺構面に伴うものではないようである。土器は弥生時代前期のものが大半を占めるが、６層からの混入と考えられる中期の土器が若干認められる。

ピット

第２遺構面上層及び下層では総数 108個ものピットを検出しているが、調査面積が狭小なため建物が建つかどうかは不明である。しかし、５区で１棟の建物プランになるであろうピットを検出している。推定で１間×２間の掘立柱建物であるが、調査面積が狭小なため、実際の規模はさらに大きいかも知れない。その他のピットはどのような施設に伴うものか不明である。ピットで柱根が残存していたのは、ＣＳＰ－ 108のみである。

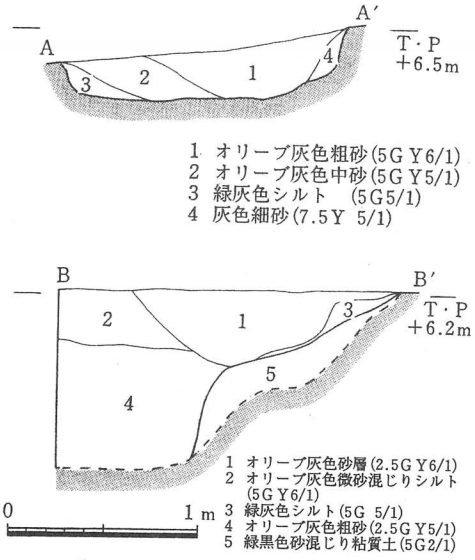


第35図　Ｃ区第３遺構面平面図

第３遺構面（第35図）

ＣＳＲ－１（第36図）

第８層をベースとして自然流路を検出している。明確に流路の肩を検出し得たのは２、４、６区であったが、１、３区でも側溝と深掘りトレンチの断面から砂の堆積層が認められ、流路の肩を検出している。同一の流路であると認識している。



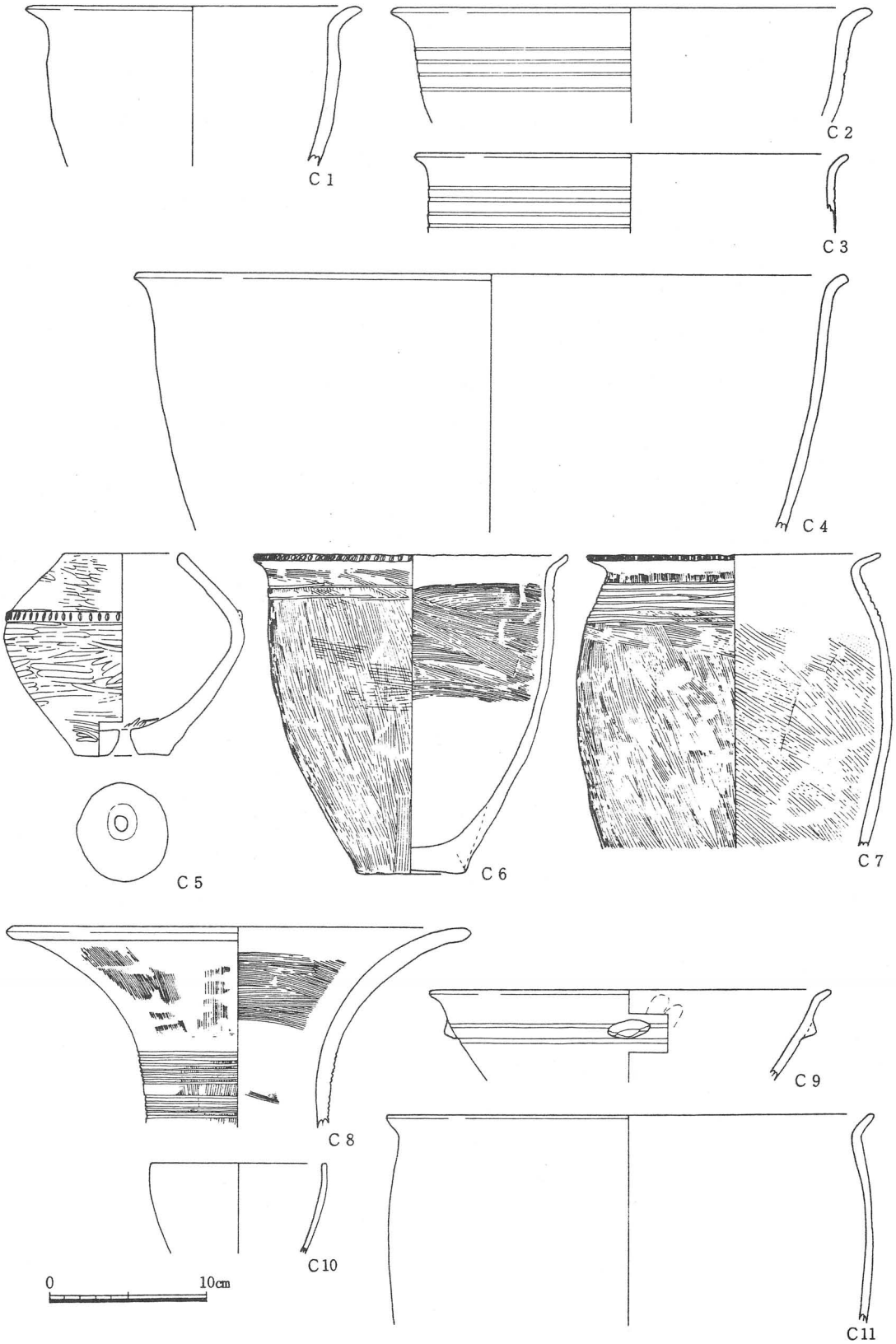
第36図　CSR-1　土層断面図

１、３、５区での河道を復元すると図のようになり、かなりの蛇行をしながら流れていたようである。幅 1.5～ 1.7m、深さは0.25～0.9mで、特に１、３区と６区で深くなっている。埋土はオリーブ灰色の砂層で、流路内からの出土遺物はなかった。６区での土層断面から自然流路は２ないし３時期で、幅、深さを変えながら、流れていたものと思われる。

(3) 出土遺物

土器

前述したように出土土器は上層の遺物包含層に少量の須恵器、土師器、瓦器が認められ



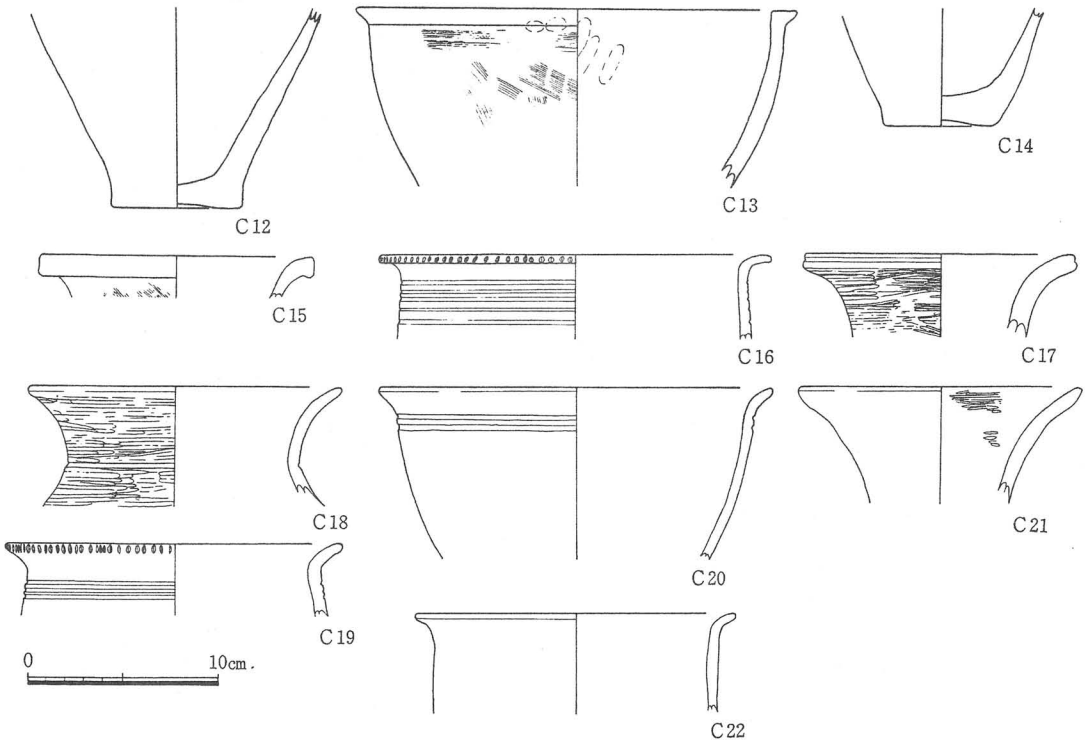
第37図　ＣＳＫ－４，５，６，10，11　出土土器

るが、弥生土器が大半を占める。弥生土器は前期から中期のものが主で、また第２遺構面の各遺構からは弥生時代前期の土器が出土しているが、いずれも破片のものが多く完形品はほとんど無い。したがって図化し得たのはごく一部に過ぎず、ここではすべての遺構についての出土土器の説明はしないことを最初に断っておく。尚、土器の詳細については本文末の遺物観察表に記した。

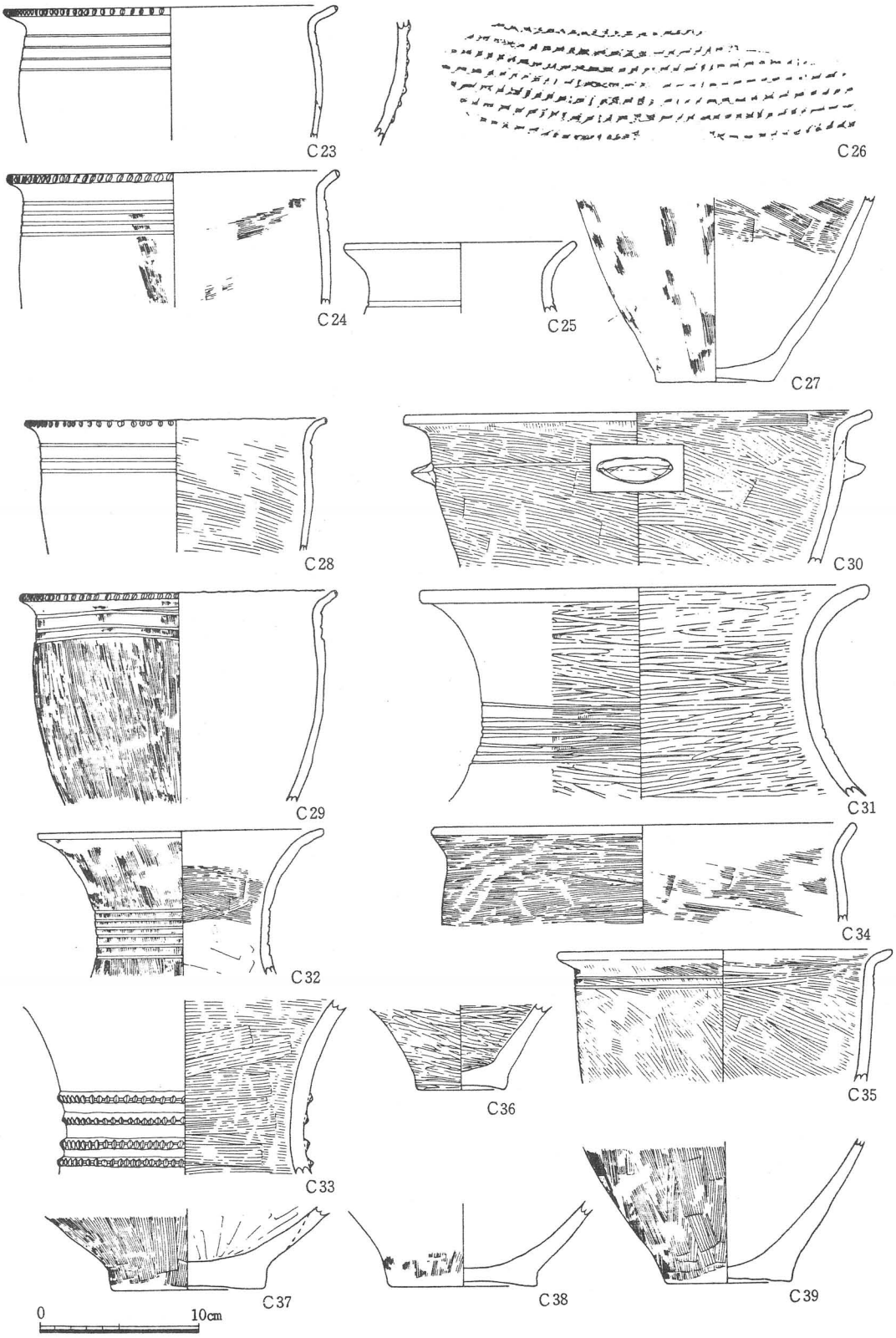
遺構出土土器（第37～41図）

第２遺構面の遺構出土土器は、主に第Ｉ様式新段階の特徴をもつものである。器種別にみると壺、無頸壺、甕、鉢、蓋がある。出土量では甕が最も多い。

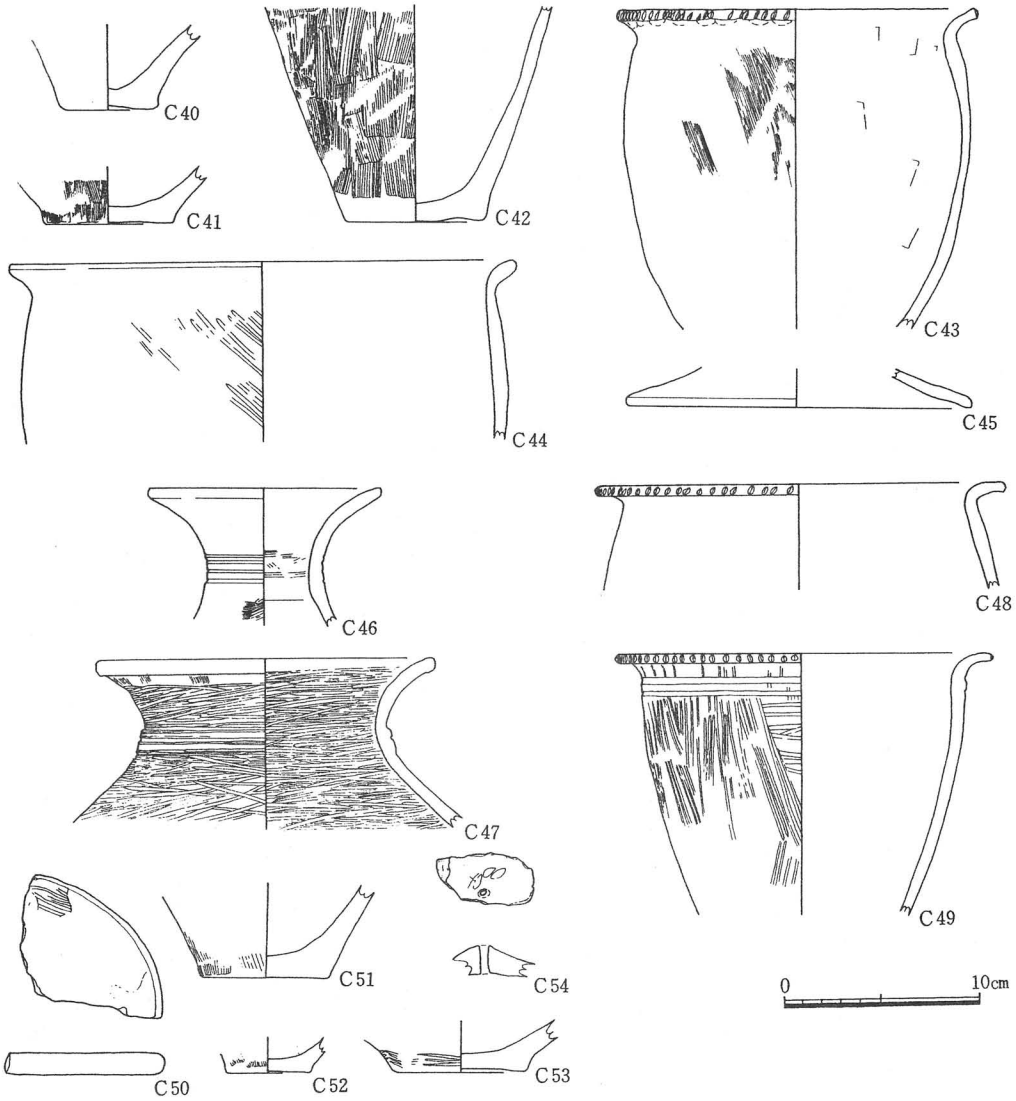
壺ではやや長めの頸部に口縁部がラッパ状に開き、頸部にヘラ描き沈線文が数条施されるもの（Ｃ８・ＣＳＫ－５出土、Ｃ32・ＣＳＤ－５出土、Ｃ46・ＣＳＤ－６出土）、短めの頸部にヘラ描き沈線が１条のみ施されるもの（Ｃ18・ＣＳＫ－22出土、Ｃ25・ＣＳＤ－５出土）、削り出し突帯をもつもの（Ｃ47・ＣＳＤ－６出土）貼り付け突帯をめぐらすもの（Ｃ33・ＣＳＤ－５出土）などがみられる。また、口縁部内面に突帯をもつもの（Ｃ55・ＣＳＰ－15出土）もある。



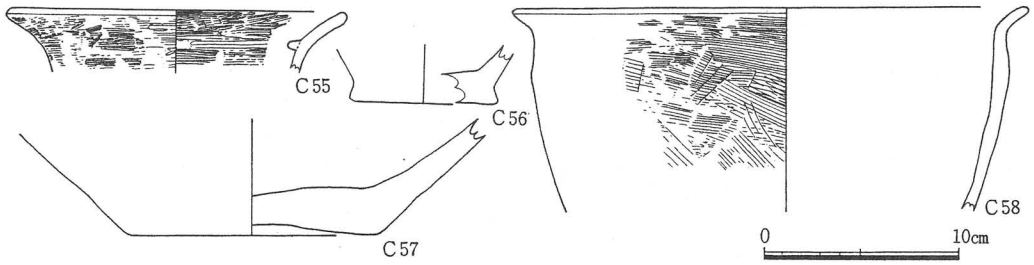
第38図　ＣＳＫ－14，17，18，21，22，24　出土土器



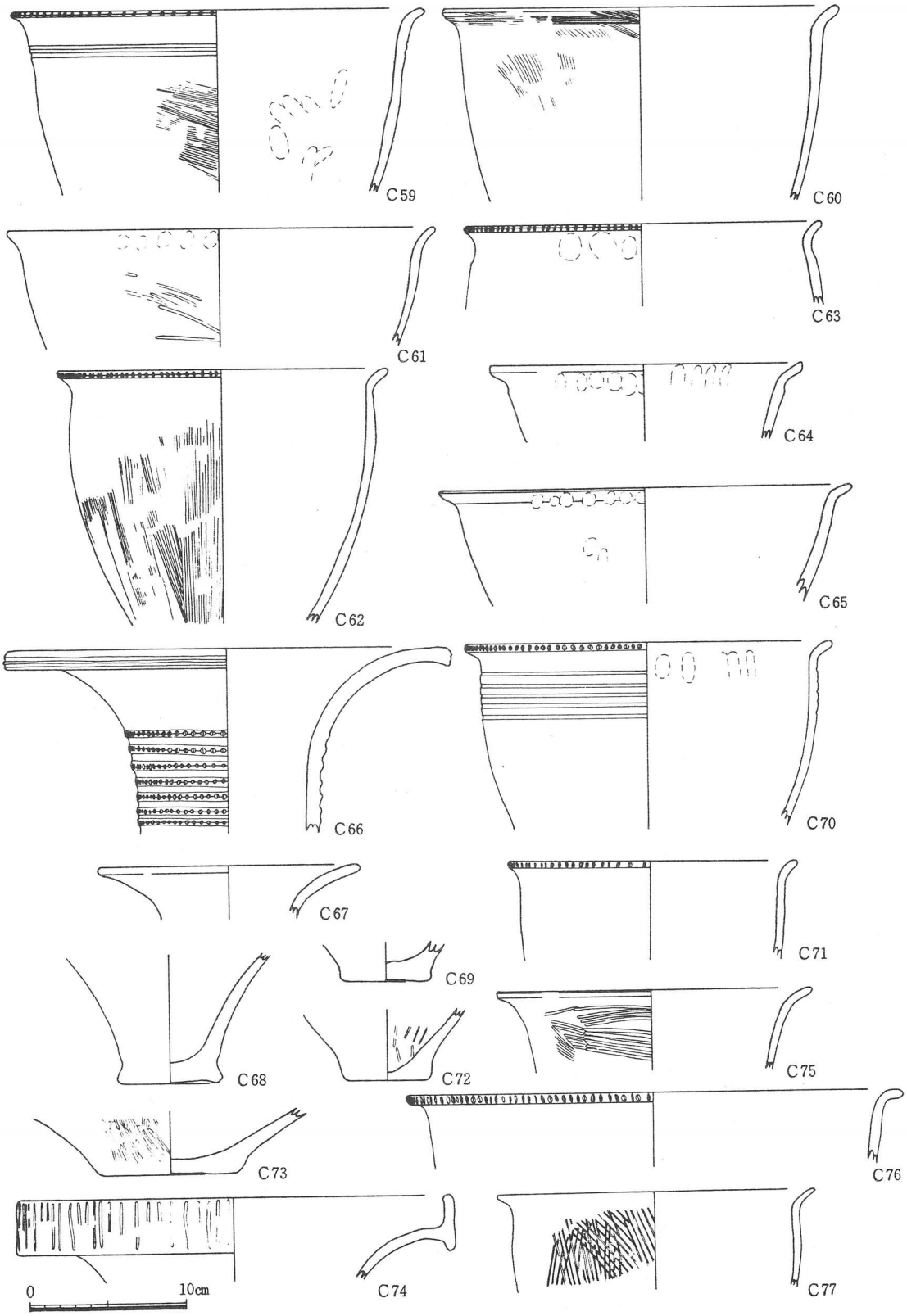
第39図　ＣＳＤ－５　出土土器



第40図　ＣＳＤ－６，８　出土土器



第41図　ＣＳＰ－15，80　出土土器

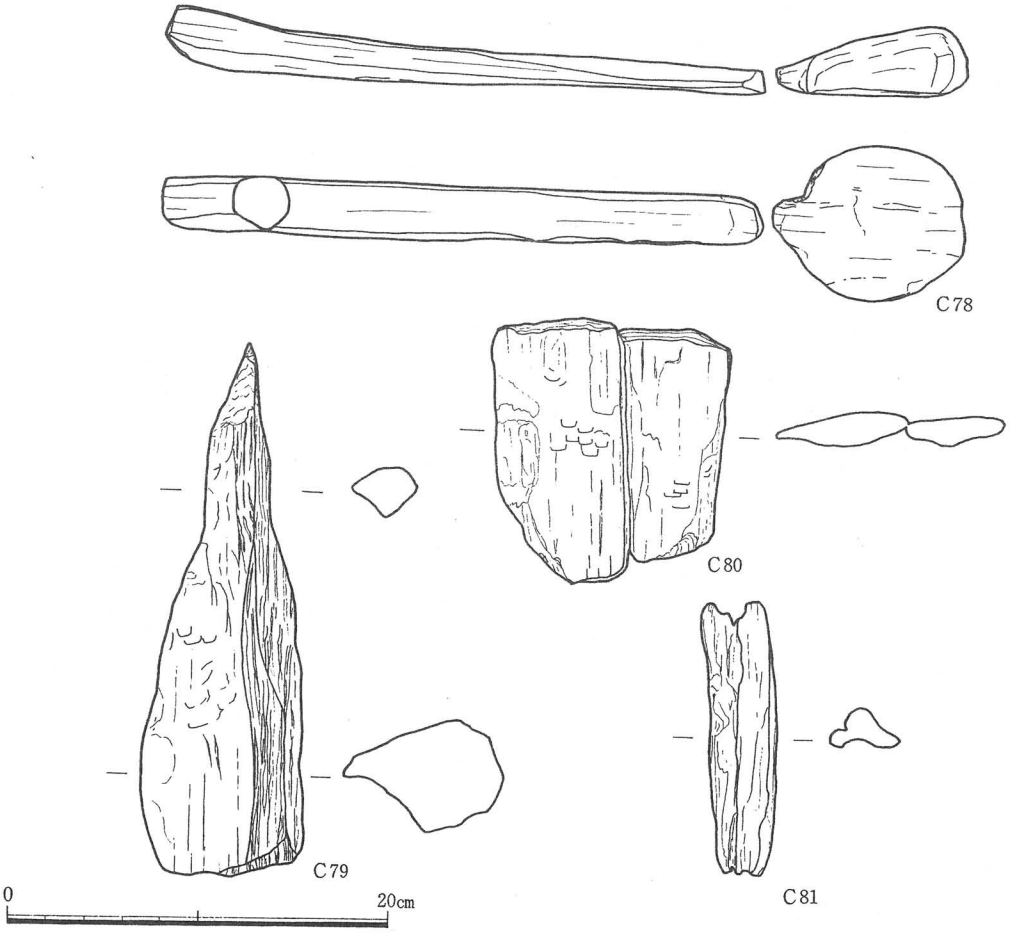


第42図　C区土器群　A・B・C・D出土土器

無頸壺は口縁部が内傾し、算盤玉状の体部に貼り付け突帯をもつもの（C－5・CSK－10、口縁が直に立ちあがるもの（C－10・CSK－11出土）がある。

甕は短く外反したいわゆる如意形口縁で、全体が倒鐘形を呈する。胴部はあまり膨らまず、胴部最大径が口径を下回るものがほとんどであるが、なかには上回るもの（C7・CSK－10出土）もある。文様は口縁端部に刻目を入れ、頸部に1～数条のヘラ描き沈線文をめぐらすものや口縁端部の刻目のみのものが多いが、文様を施さない無文のもの（C1・CSK－4出土、C4・CSK－6出土、C11・CSK－11出土、C22・CSK－24出土、C44・CSD－　出土）もある。

鉢には口縁端部に面をもち無文のもの（C13・CSK－14出土）、口縁が短く外反し頸部に数条のヘラ描き沈線文を施すもの（C2・CSK－5出土、C20・CSK－22出土）、瘤状隆起をもつもの（C9・CSK－11出土）がある。



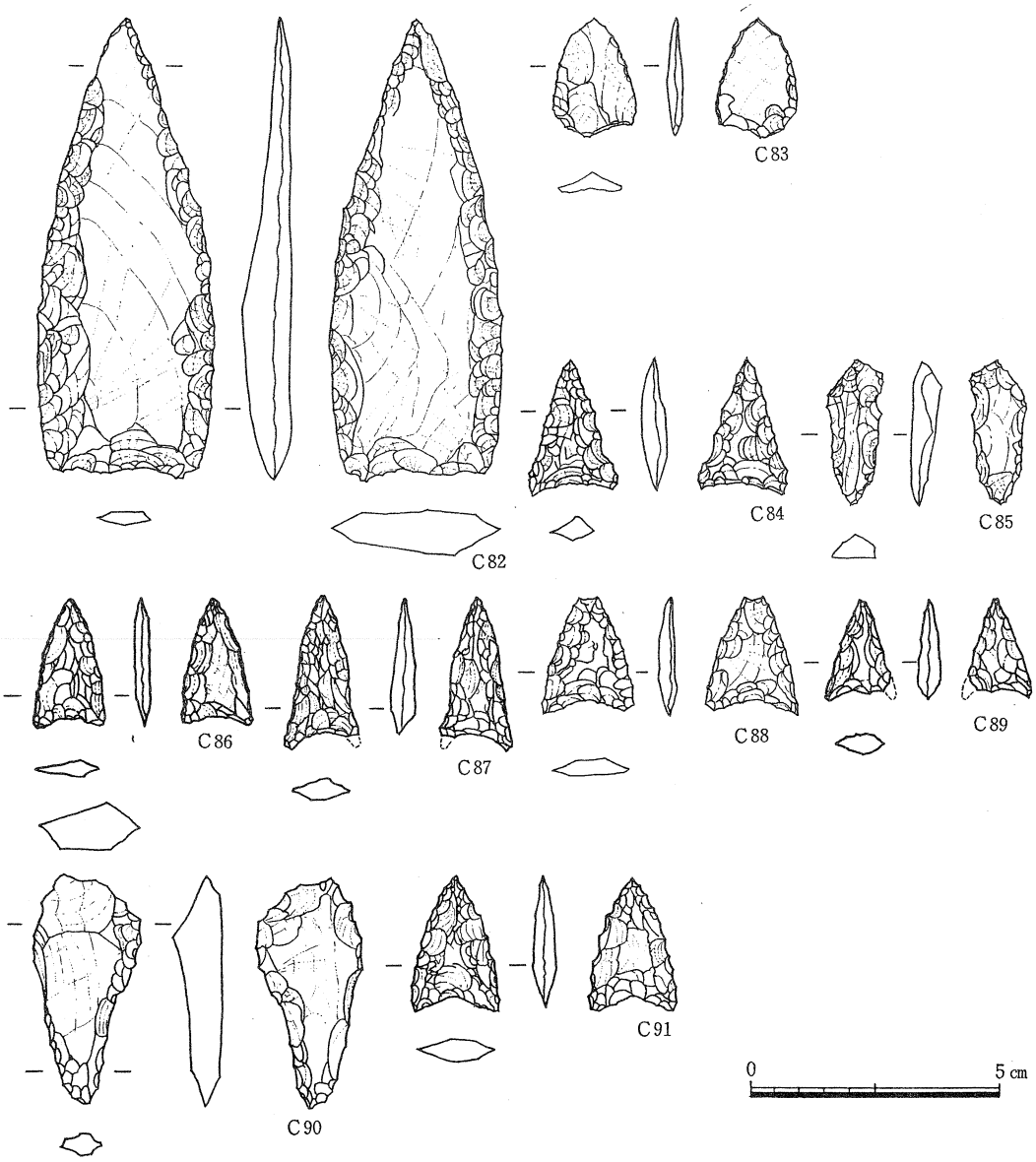
第43図　C区出土木器

土器群及び包含層出土器（第42図）

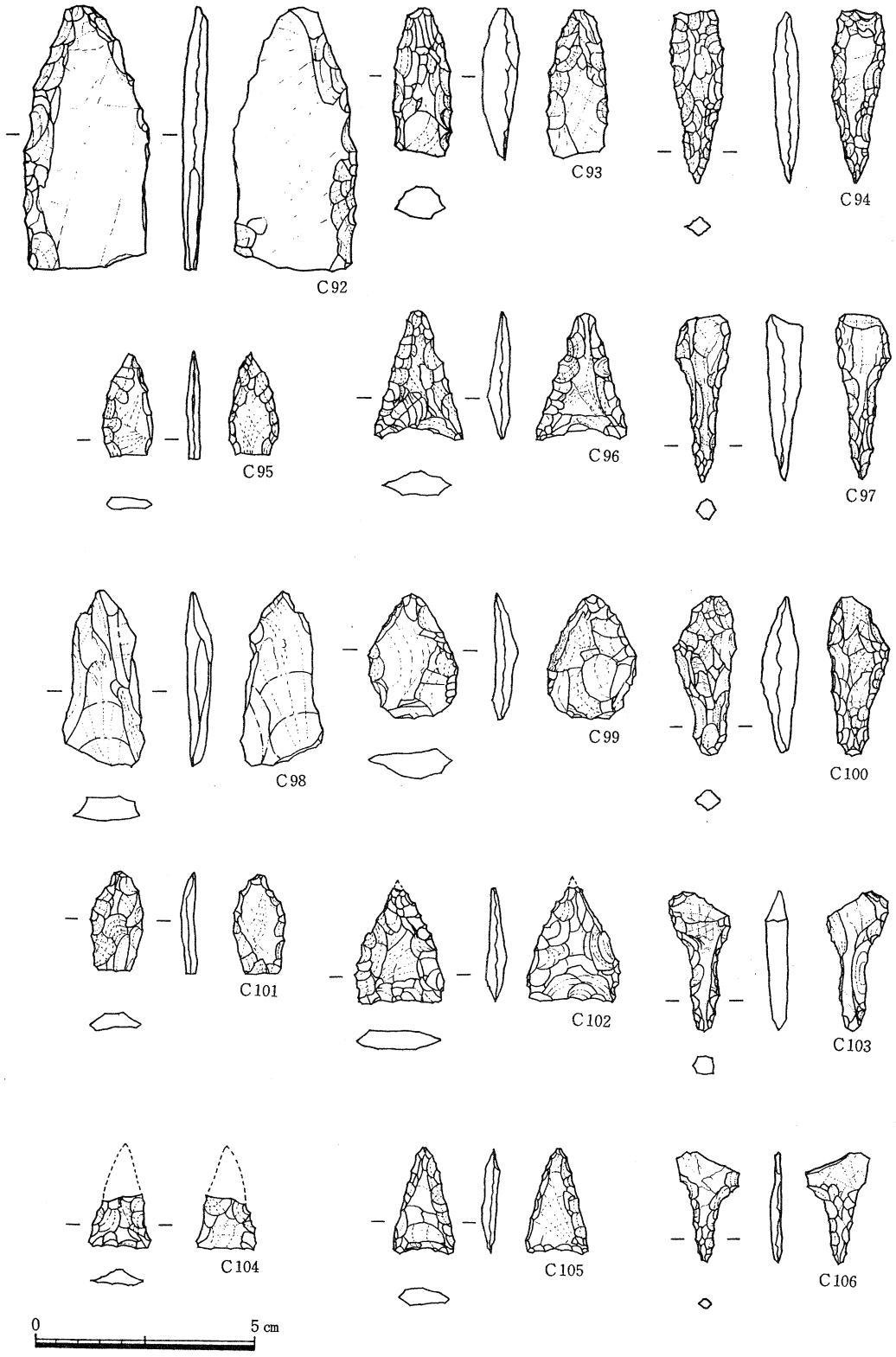
中期の土器が若干含まれるが、前期の土器が大半を占めている。器種別にみるとやはり甕の出土量が多い。また、口頸部に瘤状隆起のある鉢の出土が目立っている。

木器（第43図）

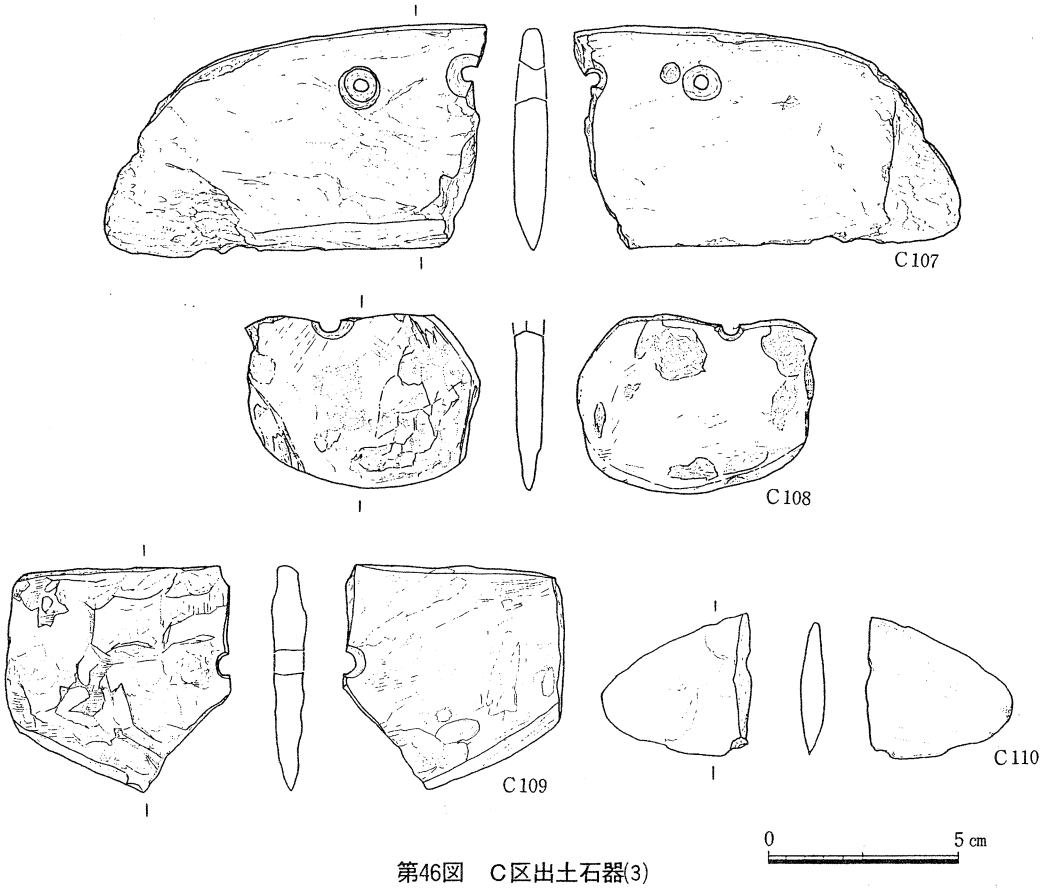
ＣＳＫ－19より杓（Ｃ78）が出土している。頭部はまだ抉り抜かれておらず未製品であろう。その他ＣＳＤ－８より板状製品（Ｃ80）、ＣＳＫ－19より棒状製品が出土している



第44図　Ｃ区出土石器(1)



第45図　C区出土石器(2)



第46図　C区出土石器(3)

が器種は不明である。ＣＳＰ－ 108には柱根が残っていた。

石器

石器には打製石器（石鏃、石錐、不定形石器）、磨製石器（石包丁、太型蛤刃石斧、柱状片刃石斧）があり、この他砥石、不明石製品がある。

石鏃（第44～49図）

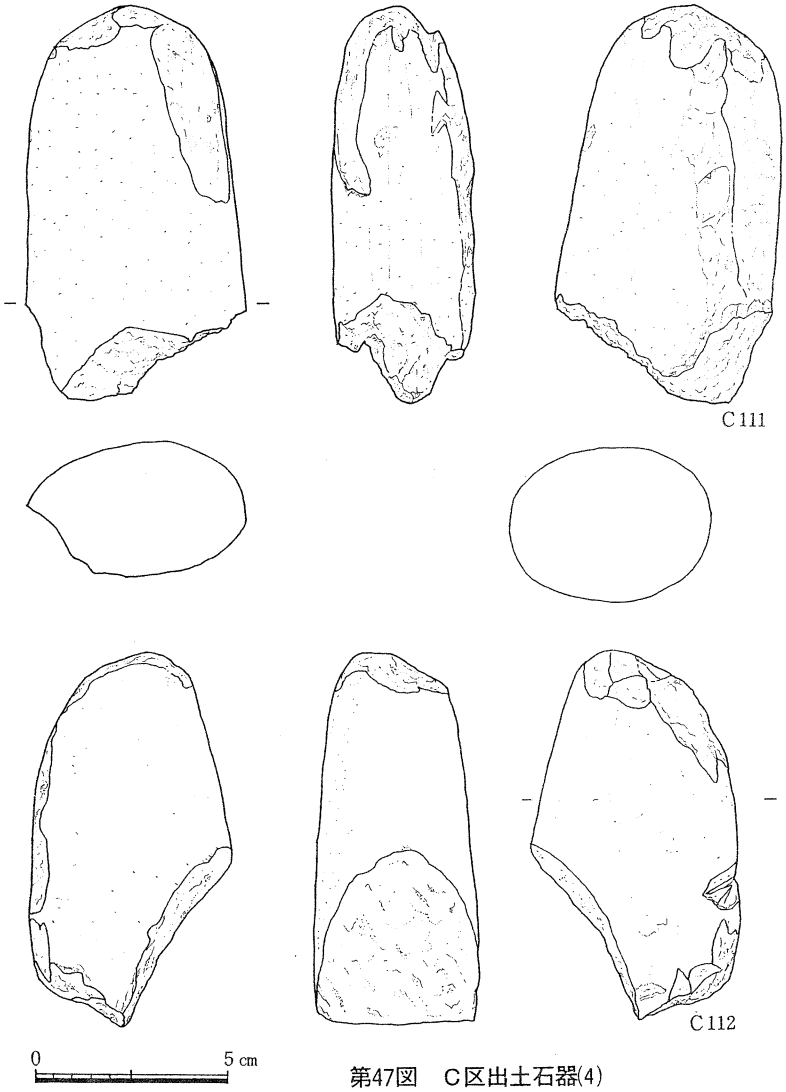
凹基式、平基式のものがみられる他、石鏃未製品（C83・99）がある。凹基式（C84・86・87・88・89・91・96・ 105）のものは、細身のもの小型もの各タイプのものがある。平基式は二等辺三角形を呈するもの（C 102・ 104）と先端部から基部にかけて丸見を帯びた小型で厚みの薄いもの（C95・ 101）がある。

石錐

錐部が比較的太いもの（C85・90・94・ 100）と細いもの（C97・ 103・ 106）がある。

石槍（C82・92）

C82はＣＳＤ－５より出土している。基部と側縁に細部調整を施している。C92は左側



第47図　C区出土石器(4)

縁にのみ細部調整がみられるだけで、未製品であろう。

不定形石器（C 93・98）

C93は両面に細部調整がみられ、石鏃或いは尖頭器の未製品であろう。C98には細部の調整はみられない。

石包丁

いずれも包含層からの出土で、直線刃（C107・109）のものと外彎刃（C108・110）のものがある。C 107・108は緑泥片岩製である。

太型蛤刃石斧

ＣＳＫ－10出土（C111・112）と包含層出土（C 113）のものがある。C 111・C 112は刃部を欠損、断面は長円形を呈する。C 113は刃部を欠損するが、表面は熱を受けたためかガラス状に溶けている。

柱状片刃石斧（C 115）

ＣＳＤ－６より出土している小型の柱状片刃石斧である。断面は隅丸方形を呈し表面は丁寧に研磨して仕上げる。

砥石（C 118）

包含層で出土している。形状は直方形を呈し、表裏両方とも使用の痕が認められるが両

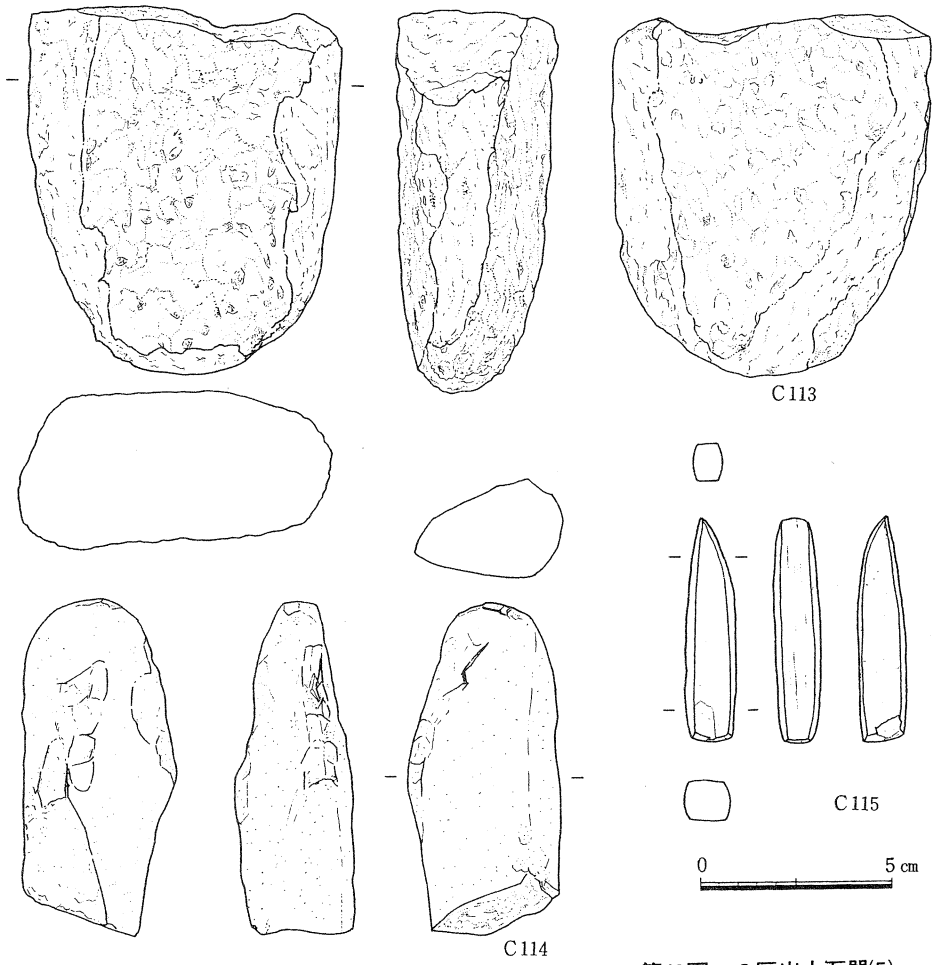
側面は使用されていない。砂岩製。

不明石製品

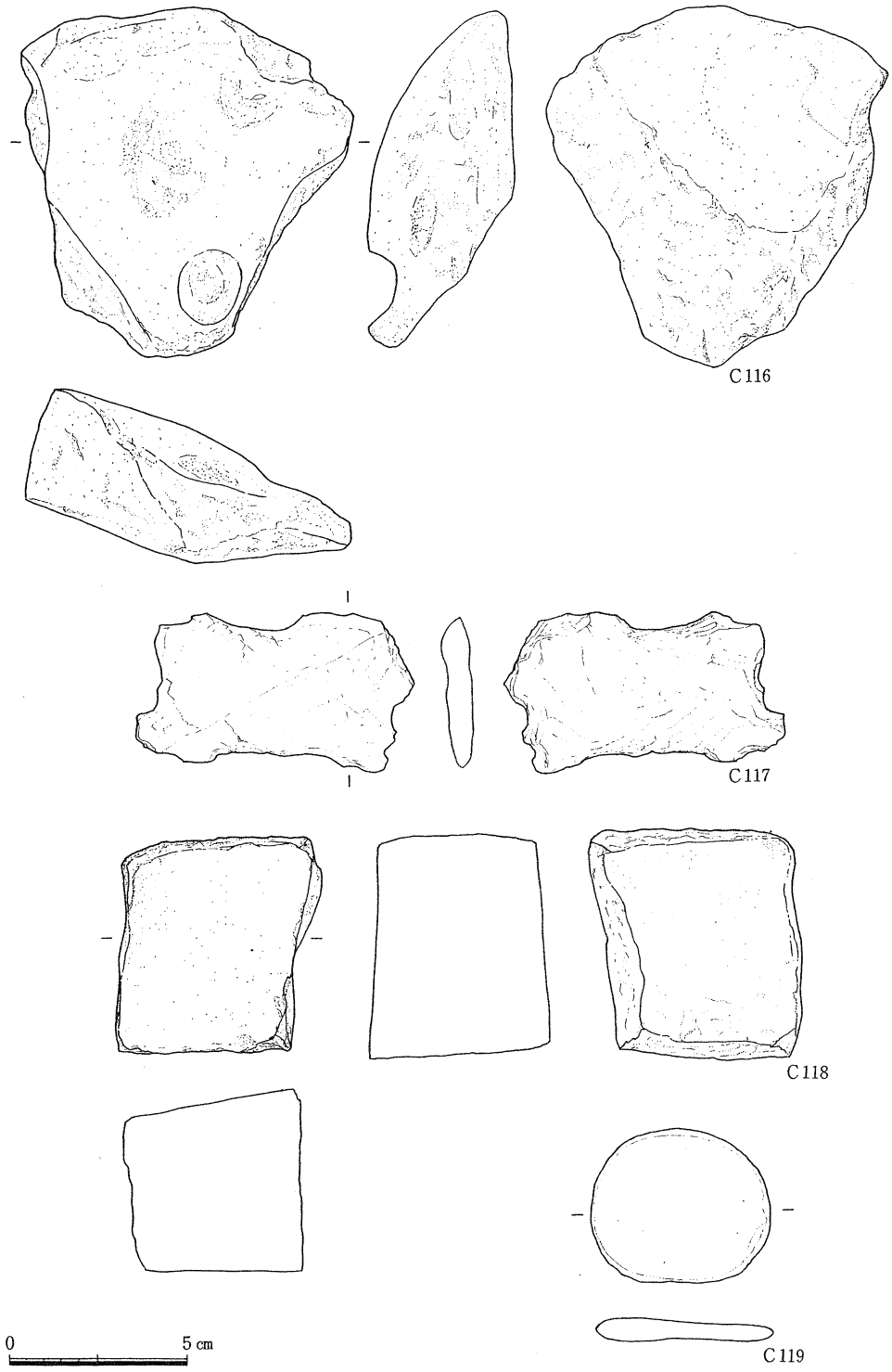
ＣＳＫ－22出土（Ｃ 116)、ＣＳＫ－13出土（Ｃ 117)、包含層出土（Ｃ 114・ 119）がある。Ｃ 116は欠損のため全体の形状は不明であるが表面は丸味を帯びており、裏面は欠損しているが面をもっていたようである。表面に径 1.7× 2.0㎝、深さ５㎜の穴があけてある。石材は砂岩製。Ｃ 117は板状で緑泥片岩製。加工痕、使用痕は認められない。Ｃ 114は柱状で自然石であるが先端部に使用痕がみられる。Ｃ 119は円板状で表面及び周縁部を研磨している。粘板岩製。

獣骨

ＣＳＫ－６・11・18・22・23・24、ＣＳＤ－５・６、ＣＳＰ－53から出土している。いずれも小片であるが、特に出土が目立つのはＣＳＤ－６で、イノシシの下顎、肩甲骨、頸骨の一部が出土している。



第48図　Ｃ区出土石器(5)

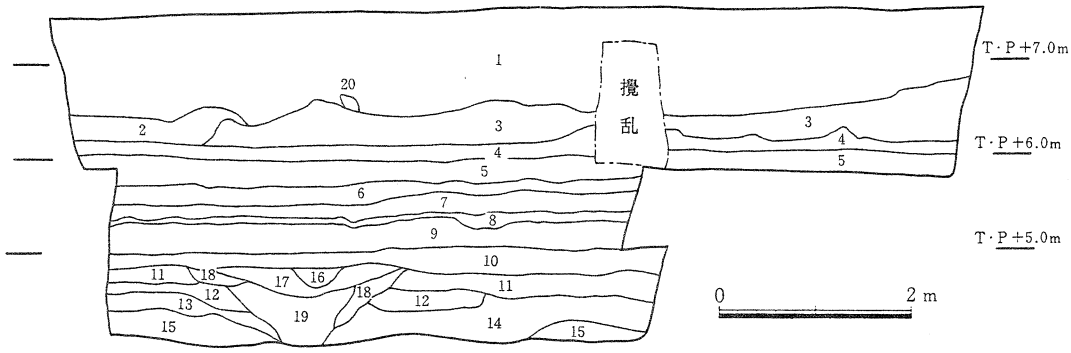


第49図　C区出土石器(6)

4．D区（NGT－89－1）の調査

(1) 基本層序（第50図）

D区は変電所敷地の中央部、やや南側に位置している。ここでは調査区の西壁断面を参考にして説明を加えることにする。



1　盛　　土
2　オリーブ灰色粗砂(2.5GY6/1)
3　暗オリーブ灰色砂質土(5GY　4/1)
4　暗オリーブ灰色粘質シルト(2.5GY3/1)
5　暗緑灰色粘質(7.5GY3/1)
6　明褐色砂混じり土(7.5YR5/8)
7　青灰色砂混じり粘質土(5BG　6/1)
8　灰色シルト(10Y　5/1)
9　灰色砂混じり粘質土(N　　5/)
10　暗緑灰色砂混じり土(10GY　3/1)
11　暗緑灰色砂混じり土(7.5GY3/1)
12　暗オリーブ灰色砂混じり土(5GY　4/1)
13　暗緑灰色砂混じり粘質土(5G　　3/1)
14　暗オリーブ灰色シルト混じり粘質土(2.5GY4/1)
15　オリーブ灰色砂(7.5Y　6/2)
16　灰オリーブ細砂(5Y　6/2)と緑灰色粘質土(10GY5/1)との互層
17　暗緑灰色、粘質土(10GY4/1)
18　暗緑灰色砂混じり粘質土(7.5GY4/1)
19　暗黒色粘土(5G　　2/1)
20　オリーブ黒色シルト(7.5Y　3/2)

第50図　D区西壁土層断面図

1層（盛土）層厚 1.0～ 1.2m、変電所建設時の盛土である。

2層（オリーブ黄色細砂）旧耕作土

3層（暗オリーブ灰色砂質土）旧耕作土

4層（暗オリーブ灰色粘質シルト）2・3層に比べ粘性が強いが、色調は同じである。

5層（暗緑灰色粘質シルト）旧耕作土直下の層で、染付や摩耗した瓦器片が出土する。この層の上面で、南北方向に走る水路を検出している。

6層（明褐色砂混じり土）層厚約15～20cmで、調査区全体に水平に堆積する。遺物の包含状況は5層と同じ状況である。

7層（青灰色砂混じり粘質土）層厚約15～20cmで、摩耗した瓦器片の他土師皿片や須恵器片が含まれる。

8層（灰色シルト）調査区全体で、薄く堆積している。

9層（灰色砂混じり粘質土）層厚約30cmと、調査区全体でやや厚く堆積している。この層からは土師皿片、須恵器の他に弥生土器、サヌカイト片を出土している。

10層（暗緑灰色砂混じり土）層厚約15～30cm、弥生土器、サヌカイト片を含む。上面で南

北方向に平行に走る数条の溝を検出している。

11層（暗緑灰色砂混じり土）純粋の弥生時代遺物包含層である。この層の上面で東西方向に走る自然流路を検出している。

12層（暗オリーブ灰色砂混じり土）同じく弥生時代遺物包含層である。前期の土器が多く含まれる。この層の上面で自然流路とピットを検出している。

13層（暗緑灰色砂混じり土）

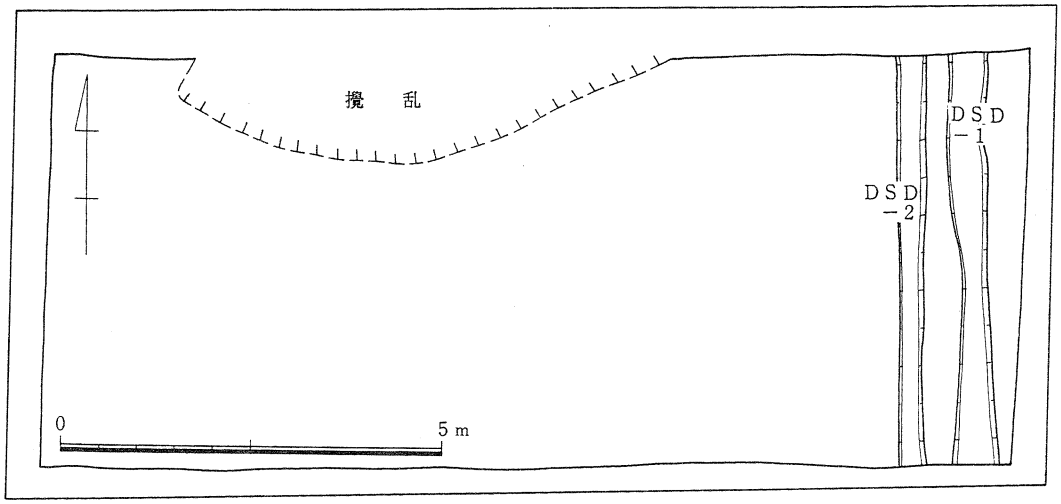
14層（暗オリーブ灰色シルト混じり粘質土）

15層（オリーブ灰色砂）13～15層には遺物は含まれない。今回の調査では地山と考えた。

(2) 遺構

第１遺構面（第51図、第３表）

５層上面で検出しており、調査区の東側で南北方向に走る溝を２条検出している。近世以降の水路であろう。



第51図　Ｄ区第１遺構面平面図

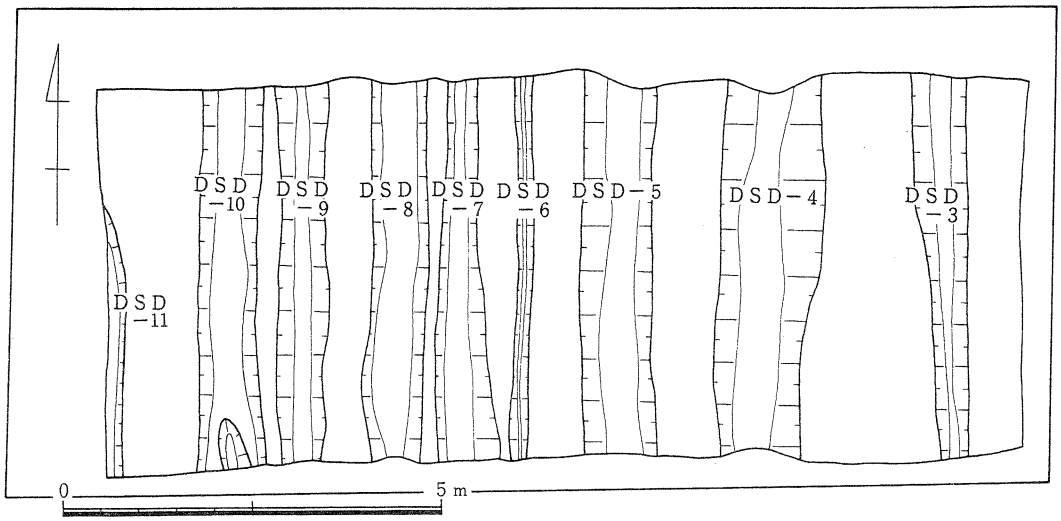
NGT Ｄ区遺構一覧表

第　1　遺　構　面						
遺構番号	形　状	平面規模(長さ×幅)cm	深さ cm	埋　土	出土遺物	備　考
ＳＤ－１		60 × 30	20 × 30	暗オリーブ灰色	杭	
ＳＤ－２		40 × 30	20	粘質シルト	染付磁器	

第３表　Ｄ区第１遺構面遺構一覧表

第２遺構面（第52図、第４表）

10層上面で検出しており、調査区全体で９条の南北方向に走る浅い溝を検出している。鋤溝も観察され、畑等の畝の名残りであろう。



第52図　D区第２遺構面平面図

遺構番号	平面規模(長さ×幅)cm	深さ cm	埋　土	出土遺物	備　　考
SD−3	510 × 35 ～ 70	7～12	灰色砂混じり粘質土		
SD−4	510 ×107 ～140	15～19			
SD−5	490 × 90 ～ 95	6～11			
SD−6	500 × 17.5～ 30	4			
SD−7	500 × 40 ～ 85	7～ 9			
SD−8	515 × 65 ～ 82.5	9～10			
SD−9	500 × 52.5～ 70	5～11			
SD−10	505 × 70 ～ 82.5	5～ 8			調査区の南で２本に分岐
SD−11	355 × 23.5～ 35	8			

第４表　　D区第２遺構面遺構一覧表

第３遺構面（第53図）

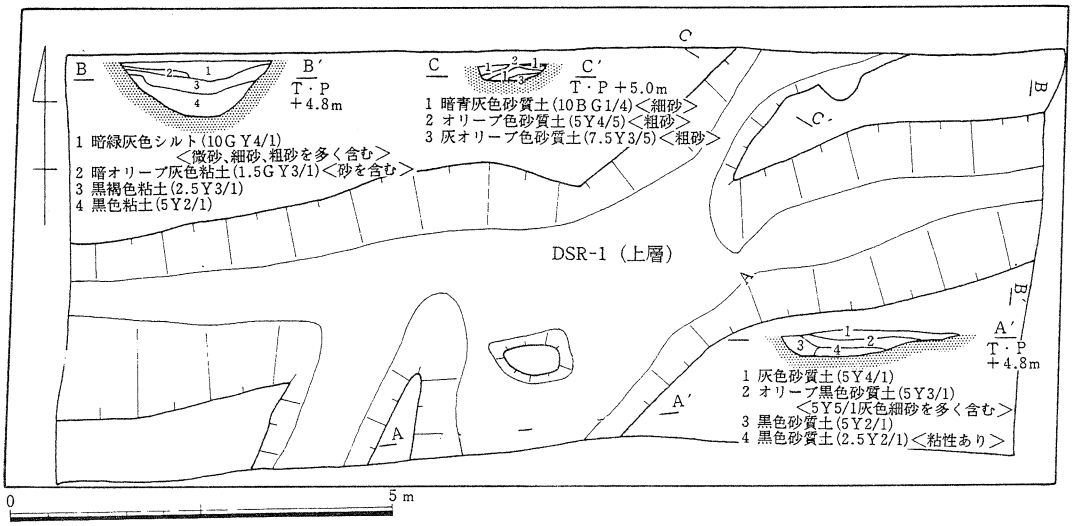
11層上面で検出しており、自然流路を検出しているのみである。

ＤＳＲ−１（上層）

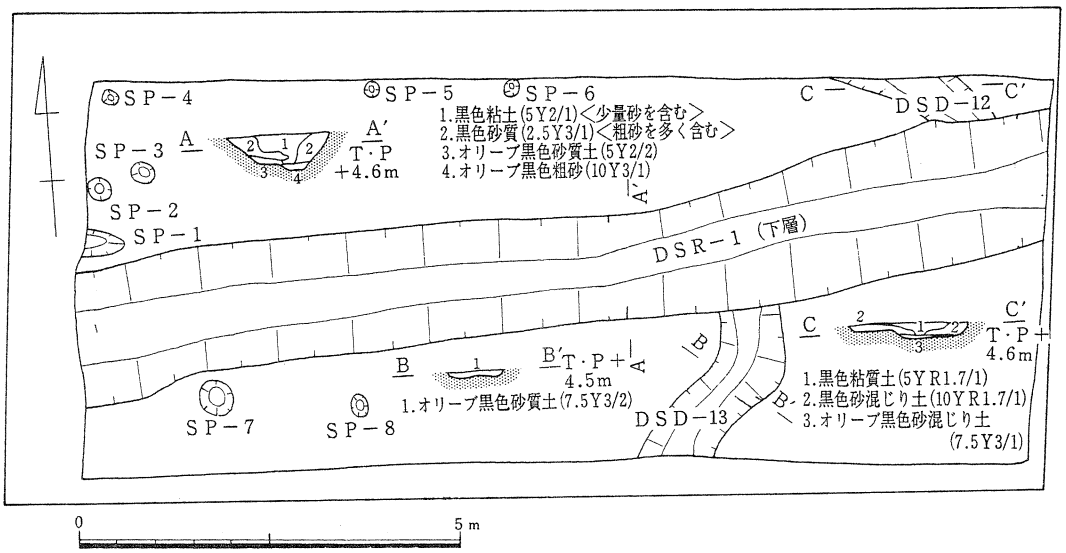
自然流路と考えられ、本流と幾筋かの支流を検出している。本流はほぼ東西方向に走り、幅 2.0～ 2.4m、深さ約 0.3mであるが、東側では 0.6～ 0.8mとやや深くなっている。埋土は緑灰色系の粘質土及び砂混じり粘質土である。支流の方の埋土も、ほぼ同じ状況であった。

第４遺構面（第54図）

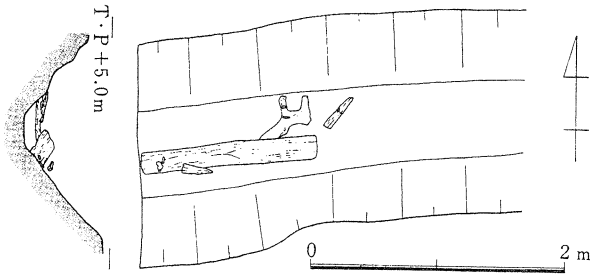
12層及び14層上面で、自然流路とピットを検出している。第３遺構面で検出したＤＳＲ−１と流れが一致しており、同一の自然流路と考えられる。ＤＳＲ−１（下層）とした。



第53図　D区第3遺構面平面図



第54図　D区第4遺構面平面図



第55図　DSR−1下層遺物出土状況

DSR−1（下層）（第55図）

上層と流路は同じであるが、幅が 1.4〜 1.8mと狭くなっており、深さは 0.5m前後を測る。埋土は上部のシルト層以外は粘土が堆積している。上層で見ら

れた支流は、調査区の東側に２条検出しただけで、深さが0.05mと非常に浅い。調査区の西側の流路内から板材と弥生土器が出土した。

ピット

ピットは全部で８個検出しているが、建物等の施設にはなり得なかった。ＤＳＰ－５、６には柱根が残存していた。

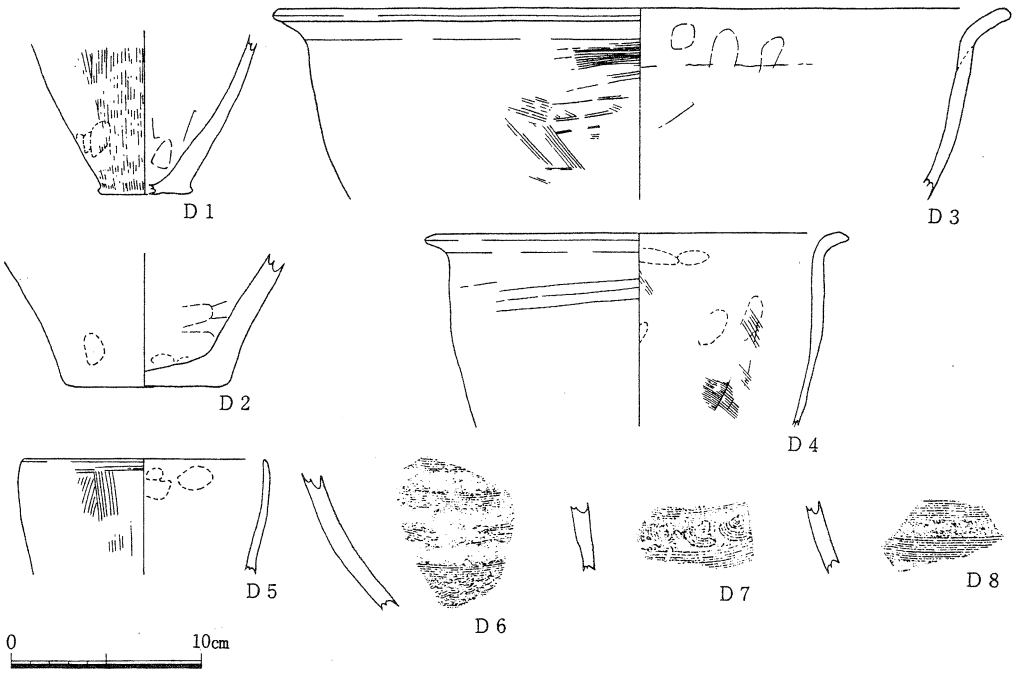
(3) 遺物

土器（第56～59図）

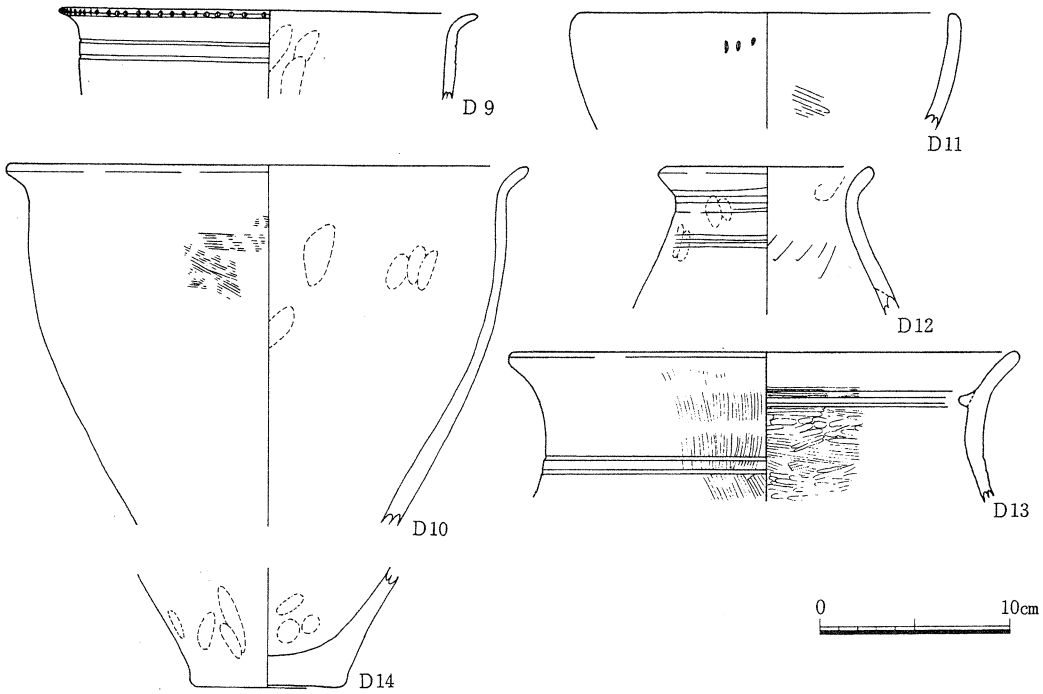
弥生時代前期から中期のものが出土しているが、前期の土器が大半を占めている。いずれも破片ばかりで、Ｂ・Ｃ区に比較すると土器の出土量は少ない。

ＤＳＲ－１出土土器（Ｄ１～４）

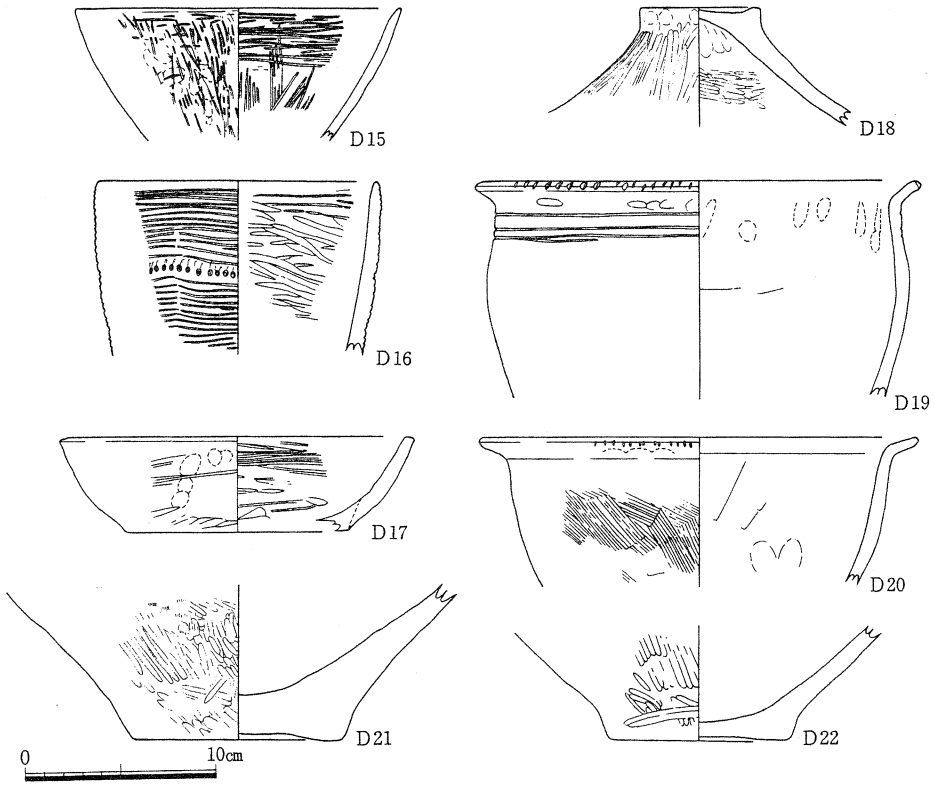
甕（Ｄ１・２・４）と鉢（Ｄ３）が出土している。Ｄ１・２は甕の底部である。Ｄ４は短く外反する如意形口縁をもち、口縁部には刻目を施さない無文の甕である。Ｄ３も短く外反する口縁をもつ無文の鉢で、外面にはハケメ調整が施されている。



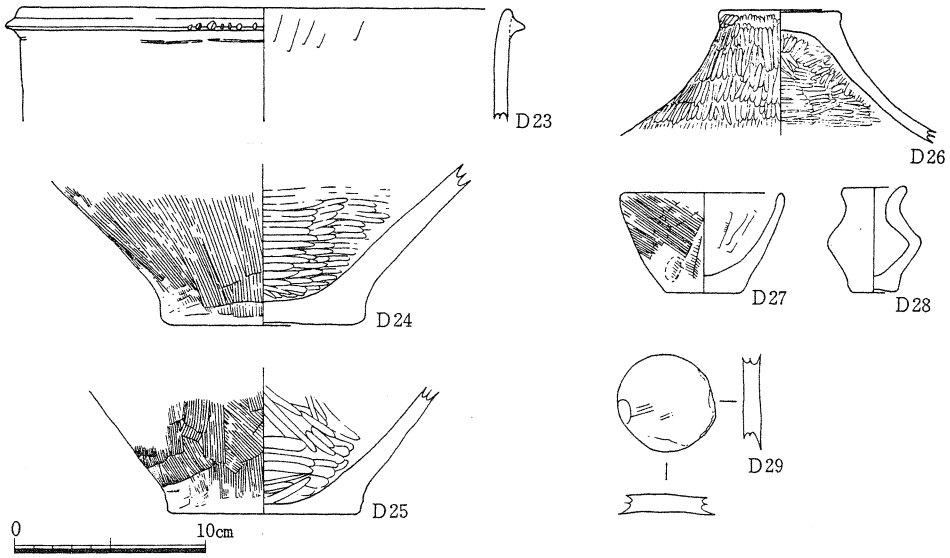
第56図　Ｄ区第３、第４遺構面及びＤＳＲ－１下層出土土器



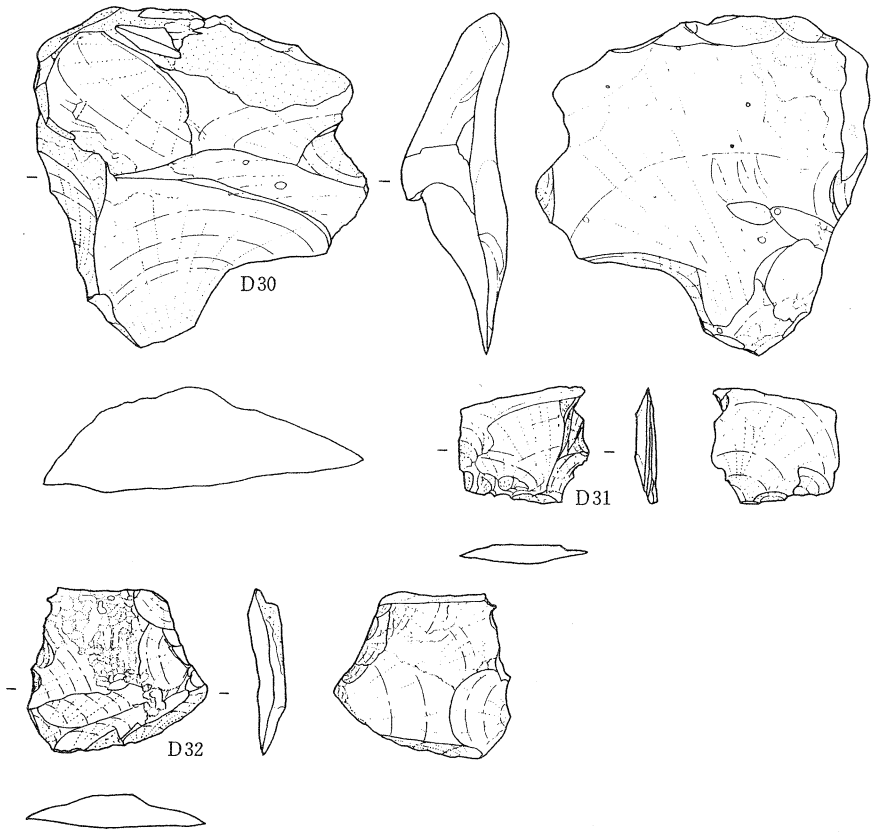
第57図　D区包含層出土土器(1)



第58図　D区包含層出土土器(2)



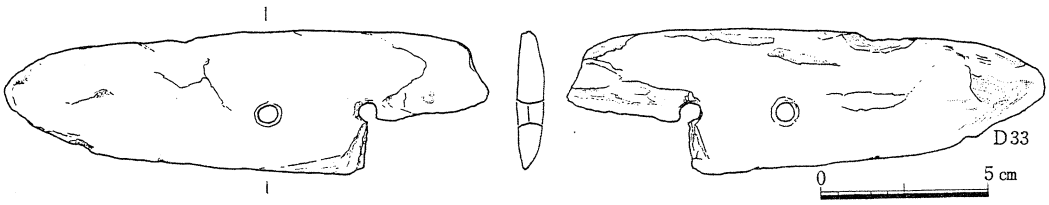
第59図　D区包含層出土土器(3)



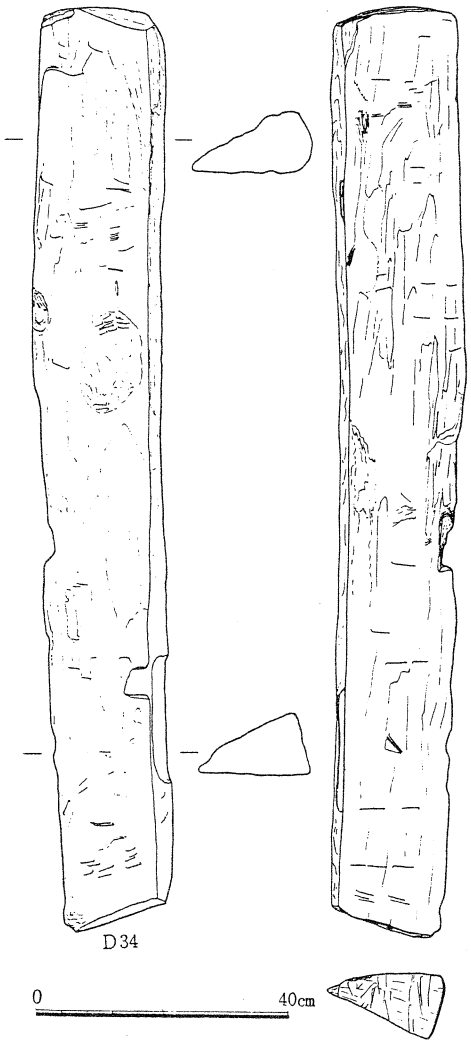
第60図　D区出土土器(1)

包含層出土土器

壺、甕、鉢、蓋、ミニチュア土器がある。壺は口縁が短く外反し頸部のほとんど無いもの（D12）と頸部に2条のヘラ描き沈線を施し、口縁内部に突帯をもつものがある。この他に細頸壺の口縁部（D16）が出土している。甕は



第61図　Ｄ区出土石器



第62図　ＤＳＲ－１　下層出土木器

短く外反する如意形口縁をもち倒鐘形を呈するものである。鉢には口縁が直立気味に終わるもの（D11)、外側に開くもの（D15)、短く外反するもの（D20）がある。また、D17のような浅鉢もある。蓋は２点（D18・26）出土しており、いずれも内外面丁寧なヘラミガキを施している。縄文土器が１点出土しているが（D23)．晩期の船橋式に属する。

石器（第60・61図）

サヌカイト製の剝片（D30～32）と石包丁（D33）が１点出土している。剝片はいずれも自然面（風化面）を残し、細部の調整は認められない。石包丁は緑泥片岩製で外彎刃、全体の形状は細長い。

木器（第62図）

ＤＳＲ－１出土の板材（D34）がある。全長 1.5m、幅20cm、厚さは最も厚いところで10cmで、断面は楔形を呈する。外側には樹皮が残り、原木を縦割りにした状態のままのもので、幅３～６cm程の工具痕が認められる。板材から推定すると原木は直径40cm程度と考えられ、材はモミ材のようで、これから色々の木製品を作り出すのであろう。ＤＳＲ－１の底に置かれていたのは、次の加工作業に移るまでの一時的保存のために水に付けていたと考えられる。

第3章　ま　と　め

1．遺構について

A区

A区では地表下約3mまで調査を実施した結果、遺構面を3面確認した（断面で確認した近世の遺構面を含めると計4面になる）時期は出土遺物から推定すると弥生時代前期～中期頃と考えられる。検出した土坑、溝からは遺物が少量出土しているだけで、どのような性格のものであるのかは不明である。遺構、遺物とも希薄であり、当時の集落の中心からははずれているようである。

B区

B区で検出した南北方向に走る溝ＢＳＤ－１は、北側、南側ともさらに調査区外へ続くことが確認できた。B区では、この溝以外に遺構は検出しておらず、弥生時代前期の集落の中心からは外れた場所にあたると考えられる。調査の課程では、この溝は、集落の周囲を巡る環濠の１部かとも考えられたが、掘り進んでいくうちに溝の深さは存外浅く、断面の形状も通常の溝と変わりないため、今のところ集落内を流れる溝の１部を検出したと考えている。B区での調査結果から、集落の範囲はさらに南へ広がる可能性のあることが判明した。

C区

C区ではA、B区とは異なり、遺構の密度が濃く、弥生時代前期に属する溝、土坑、ピット等の遺構を検出している。ここに至りてやっと、具体的に集落の存在を示す遺構を検出したことになる。しかし、多数のピットを検出したにもかかわらず、竪穴住居跡は検出されなかった。土坑内からは土器の他石器、獣骨等が出土しているが、土器に関していえば、完形品はなく、破片ばかりであり、一般的な廃棄土坑であろう。

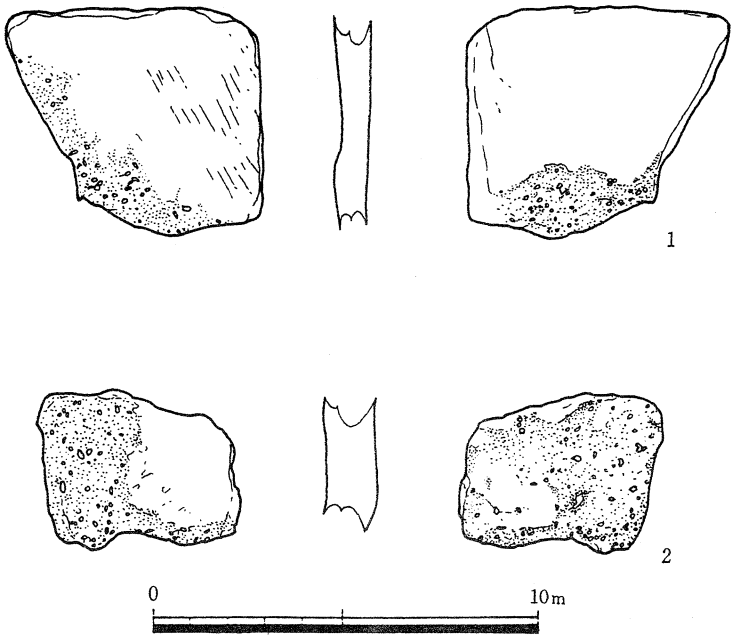
D区

D区では若干のピットと自然流路を検出しているのみで、遺構の密度は薄く、集落の中心からは外れるようである。

2．その他の出土遺物

(1) 熱変形を受けた土器（第63図）

C区では図のような土器片が2点出土している。1は表面が穴だらけで、手に持つと非常に軽く、一瞥すると溶岩か軽石のような感を受けるが、詳細に観察すると胎土は土器を



第63図　C区出土、高熱を受けた跡の残る土器片

構成しているものと同じであり、土器片であることが判明した。このような土器片は八尾市美園遺跡での出土例があり[註13]、土器が何らかの理由で高熱を受け変化してしまったものである。全出土土器を整理した結果、確認し得たのはこの２点の他に、さらに小片が数点あった。１は全体が軽石状に発泡しており、僅かに発泡していない部分（土器の表面が残っている部分）あるのみである。色調は発泡部分が、紫灰色～赤灰色呈し、熱を受けていることがわかる。壁厚は 1.2cmと厚いが、発泡作用のため土器自体が膨張したためであろう。手に持った感じは通常の土器よりも軽い感じがする。

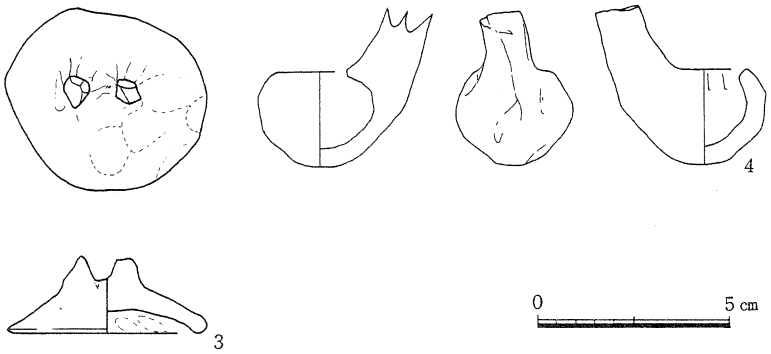
２は部分的に発泡が認められる。色調は外面が灰色～灰白色で、内面が灰白色～明赤灰色を呈する。発泡部分はオリーブ灰色～オリーブ黒色に変色している。外面にハケメの痕跡がかすかに残る。これらの土器は、いずれも３層から出土しているが、明確な時期、器種は不明である。また、第２遺構面のＣＳＫ－６からも細片が出土している。

(2) 蓋形土製品と匙形土製品（第64図）

Ｂ区で出土している。蓋形土製品は径5.2cmを測り、２個の突起を有する。匙形土製品[註14]は径3.1cm、高さ2.6cmの球状を呈する匙頭の一端に棒状の柄部を斜めに取り付けている。柄部は先端を欠損するが柄部を含めた全長は4.3cmを測る。

(3) 外部の特徴をもつ弥生土器（第65図）

B区では包含層及びBSD－1から在地産の土器ではなく中国地方、山陰地方から近畿北部にみられる文様の特徴をもつ土器が数点出土している。5・6は櫛描き直線文の間に円形の刺突文をもつ中期の土器である。丹後地方によくみられる。7は蕨手の浮状文を貼り付ける。8～10は壷の体部と考えられ、ヘラ描き沈線文と羽状文を施す。施文原体は貝殻によるものかヘラ描きによるものか特定はできない。



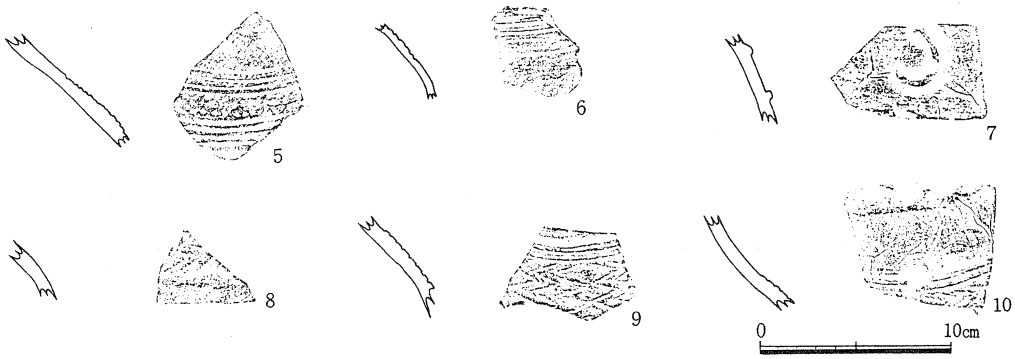
第64図　B区出土蓋形土製品と匙形土製品

(4) 関西電力東大阪変電所保管の木器類（第66・67図）

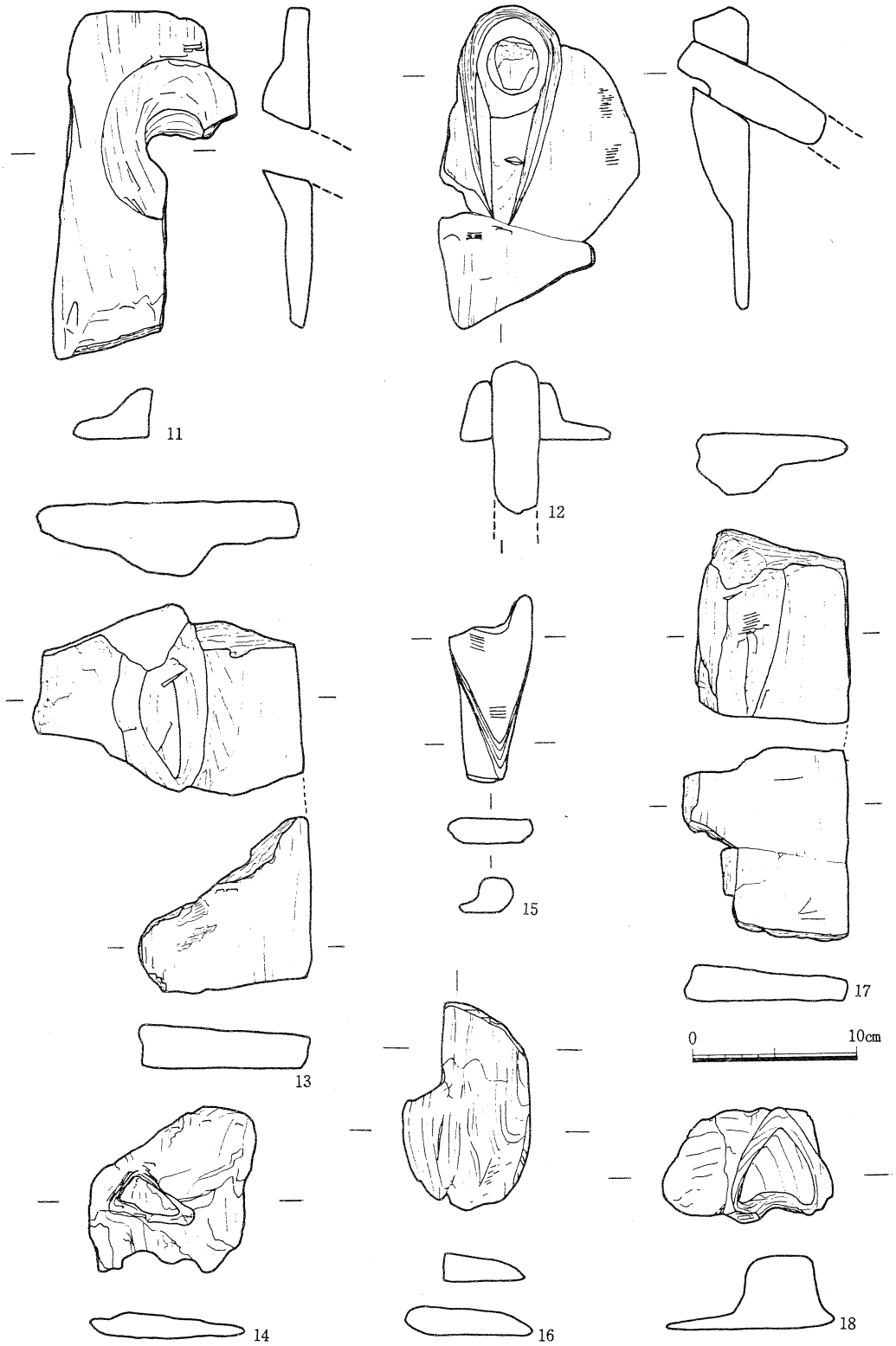
昭和34年の発掘調査時に出土したもので、全部で総数17点ある。器種は未製品のものを含めると鍬と特定できるものは7点（11・12・13・15・17・18・21）である。13、17は柄を装着する部分の舟形突起を削り出す途中の未製品である。11は円形の突起を削り出している。12は柄が装着されたままの状態であった。15、18、21は舟形突起の破片である。これらの他に未製品の高杯状製品（23）、杓（25）がある。

3．中垣内遺跡の集落の範囲について

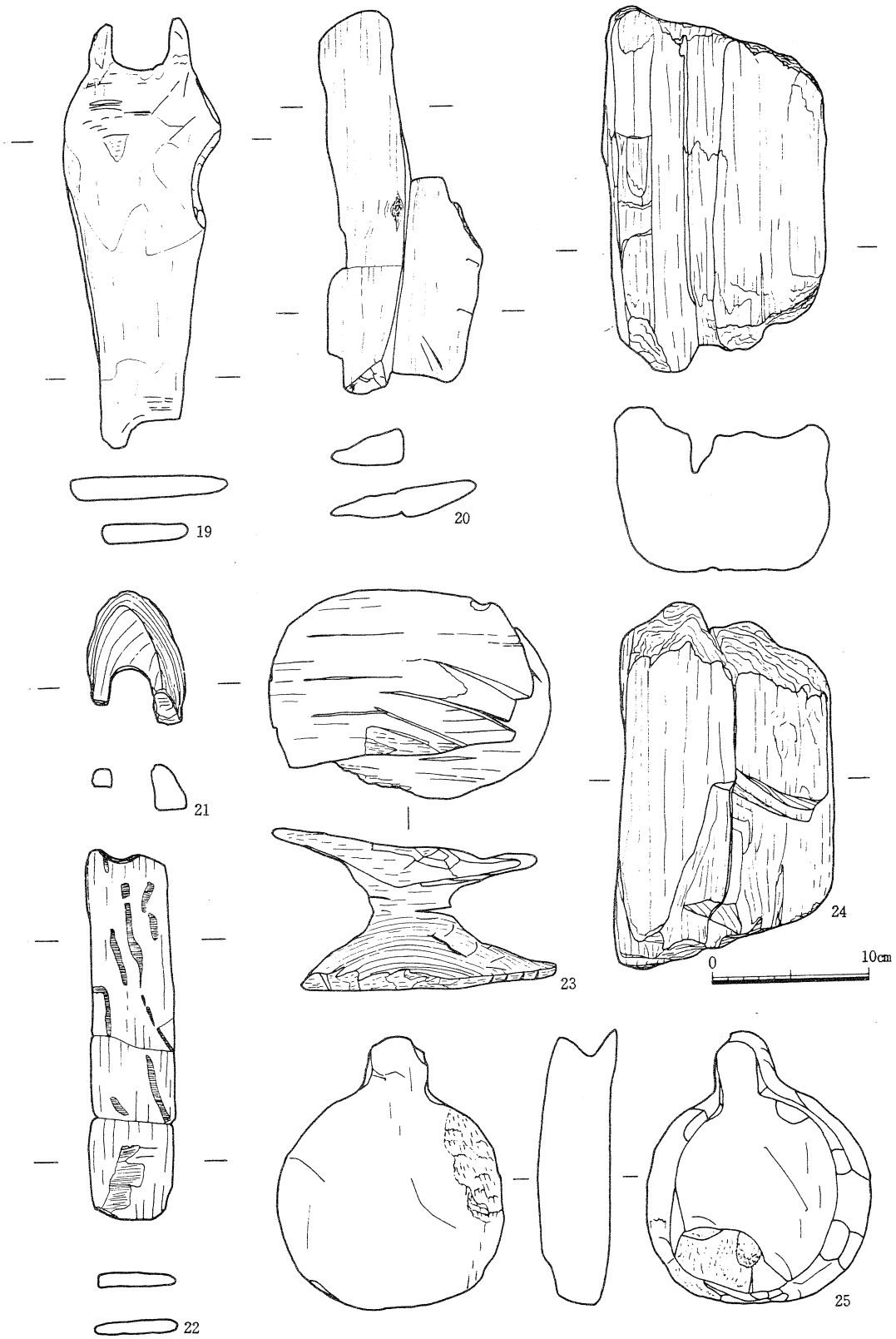
変電所敷地内で4カ所の調査を実施した結果、暫定的ではあるが、集落の範囲が明らかになってきたといえる。敷地内の東側にあるB、C区に対してA、D区は、遺構、遺物と



第65図　外部の特徴を持つ土器



第66図　関西電力東大阪変電所保管の木器(1)



第67図　関西電力東大阪変電所保管の木器(2)

も希薄であり、やはり集落は昭和34年に発見された変電所敷地内の北東隅を中心に存在することは確実であろう。また、集落の営まれ始めるのは、B区で検出したＢＳＤ－１出土土器、C区第２遺構面出土土器にはＩ様式中段階の特徴をもつものも若干認められるものの、大半がＩ様式新段階に属するもので、古段階の土器は出土していないことから、弥生時代前期後半と考えられる。中期の遺構は検出されていないが、土器はⅢ、Ⅳ様式のものが出土しており、引き続き中期にも集落は営まれたようである。

註

(1) 三宅正浩・黒田淳他　『寺川・北条遺跡発掘調査報告書』　大東市教育委員会（1987）

(2) 自然流路から出土している。

『大東市北新町遺跡第１次発掘調査報告書』　大東市北新町遺跡調査会（1986）

(3) 船橋式の深鉢が出土している。

(4) 野島稔　『雁屋遺跡発掘調査概要』・(2) 四条畷市教育委員会（1984）

野島稔　『雁屋遺跡』　四条畷市教育委員会（1987）

辻本武　『雁屋遺跡発掘調査概要』　大阪府教育委員会（1987）

(5) 中垣内遺跡の東方、標高 213mの山上にあり中期の土器片が採集されている。

東宏　「第１章　原始時代の大東市・弥生時代」『大東市史』（1973）

(6) 若宮遺跡、野崎遺跡、宮谷古墳群、城ケ谷遺跡、墓谷古墳群などで出土している。

(7) 鍋田川遺跡は昭和33年の砂防堰堤工事の際に発見され、大量の高杯と卜骨、刻骨が出土している。

東宏　「第１章　原始時代の大東市・古墳時代」『大東市史』（1973）

外環状線（国道 170号）近くにある大阪産業大学の校舎増築工事に伴う発掘調査において、同じ中垣内遺跡内で、古墳時代前期の集落跡が発見されている。

北新町遺跡では第２次発掘調査において、古墳時代前期の堀立柱建物跡が発見されている。

(8) 田代克巳・瀬川健　『堂山古墳群発掘調査概要』　大阪府教育委員会（1973）

(9) (1)に同じ。

(10) (2) に同じ。

(11) (2) に同じ。

(12) 小林行雄、杉原荘介編　『弥生式土器集成・本編』　東京堂出版（1990再版）

(13) 『美園』　(財)大阪文化財センター（1986）

(14) 前期の例では唐古遺跡、東奈良遺跡、森之宮遺跡がある。

おわりに

中垣内遺跡は昭和34年に発見されて以来、弥生時代前期の集落跡として認識されてきました。当時行われた調査では、たくさんの弥生土器が出土したと伝えられていますが、公表されているのはほんの一部にすぎませんでした。今回、機会があって実に30年ぶりに調査をすることになり、変電所で保管されていた当時の出土遺物と共に、その成果をこうして活字にできるということは、たいへん嬉しいことです。

この本の内容についてですが、筆者浅学のため不十分な点、不備な点が多々あることと思います。特に土器の胎土分析、石器の石材、木器の材質など、まだまだやり残したことはたくさんありますが、いずれ別の機会に改めて発表したいと思っています。

最後になりましたが、この調査に協力していただいたすべてのみなさんに感謝の意を表し、そして、筆者の今後のより一層の精進を御約束しておわりのことばにかえさせていただきます。

遺　物　一　覧　表

B区　出　土　土　器

図番号	器　種	法　量 口径・胴径 残存高	形　　態	文　様　・　技　法	備　　考
10－B 1	壺	17.8 — 19.0	ゆるやかに外反する頸部に短く水平にのびる口縁部をもつ	外面　頸部ヘラ描直線文は３条 肩部にヘラ描直線文が４条 頸部にタテハケが残る(11本/cm) 体部はヘラミガキ(4mm) 内面　口縁部にヘラミガキ	黒褐色 雲母が目立つ
10－B 2	壺	16.7 27.8 18.5	口縁端部は肥厚する 頸部に段を有する	外面　体部全面にヘラミガキ(3mm) 肩部にヘラ描直線文が4～5条 内面　口縁から頸部に細いヘラミガキ 肩部から下半は粗いヘラミガキ	淡赤燈色
10－B 3	壺	18.0 — 13.8	口縁部はゆるやかに外反する 端部は丸く終る 残存部は体部最大径と推測される	外面　体部全体に細いヘラミガキ(2mm) 頸部３条、肩部6～7条のヘラ描直線文 内面　ナデ調整、指頭圧痕が残る	灰黄褐色 角閃石を含む
10－B 4	壺	21.1 — 6.5	大きく外反する頸部 口縁端部は丸く終る	外面　頸部に１条、浅いヘラ描直線文 内面　口縁部に横方向のヘラミガキ(4mm)	浅黄燈色
10－B 5	壺	27.4 — 12.9	頸部は大きく外反する 口縁部はやゝ肥厚し、外に向かって面をもつ 口縁近くの位置に紐穴１孔を焼成前に内→外に穿つ	外面　体部全面に縦方向のハケ目8～9本/cmが密に施される 頸部に巾のあるヘラ描直線文が４条 内面　横方向の密なハケ目6～7本/cm	にぶい黄燈色
10－B 6	壺	— 20.5 19.6	口縁部形状不明 頸部は直立する 体部は大きく内湾し、平底へ続く	外面　頸部に7条のヘラ描直線文 肩部下半にヘラ描きの擬流水文 体部全面にヘラミガキ 内面　頸部にヘラミガキがわずかに残る	浅黄燈色 胎土は密
10－B 7	壺	16.1 22.0 26.5	頸部は外反し、端部は丸く終る 底部は突出して上げ底	外面　頸部にヘラ描き直線文8条 口縁部と体部下半にタテハケ7本/cmを施しヘラミガキを重ねる 肩部にヘラ描直線文が6条 内面　全面ゆびナデ	にぶい黄燈色 金雲母を多量含む
10－B 8	壺	19.0 27.2 35.4	器高が胴径を上回る 頸部は外反し端部はやや肥厚する平底	外面　頸部にヘラ描直線文3条 肩部にもヘラ描直線文4条 頸部は風化しているが体部下半にヘラミガキ(3mm)を施す 内面　ナデ調整	にぶい黄色 角閃石を含む
11－B 9	壺	30.3 — 16.7	口縁は頸部から大きく外反する 端部は外に面をもち厚い 頸部は直立している	外面　横方向のヘラミガキ(4mm) 頸部に8本/cmのタテハケを施したのち9条のヘラ描き直線文を重ねる ヘラミガキとタテハケが一部混在 内面　横方向のヘラミガキ(4mm)が全面に残る	明赤褐色を呈す 角閃石を多量含む
11－B10	壺	22.9 — 10.2	口縁部は外反する 端部は丸みをもって終る	外面　横方向のヘラミガキ(2mm)がわずかに残る 頸部にヘラ描き直線が4条 内面　風化が激しく明瞭ではない	にぶい赤褐色 やや粗
11－B11	壺	22.0 — 12.1	直立する頸部からは縁部は外反する 口頸部に紐孔が1つ内→外に穿たれる 体部はゆるやかに内湾して下る	外面　横方向のヘラミガキ(2mm) 頸部に5条のヘラ描直線文 内面　横方向のヘラミガキ、指おさえ	やゝ粗
11－B12	壺	22.4 — 11.2	口縁部は外反し端部は肥厚し丸みをもって終る 肩部に張りがない	外面　タテ方向のハケ目(10本/cm)を施したのちヨコ方向のヘラミガキを重ねる 頸部に浅いヘラ描直線文が3条 内面　口縁部に横方向のヘラミガキが残る	やゝ粗
11－B13	壺	18.6 — 8.1	口縁部は肥厚し、外反している 端部は丸く終る	外面　横方向のヘラミガキ(2mm) 削り出突帯の上にヘラ描沈線が１条 内面　横方向のハケ目(9本/cm)	にぶい黄燈色 角閃石を中量含む

11－B14	壺	23.6 — 11.4	筒形の頸部から口縁部は大きく外反する、その端部は丸い	外面　全体に(9本/原体)のタテハケを施したのち6条のヘラ描直線文を重ねる 内面　風化のため不明、板ナデの痕が残る	角閃石少量含む
11－B15	壺	14.6 16.0 18.4	平底から逆くの字に内湾する体部 頸部は直立気味 口縁部は大きく外反し、端部は丸い	外面　口縁部と肩部、体部下半にヘラミガキ(2mm) 内面　口縁部にヘラミガキが残る	淡橙色
11－B16	壺	13.3 16.0 17.2	体部は逆くの字に屈曲する 口縁部は大きく外反し端部は水平にのびる 紐孔が１つ（内外から体心に穿つ）	外面　頸部、肩部にヘラ描直線文がそれぞれ4条、6条巡る 器壁全面にヘラミガキを施す 内面　口縁から頸部にかけてヘラミガキが残る	橙色を呈す 焼成はやゝ軟 金雲母がめだつ
11－B17	壺	15.7 — 19.5	体部は逆くの字に屈曲 頸部からゆるやかに外反する口縁の端部は丸く納められる 平底	外面　口縁部と体部下半は横方向のヘラミガキを施す。頸部を中心にタテハケ一部タタキ目(5本/cm)が認められる 内面　計測不可能だが斜めハケ目が残る	浅黄橙色 一部黒斑あり
11－B18	壺	21.1 — 11.6	直立気味の頸部からゆるやかに外反しては縁部が続く、端部は外に向かって面をもつ 紐孔が１つ	外面　頸部の貼付突帯にヘラによる刻目を施す。体部は縁部もヘラミガキがわずかに残る 内面　板ナデののち、全面にヘラミガキ(4mm)	明赤褐色 角閃石を多量に含む
11－B19	壺	23.0 — 8.3	大きく外反する口縁部はやゝ肥厚し、端部は斜め上方に面を有する 器表面にツヤがある	外面　全面ヘラミガキ 貼付突帯に4mmの小さな刻目を巡らす	胎土は密である 角閃石を含む
12－B20		31.6 — 12.8	張りのない肩部から口縁部は外反して続く、口縁端部は斜め上方に面をもつ	外面　全面に細いタテハケ(8本/cm)を施したのち頸部に浅いヘラ描直線文を間隔をもって4条巡らす 内面　ナデ調整	
12－B21	壺	10.8 — 28.6	内湾する体部に直立気味の頸部が続く、口縁部はやゝ肥厚し、外反する端部は丸い	外面　体部にヨコハケがわずかに残る 頸部にヘラミガキを施したのち3条のヘラ描直線文を重ねる 内面　口縁部にヘラミガキがわずかに残る 板ナデ、指ナデ	にぶい黄褐色 角閃色を多量含む
12－B22	無頸壺	11.0 — 3.9	内傾する口縁部の端部は丸く終る 紐孔が１つ外→内に斜に穿られる	外面　貼付突帯が３段、それぞれ4mmの刻目文を施す。体部にヘラミガキが残る 内面　ナデ調整	にぶい褐色 胎土は密
12－B23	高　杯	底部径 8.0 7.5	脚部は内湾し、裾部は水平にのび肥厚する 林部はゆるやかに外傾して続く	外面　裾部のみヨコナデが認められるが、他は風化が激しく調整不明	金雲母が多量
12－B24	ミニ壺	— 4.4 4.4	体部は逆くの字に屈曲する 底部は突出し、上げ底	外面　ゆびナデ、ゆびおさえ 内面　調整不明	黒斑あり
12－B25	ミニ壺	— 9.0 9.5	底は上げ底状 体部は逆くの字に屈曲する 頸部は直立気味である	外面　底部付近にヘラミガキ(3mm)が残る 内面　ナデ 粘土紐の痕が残る	灰白色 上限はほゞ口縁端部？黒斑あり
12－B26	ミニ鉢	5.5 — 2.8	平底から体部は斜め上方へ開く 端部は肥厚し上げ底	外面　指ナデのあとタテハケがわずかに残る 内面　指ナデ	灰黄褐色 角閃石を含む
12－B27	ミニ鉢	7.8 — 4.7	底部は突出し上げ底 体部は斜め上方に開く 端部は丸みをもって終る	外面　指おさえ 内面　指おさえのあとヨコナデ	黒斑あり
12－B28	ミニ甕	8.3 — 7.0	平底から体部は内湾してたちあがる 口縁部は外傾し端部はわずかに直立気味に丸く終る	外面　指おさえ、ヨコナデ 内面　指おさえ 粘土紐の痕（外側）が３ケ所残る	褐色 角閃石を含む 煤付着
12－B29	紡錘車	縦　4.3 横　4.3 厚さ0.75	中央に孔が１つ上下から穿たれる	全面にナデ調整	
12－B30	甕	19.4 — 18.5	穿孔を１ケ所有する平底から張りの少ない体部と外反する口縁部が続く 口縁端部は丸みをもって終る	外面　風化のため調整不明 口縁部ヨコナデ 内面　斜めハケ(6本/cm)右下→左上	にぶい黄橙色

12－B31	甕	(推)18.0 — 18.0	張りの少ない体部 口縁部は外反し端部は丸みをもって終る。平底？	外面 タテハケ(6本/cm) 体部下半は磨耗している 内面 指おさえ、指ナデ	明赤褐色 角閃石を含む 煤付着
13－B32	甕	18.6 — 19.4	張りの少ない体部と外反する口縁部をもつ 端部は丸味をもって終る	外面 斜めハケ目、タテハケ、ヨコハケが混在7本/原体、口縁部ヨコナデ 内面 外面と同原体のハケ目がわずかに残る	灰オリーブ色 角閃石を含む 胎土はやゝ密
13－B33	甕	(推)15.6 — 16.5	体部中位よりやゝ上に最大径をもち、丸みのある体部と外反する口縁をもつ。端部は外傾した面を有する	外面 タテハケ、斜めナケ(5本/cm)右下→左上口縁部にヘラによる刻目を施す 内面 外面と同原体のハケを右→左のヨコハケ	にぶい黄褐色
13－B34	甕	(推)16.7 — 17.0	張りの少ない体部とゆるやかに短く外反する口縁部をもつ 口縁端部は丸く終る	外面 右下→左上の斜めハケ(9本/cm)と口縁部にヨコハケ、頸部に2条のヘラ描直線文 内面 指ナデ	橙色 角閃石を含む 全面に煤付着
13－B35	甕	(推)22.0 — 15.0	張りの少ない体部 短く外反する口縁に粘土を重ねて上方に面をもたせる	外面 タテハケ(7本/cm)風化し磨耗は頸部に寸断するヘラ描直線文が3条 端部に4mmの刻み目文を施す	黒褐色 煤付着
13－B36	甕	(推)18.0 — 15.9	張りのない体部にゆるやかに外反する口縁部をもつ 口縁端部は丸みをもって終る	外面 風化のため調整不明 口頸部にヘラ描直線文が2条 内面 縦横のナデ	赤褐色
13－B37	甕	(推)19.6 — 21.7	張りのない体部と「逆L字」の口縁をもつ 口縁端部は丸みをもって終る	外面 わずかにタテハケが残る 口頸部に5条のヘラ描直線文 端部に7mmの刻み目文を施す 内面 風化のため調整不明	黄灰色 丈高である
13－B38	甕	(推)21.0 — 11.1	倒鐘型の体部と頸部でやゝしまって外反する口縁部をもつ 口縁端部は丸みをもって終る	外面 タテハケ(7本/cm)を体部に施す 頸部にヘラ描直線文が3条巡る 内面 ナデ、粘土紐の痕(外傾)が2ケ所残る	黒褐色
13－B39	甕	(推)23.4 — 15.8	体部中位より上に最大径をもつ 口縁はゆるやかに外反し端部は丸く終る	外面 タテハケ、斜めハケ(6本/cm)を施す 頸部に3条のヘラ描直線文 口縁端部に4mmの刻み目文 内面 外面と同原体の斜めハケ	にぶい黄橙色 煤付着
13－B40	甕	(推)23.2 — 16.7	張りの少ない体とゆるやかに外反する口縁部をもつ 端部はやゝ角ばって終る	外面 下→上のタテハケ(6本/cm)は頸部、上→下のタテハケが最大径より下に施される 内面 横ハケ(6本/cm)	にぶい黄橙色 外面全体に煤付着
13－B41	甕	(推)22.3 — 22.6	倒鐘型の体部とやゝ肥厚し外反する口縁部をもつ 底部は平底	外面 タテハケ(6本/cm)、底部にヘラミガキ、頸部に寸断するヘラ描直線文、端部下半に3mmの刻み目文 内面 口縁付近にヨコハケ	褐色 全面に煤付着
14－B42	甕	(推)17.6 — 15.6	張りのない体部と「くの字」に屈曲する縁をもつ 端部は丸みをもって終る	外面 タテハケ(4本/cm)、端部に4mmの刻み目文、3条のヘラ描直線文 内面 板ナデ	灰黄褐色 煤付着
14－B43	甕	(推)18.0 — 16.7	倒鐘型の体部と外反する口縁部をもつ、端部はやゝ角ばって終る 底部は平底	外面 横ハケ(上半部)タテハケ(下半部) 口縁部に指おさえの痕が残る 内面 板なで、指おさえ	にぶい橙色 胎土はやゝ粗
14－B44	甕	(推)14.8 — 17.7	底部は突出し上げ底 張りのない体部と外反し端部でわずかに直立する口縁部をもつ 端部は丸みをもって終る	外面 風化のため調整不明 口頸部に3条のヘラ描直線文 口縁端部に刻み目文 内面 指なで	橙色 胎土は粗 煤付着
14－B45	甕	(推)31.2 — 12.8	ゆるやかに内傾する体部を「くの字」に屈曲する口縁部をもつ 端部は丸く終る	外面 右下→左上のハケ目(9本/cm)を施したのち3条のヘラ描直線文を重ねる 端部に8mmの刻み目文 内面 横方向のハケ目(外面と同原体)なでが縦横に見られる	橙色 焼成はやゝ軟 黒斑あり
14－B46	甕	(推)30.0 — 28.0	球形の体部と強く外反する口縁部をもつ、端部は丸みをもって終る 平底	外面 斜めハケ目(9本/cm)右下→左上、口頸部は風化している 内面 同原体で横ハケ	にぶい黄橙色 全面に煤付着
14－B47	甕	(推)23.3 — 19.7	球形の体部と「くの字」に屈曲する口縁部をもつ、端部は丸みをもって終る	外面 横、斜め方向のハケ目(9本/cm)の上に3条のヘラ描直線文、端部に刻み目文 内面 指なで、指おさえ、ハケ目が一部残る	黄褐色 全面に煤付着

14－B48	甕	(推)20.0 — 20.0	張りのない体部を強く外反する口縁部をもつ 端部はやゝ角ばって終る。	外面　口頸部にタテハケ(8本/cm) 3条のヘラ描き直線文 ヘラミガキ(4mm)が縦横に施される 内面　調整不明、原体痕が数ケ所残る	黒褐色 角閃石を含む
14－B49	甕	(推)21.9 — 23.2	平底に倒鐘型の体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ 端部は丸味く終る	外面　タテハケ(3～4本/cm)の上に3条のヘラ描直線文が施される。口縁部に4mmの刻み目文が整然と並ぶ 内面　ナデ	明赤褐色 黒斑あり
14－B50	鉢	(推)21.7 — 14.2	底部形状不明 ゆるやかに外傾する体部と水平にのびる口縁部をもつ 端部は丸く終る	外面　縦方向のヘラミガキ(3mm)に横方向のヘラミガキが重なる。口縁部はヨコナデ 内面　横方向のヘラミガキ	にぶい黄褐色 角閃石を多量に含む
14－B51	壺底部	底部径14.0 — 4.6	中央部がやゝ凹む平底	外面　板ナデの原体痕が残る底部木調整 内面　風化のため調整不明 粘土を補った痕が残る	にぶい黄橙色
14－B52	壺底部	底部径19.2 — 5.8	上げ底気味の平底	外面　横方向のヘラミガキ(4mm)とタテハケが残る 内面　板ナデ、原体痕が残る	にぶい黄橙色 角閃石を多量に含む、煤付着
14－B53	壺底部	底部径13.4 — 8.8	うすい平底から外傾して体部が続く	外面　底部不調整 ヘラミガキ(4mm)をタテハケ、ヨコハケ(5本/原体) 内面　風化剝離のため調整不明	灰黄色
15－B54	浅鉢	16.4 — 8.5	平底から内湾する体部と直立し端部に面をもつ口縁部をもつ	外面　板ナデ(原体痕が残る)底部不調整 内面　指ナデ 粘土紐の痕(内傾)が3ケ所残る	黄灰色 角閃石を含む
15－B55	無頸壺	9.4 15.0 8.6	底部は突出し上げ底気味 大きく内湾する体部と内傾する面をもつ口縁部を有する	外面　斜め方向のヘラミガキ(3mm)、肩部にヘラ描直線文が3条、一部ナデでつぶれる 内面　ナデ	黄褐色
15－B56	甕蓋	(推)21.1 — 7.0	笠形 口縁端部は水平にのび面をもつ	外面　つまみ上部はナデのあとケズリ 体部上半にヘラミガキ 内面　指おさえのあと、ヘラミガキ	にぶい黄橙色 黒斑あり
15－B57	甕蓋	(推)21.4 — 7.0	笠形 ゆるやかに外湾し裾部は水平にのびて面をもつ	外面　風化のため調整不明 内面　ヘラミガキがわずかに残る	
15－B58	鉢	(推)45.6 — 21.8	平底 外反してのびる体部から口縁部は直立気味に続き端部は丸く終る	外面　体部はタテハケ(6本/cm)とヨコハケ(15本/cm)が混在する。底部は木調整 内面　風化している。ヨコハケ(6本/cm)が残る	角閃石を多量に含む
15－B59	鉢	(推)45.8 — 24.9	底部形状不明 外傾する体部「く」の字に短く外反する口縁をもつ。端部は丸みをもって終る 把手が4ケ所残る(5ケ所にあった)	外面　斜めハケ目(10本/cm)、口縁部ヨコナデ 内面　板ナデ(原体幅3.3cm)	灰白色 角閃石含む 黒斑あり
16－B60	壺	(推)25.1 — 14.5	肩部、頸部に突帯を有し口頸部は大きく外反する 端部は丸く終る	外面　口頸部タテハケ(5本/cm)の上にヘラミガキ(4mm)肩部は横方向のヘラミガキが密に施される。貼付突帯＋ヘラ描刻み目が頸部肩部に各々2枚 内面　横方向のヘラミガキ(2～3mm)	にぶい黄褐色
16－B61	壺	(推)16.8 — 8.3	頸部で段をなしやゝ直立したのち口縁で外反する 端部は丸く終る	外面　頸部は縦方向のヘラミガキ(2mm)削出突帯は巾があり低い 内面　板ナデのちヘラミガキ	淡黄色を呈す
16－B62	鉢	— 21.5 14.5	低い高台から体部下半部に最大径をもち内湾する。頸部でしまったのち外傾する口縁部欠損のため形状不明	外面　体部1/3に4分割のヘラミガキ(2mm)体部2/3は櫛描簾状文が6条(逆時計回り) 内面　縦横のナデ	胎土　密 暗褐色
16－B63	甕	(推)22.2 — 23.7	底部に穿孔が1つ 張りの少ない体部と強く外反し、やゝ肥厚する口縁部をもつ 端部は丸く終る	外面　風化しているが縦方向のヘラミガキ(2mm)が残る、8条のヘラ描直線文 端部に刻み目文(3mm) 内面　板ナデ	黄褐色 角閃石を多量に含む 仕上げが丁寧

16－B64	甕	36.4 — 33.7	球形の体部から「くの字」に屈曲する口縁は端部で肥厚し平担面を有する	外面　タテハケ(4本/cm)上→下 内面　タテハケ(6本/cm)体上部は横方向のハケ目を重ねる	にぶい黄橙色
16－B65	甕	(推)25.2 — 2.9	口縁部端面が下方に突出している 上方に平担面をもつ	外面　口縁上面に櫛描列点文を２列(逆時計回り)、一画はナデによる凹線の上にヘラ描矢羽状文一画は貼付	にぶい黄褐色 角閃石を含む
16－B66	高杯	底部径 9.8 — 9.5	脚部は内傾し杯部に向かって直立する 裾部は外に面をもち上方に拡張する	外面　縦方向のヘラミガキ下→上 裾部は横方向のヘラミガキ 内面　ヘラミガキのあとナデ、杯部内面ヘラミガキ	明赤褐色 角閃石を少量含む
16－B67	高杯	底部径10.8 — 9.1	裾部は水平に伸びる 端部は丸く終る 脚部は内傾したあと直立し、杯部に続く	外面　ナデのあと８段に竹管文が巡る 脚上部にヘラミガキが残る 内面　ナデ、絞りあとがある	明褐色 煤付着

NGT　C区　出土土器

図番号	器種	法量 口径 胴径 残存高	形態	文様・技法	備考
37－C１	甕	(推)20.0 — —	張りのない体部と強く外反する口縁をもつ 端部はやゝ尖り気味	外面　風化し不明 内面　ナデ？	にぶい黄橙色
37－C２	甕	(推)30.2 — 7.4	張りの体部と如意型に外反する口縁部をもつ 端部は丸く終る	外面　ナデのあとヘラ描直線文が４条 口縁部ヨコナデ 内面　ナデ	にぶい黄橙色 角閃石を多量に含む
37－C３	甕	(推)27.7 — 5.1	張りの少ない体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ 端部は丸く終る	外面　ナデのあと浅いヘラ描直線文を４条施す 内面　風化剝毫	暗黄灰色 煤付着
37－C４	甕	(推)45.3 — 16.5	張りのない体部 口縁部はゆるやかに外反する	外面　風化し調整不明 内面　風化し調整不明	にぶい黄橙色
37－C５	無頸壺	7.6 15.6 12.9	平底に穿孔が１つ 斜め上方に開き、腰部で屈折して内湾する。端部は内傾する	外面　体部全面横方向のヘラミガキ(4mm)低い貼付突帯に6mmの刻み目文 内面　下→上へ放射線状にヘラミガキ	明赤褐色 黒斑あり
37－C６	甕	(推)19.9 — 20.7	張りのない体部と外反しわずかに直立気味の口縁部をもつ 端部は丸みをもって終る	外面　頸体部のタテハケ、頸部の斜めハケ、２条のヘラ描直線文(逆時計回) 内面　右→左の細かいハケ　、	にぶい黄橙色 体部中位煤ける
37－C７	甕	(推)18.6 — 18.0	丸味のある体部と「く」の字形に外反する縁部をもつ 端部はやゝ角ばる	外面　斜めヨコハケ(11本/cm)頸部はタテハケ、クシ描直線文を7帯(逆時計回) に施す 内面　右下→左上の斜めハケ(6本/cm)	暗褐色 角閃石を多量含む
37－C８	壺	(推)27.8 — 12.3	直立する頸部から大きく外反し水平に伸びる端部をもつ 端部はやゝ角ばる	外面　タテハケ(9本/cm) 頸部に7条、5条のヘラ描直線文が2段	橙色
37－C９	鉢	(推)25.5 — 6.8	斜め上方に開く体部と屈曲し外反する口縁をもつ 把手は四方向にあったと思われる	外面　ナデのあと2条のヘラ描直線文を施し把手は貼りつける 内面　ナデ	灰黄褐色
37－C10	鉢	(推)10.1 — 5.9	ゆるやかに外傾する体部と直立気味の口縁部をもつ 端部は丸みをもって終る	外面　風化剝離のため不明 内面　風化剝離のため不明	灰黄褐色 内面に煤が付着
37－C11	甕	(推)31.3 — 13.4	張りのない体部と頸部で少ししまり、外反する口縁部をもつ 端部は丸みをもって終る	外面　ナデ 内面　横、斜め方向のハケ目	にぶい黄橙色 角閃石を多量に含む
38－C12	甕	底部径6.5 — 16.6	平底から斜め上方に開く体部をもつ 底部中央はやゝ凹む	外面　風化の為不明 内面　ナデ	にぶい黄橙色 内面に煤付着
38－C13	甕	(推)21.0 — —	丸みのある体部と上方に面をもち外に肥厚する口縁部をもつ	外面　頸部はヨコハケ、体部は斜めハケ(11本/cm) 内面　指ナデ	にぶい黄橙色 角閃石 内面上部に黒斑

38－C14	甕	底部径5.1 — 6.3	平底 斜め上方にゆるやかに開く	外面　風化 内面　指おさえ、ナデ	にぶい赤褐色 角閃石を多量に含む
38－C15	壺	(推)14.2 — 2.2	口縁部は強く外反し、端部は下方に肥厚する段状口縁を有する 外に向かって面をもつ	内外面共　ヨコナデ	灰黄褐色 角閃石を含む
38－C16	甕	(推)20.6 — 4.5	張りのない体部と水平に屈曲する口縁部をもつ 端部は丸みをもって終わる	外面　ヨコナデ、口縁部に3㎜の刻み目文、5条のヘラ描直線文 内面　ナデ	にぶい黄橙色 角閃石を含む
38－C17	壺	(推)13.8 — 4.5	強く外反する口縁に段をなす	外面　横方向のヘラミガキ(2㎜) 口縁端部にヘラ描沈線が1条 内面　のナデ	灰色 内面に黒斑あり
38－C18	壺	(推)15.2 — 6.5	頸部に段をなし外反する 端部は丸く終る	外面　横方向のヘラミガキ(3㎜) 頸部にヘラ描直線文が1条 内面　ナデ	橙色
38－C19	甕	(推)17.6 — 3.9	頸部はやゝしまって外反する 端部は丸く終る	外面　ヨコナデ、ヘラ描直線文が3条 口縁端部に4㎜の刻み目文 内面　ヨコナデ	暗灰黄色
38－C20	甕	(推)20.7 — 9.1	球形の体部からゆるやかに外反する口縁部をもつ 端部は丸みをもって終る	外面　ナデ（方向は一定ではない） 内面　ナデ	黄灰色 煤付着
38－C21	壺	(推)15.1 — 5.4	口頸部は逆「ハ」の字に開く 端部は角ばる	外面　ナデ、口縁部はヨコナデ 内面　ナデのあとヘラミガキ(2㎜)	灰黄色
38－C22	甕	(推)16.8 — 5.4	張りのない体部と外反する口縁部をもつ 端部は丸く終る	外面　ナデ 口縁部ヨコナデ 内面　ナデ	橙色
39－C23	甕	(推)20.0 — 8.5	やゝ張りのある体部と強く外反する口縁をもつ 端部は丸みをもって終る	外面　斜めハケがわずかに残る ヘラ描直線文が4条巡る 端部にヘラによる刻み目文が等間隔に巡る	にぶい黄褐色 角閃石を多量に含む
39－C24	甕	(推)20.8 — 8.5	張りのない体部から強く外反する口縁部をもつ 端部は丸みをもって終る	外面　タテハケ、ヘラ描直線文が4条巡る 端部にヘラによる刻み目文(5㎜)が巡る 内面　細かいヨコハケ	淡黄色 外面口縁に煤付着
39－C25	壺	(推)14.4 — 4.5	やゝ直立する頸部からゆるやかに外反し端部は丸みをもって終る 頸部で段をなす	外面　頸部にヘラ描きによる直線文が１条巡る 口縁部はヨコナデ	浅黄橙色
39－C26	断面	器　壁		外面　貼付突帯7帯に刻み目文を施す 突帯間はヨコナデ 内面　右→左のハケ目	にぶい黄褐色
39－C27	甕	底径部7.0 — 11.6	平底 体部は斜め上方に開く	外面　タテハケ 内面　上半に横方向のハケ目が残る	橙色 内面に煤付着
39－C28	甕	(推)18.6 — 8.5	張りの少ない体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ 端部は丸く終る	外面　ヘラ描直線文が3条巡る 口縁端部には刻み目文が施される 内面　ヨコハケ	暗褐色 閃罠岩、角閃石を含む
39－C29	甕	(推)19.6 — 13.5	やゝ丸みのある体部と強く外反する口縁部をもつ 端部は丸く終る	外面　細いタテハケ、3条のヘラ描直線文(逆時計回り)口縁部は刻み目文が等間隔に巡る 内面　風化の為不明	にぶい黄橙色 閃緑岩、角閃石を含む
39－C30	鉢	(推)30.0 — 9.6	斜め上方に伸びる体部に強く外反する口縁部をもつ、体部上位に,瘤状把手あり、口縁端部は面をもつ	外面　口縁部はタテハケ、体部はヨコハケ(6本/㎝)、把手と口縁部はヨコナデ 内面　ヨコハケ（右→左）	にぶい黄橙色 角閃石、閃緑岩を含む
39－C31	壺	(推)27.8 — 13.3	頸部と斜め上方に開く口縁部をもつ 端部はわずかに肥厚し丸みをもって終る	外面　タテハケ(8本/㎝)逆時計回りのヘラ描直線文を6条施し、横方向のミガキ(2.8㎜) 内面　横方向のミガキ	にぶい黄褐色を呈す、角閃石、閃緑岩を含む
39－C32	壺	(推)13.3 — 9.1	直立する頸部と外反する口縁部をもつ 端部はやゝ角ばる	外面　タテ、斜めハケ(8本/㎝)の後6条のクシ描直線文、口縁部ヨコナデ 内面　右→左　ハケ目(8本/㎝)	灰黄色 角閃石、閃緑岩を含む

39－C33	壺	— — 11.0	直立する頸部からゆるやかに口縁部が続く	外面　貼付突帯に刻み目文を施す、突帯間はヨコナデ、口頸部は板ナデ？ 内面　右→左　ハケ目(6本/cm)	ぶい黄褐色、角閃石、閃緑岩を含む、外面うすく煤ける
39－C34	甕	(推)26.5 — 6.2	やゝ丸味をおびた体部とゆるやかに外反する端部をもつ 端部はわずかに角ばる	外面　細いヨコハケ（粘土が柔かい状態の成形時に用いる） 内面　右→左の細かいハケ	角閃石、閃緑岩を含む
39－C35	甕	(推)20.8 — 8.4	張りのない体部と強く外反する口縁部をもつ 端部は丸く終る	外面　口頸部タテヨコハケのあとヘラ描直線文 体部は斜めハケ目(6本/cm) 内面　右→左、右下→左上ハケ目(6本/cm)	灰黄褐色 角閃石を多量に含む
39－C36	甕	底径部5.3 — 5.4	やゝ突出した上げ底と斜め上方に開く体部を有する	外面　全面ヨコ方向のミガキ(2mm) 底部ミガキ 内面　ヨコ方向のミガキ(2mm)	黄橙色、角閃石、閃緑岩を含む、内面全面に煤付着
39－C37	壺・鉢	底部径9.4 — 5.2	突出した上げ底 斜め上方に開く体部をもつ 粘土紐の痕が残る（外傾）	外面　下→上タテハケ(7本/cm) （成形時のハケ調整） 内面　右→左の板ナデ	灰オリーブ色 角閃石、閃緑岩を含む
39－C38	壺・鉢	底部径9.2 — 4.8	やゝ突出した上げ底 内湾しながら体部が続く	外面　タテハケ、風化している 内面　風化のため不明	にぶい黄褐色
39－C39	甕	底部径7.6 — 8.7	突出気味の上げ底 底部の器壁はうすい 内湾して体部が続く	外面　タテハケ(10本/原体) 内面　ナデ	明褐色 黒斑あり
40－C40	甕	底部径4.5 — 3.9	突出した上げ底 斜め上方に開く体部が続く	外面　風化のため不明 内面　風化のため不明	橙色 黒斑あり
40－C41	壺・鉢	底部径6.8 — 2.3	突出気味の底部と斜め上方に開く体部を有する	外面　タテハケ(7本/原体) 内面　煤のため不明	にぶい黄橙色 角閃石を含む 黒斑あり
40－C42	甕	底部径7.2 — 11.3	平底 斜め上方に伸る体部をもつ	外面　下→上タテハケ(8本/cm) 底部はケズリを施す 内面　ナデ？	明赤橙色 黒斑あり
40－C43	甕	(推)18.7 — 16.8	球形の体部と強く外反する口縁部をもつ 端部は拡張しやゝ角ばる	外面　タテの細かいハケ目 口縁部にヘラによるV字状刻み目 内面　右→左の板ナデ？	浅黄橙色 煤が付着
40－C44	甕	(推)26.6 — 9.5	張りの少ない体部と頸部でやゝしまり外反し肥厚する口縁部をもつ 端部は丸く終る	外面　ナデのあと左上→右下のミガキ 口縁部ヨコナデ 内面　ナデ	にぶい黄褐色 角閃石を多量に含む
40－C45	甕・蓋	18.0 — 2.0	裾部は外湾し、端部は直立気味 端部は丸みをもって終る	内外面共調整不明	にぶい黄褐色 角閃石を含む 内面に煤付着
40－C46	壺	(推)12.3 — 7.3	細い頸部と大きく外反する口縁部をもつ 端部はやゝ角ばる	外面　横方向のヘラミガキ ４条のヘラ描直線文が巡る 内面　ヘラミガキ	にぶい黄橙色
40－C47	壺	(推)17.7 — 9.0	大きく内湾する体部と短く外反する口縁部をもつ 端部は拡張する	外面　タテの細いハケを施したのちヨコ、斜め方向のヘラミガキ(1.8mm) 低い貼付突帯にヘラ描直線文が１条巡る 内面　細かいヨコハケのあと横方向のミガキ	にぶい黄橙色 黒斑あり
40－C48	甕	(推)20.8 — 5.5	張りの少ない体部と逆「L」の字に屈曲する口縁をもつ 端部は丸みをもって終る	外面　体部は縦方向のナデ 口縁端部にヘラによる刻み目 内面　風化のため不明	にぶい橙色
40－C49	甕	(推)19.1 — 13.8	やゝ丸みをもつ体部と頸部でしまらず強く外反する口縁部をもつ 口縁端部は水平に伸び丸く終る	外面　タテヨコのヘラミガキ(1.5mm) ２条のヘラ描直線文を施す 端部にヘラによる刻み目	にぶい黄褐色 角閃石を含む 煤付着
40－C50	蓋	(推径) 14.8 厚さ 1.2	円板状 端部は丸く終る	外面　ヘラミガキ	にぶい黄色 角閃石を多量に含む

40－C51	甕	底部径6.5 — 5.0	平底 ゆるやかに内湾し立ち上がる体部をもつ	外面　タテハケ 内面　風化のため不明	明褐色 角閃石を多量に含む
40－C52	甕	底部径4.3 — 1.9	突出気味の底部 ゆるやかに斜め上方に開く体部をもつ	外面　細かいタテハケ（風化している） 内面　ナデ	浅黄色 黒斑あり
40－C53	壺？鉢	底部径6.7 — 2.7	平底 ゆるやかに斜め上方に開く体部をもつ	外面　横方向のヘラミガキ 内面　調整不明	にぶい黄褐色 角閃石を多量に含む、黒斑あり
40－C54	蓋	— — 1.5	蓋の中央部分 「ハ」の字に開く体部 穿孔が１つ上下から施される	外面　ヘラミガキ(風化している) 内面　ナデ	黒色
41－C55	壺	(推)17.5 — 3.3	口縁内側に貼付突帯をもつ 端部は丸みをもって終る	外面　ナデのあとヘラミガキ 内面　横方向のヘラミガキ	灰白色
41－C56	甕	底部径7.0 — 3.2	突出した底部と斜め外上方へ伸びる体部をもつ	内外面とも風化剝離のため調整不明	黄灰色
41－C57	壺・鉢	底部径13.1 — 6.2	上げ底気味の平底と斜め上方に開く体部をもつ 器壁は厚い	内外面とも風化のため調整不明	にぶい黄橙色 角閃石を含む
41－C58	甕	(推)28.6 — 10.8	少ししまる頸部と外反する口縁部をもつ 端部は丸く終る	外面　ヨコ、斜めのハケ目(7本/cm) 内面　ナデ	にぶい黄褐色 角閃石を含む 全面に煤付着
42－C59	甕	(推)26.2 — 11.8	張りのない体部と外反する口縁をもつ 端部は丸く終る	外面　細かいヨコハケ、2条のヘラ描直線文 端部に3mmのヘラによる刻み目 内面　指おさえとナデ	灰黄褐色 角閃石を含む 黒斑有り
42－C60	甕	(推)25.1 — 12.5	張りの少ない体部と外反する口縁をもつ 端部は丸く、器壁は厚い	外面　タテハケ(風化が激しい) 口縁部ヨコハケ 内面　ナデ	にぶい黄褐色 角閃石を含む 煤付着
42－C61	甕	(推)27.2 — 7.6	張りのない体部とゆるやかに外反する口縁をもつ 端部は丸みをもって終る	外面　斜め方向のヘラミガキ 口縁部に指おさえ 内面　ナデ	にぶい黄褐色 角閃石を多量に含む
42－C62	甕	(推)20.8 — 16.6	少し丸みのある体部と外反する口縁部をもつ 端部は丸みをもって終る	外面　タテハケを施す(7本/cm) 内面　ナデ	にぶい黄橙色 角閃石を多量に含む
42－C63	甕	(推)22.6 — 5.4	頸部で少ししまって、口縁部は外反する 端部は丸く終る	外面　風化している 端部にヘラによる刻み目 内面　ナデ	灰色
42－C64	鉢	(推)20.0 — 4.9	斜め上方に開く体部と頸部で少ししまり、外反する口縁部をもつ 端部は直立気味でやゝ角ばる	外面　ナデ、頸部にナデによる凹線 指おさえ 内面　指ナデ	にぶい黄褐色 角閃石を含む
42－C65	鉢	(推)26.3 — 7.5	斜め上方に開く体部と強く屈曲し外反する口縁部をもつ 端部は丸く終る	外面　ナデ、指おさえ 内面　ナデ調整	淡黄色 焼成不良
42－C66	壺	(推)27.0 — 11.9	直立した頸部と強く外反し、水平に伸びる口縁部をもつ 端部は段をなす	外面　頸部に刻み目を施した貼付突帯が7帯巡る、口縁端部に2条ヘラ描の直線文が巡る 内面　ナデ	明赤褐色 角閃石を多量に含む、黒斑あり
42－C67	壺	(推)16.5 — 3.5	口縁部は外反する 端部は丸く終る	内外面共ヨコナデ	にぶい黄橙色 焼成不良
42－C68	甕	底部径6.2 — 8.4	突出する底部と斜め上方に向かって開く体部を有する	内外面共、風化のため調整不明	にぶい黄褐色 角閃石を多量に含む、黒斑あり
42－C69	蓋	底部径4.9 — 2.6	平底 体部は斜め上方に開く	外面　底部はケズリ ナデ 内面　ナデ	淡黄色

42－C70	甕	(推)23.2 — 12.0	少し丸みをもつ体部と外反する口縁部をもつ 端部は丸く終る	外面　ナデ、ヘラによる直線文が5条 端部に刻み目がほゞ等間隔に巡る 内面　ゆびナデ	橙色
42－C71	甕	(推)18.5 — 6.4	張りのない体部と外反する口縁部をもつ 端部は丸く終る	内外面共風化のため不明	灰黄色
42－C72	甕	底部径4.8 — 4.6	平底 斜め上方に開く体部をもつ	外面　ナデ調整 内面　ヘラミガキ(1㎜)が縦方向	にぶい黄橙色 黒斑あり
42－C73	壺	底部径8.3 — 4.2	平底 ゆるやかに斜め外方に開く体部が続く	外面　縦方向のヘラミガキ(1.8㎜) 内面　風化剝離のため不明	にぶい黄色 角閃石を含む 黒斑あり
42－C74	壺	(推)28.6 — 5.4	外反し端部が上下に拡張する口縁部をもつ、上端部は内湾気味 外に向かって面をもつ	外面　口頸部は調整不明 端面にヘラによる縦の線状が残る 内面　風化のため不明	灰色
42－C75	甕	(推)20.1 — 5.2	張りのない体部から口縁部はゆるやかに外反して続く 端部は丸い	外面　横方向のヘラミガキ(2㎜) 内面　ナデ	にぶい黄褐色 角閃石を含む 煤が付着、金雲母多量
42－C76	甕	(推)31.7 — 4.8	張りのない体部と逆「L」の字状に屈曲する口縁部をもつ 端部は丸い	外面　ナデ？ 端部にヘラによるV字の刻み目文(6㎜) 内面　ナデ？	浅黄色
42－C77	甕	(推)20.3 — 6.3	張りの少ない体部と外反する口縁をもつ 端部は丸みをもつが器壁はうすい	外面　ナデのあと 口縁部はヨコナデ 内面　ナデ	にぶい黄褐色 角閃石を含む

D区　出　土　土　器

図番号	器種	口径 法量胴径 残存高	形　　態	文　様　・　技　法	備　考
56－D1	甕	底部径5.0 — 8.8	突出した平底 内湾気味に開く体部	外面　タテハケ(6本/㎝)風化している 内面　ナデ（原体痕が残る）	にぶい黄橙色
56－D2	甕	底部径9.0 — 5.1	平底 斜め外上方へ開く体部	外面　風化のため調整不明 内面　板ナデ	にぶい黄色 ※底部にモミ痕あり
56－D3	鉢	(推)39.0 — 10.1	「くの字」に外反する口縁部 端部はわずかに角ばる	外面　不定方向のハケ(原体巾不明) 粘土紐のあとが残る(内傾) 内面　風化のため調整不明	灰オリーブ色 角閃石がめだつ
56－D4	甕	(推)22.6 — 10.2	少し丸みをもった体部に水平近く屈曲する口縁部が続く 端部は丸く終る	外面　煤が密で調整不明 内面　斜めハケ目(11本/㎝)	暗灰黄色 角閃石含む 金雲母がめだつ
56－D5	壺	(推)12.6 — 6.2	直立気味の頸部から内湾しそのまま直行する口縁部をもつ 端部は丸く終る。器壁はうすい	外面　タテハケ(6本/㎝) 口縁部はヨコナデ 内面　ナデ	暗灰黄色
56－D6		器壁 0.9		外面　クシ描直線文5帯(9条) 最下段は直線文の間に波状文を施す	
56－D7		器壁 0.8		外面　クシ描直線文(7条)の間に同原体による上→下の扇形文	
56－D8		器壁 0.8		外面　左→右のクシ描直線文(8条)	※赤色物質塗布
57－D9	甕	(推)21.6 — 4.7	張りのない体部と外反する口縁部をもつ 端部は丸く終る	外面　ヘラ描き直線文が2条 端部にヘラによる刻み目(3㎜)	にぶい黄褐色 角閃石を多量に含む
57－D10	甕	(推)27.3 — 19.1	すこし張りのある体部とあまりしまらずゆるやかに外反する口縁部をもつ、端部は丸く終る	外面　斜めハケ(原体巾不明)が残る 内面　指おさえ＋ナデ	にぶい黄橙色
57－D11	鉢	(推)19.7 — 6.1	内湾する体部に直行する口縁部が続く	外面　ナデのあとヘラによる刺突文を施す 内面　ヘラミガキが残る(2㎜)	にぶい橙色

57－D12	壺	(推)11.5 — 7.8	内傾する体部から「くの字」に屈曲し端部は丸みをもって終る	外面　風化しているがヘラ描直線文が数条 内面　板ナデ	灰褐色 角閃石を多量に含む
57－D13	壺	(推)26.7 — 7.9	口縁部はゆるやかに外反する 口頸部内側に段をなす 端部は丸く終る	外面　タテハケ(5本/cm)のあとヘラ描直線文(巾1.5mm)を施す 内面　ヨコハケ(7本/cm)横方向のヘラミガキ	浅黄色
57－D14	甕	底部径7.4 — 6.4	上げ底気味の平底 斜め外上方に開く体部をもつ	内外面共風化のため調整不明	にぶい黄褐色 角閃石を多量に含む、黒斑あり
58－D15	高杯	(推)17.2 — 7.2	「逆ハの字」に開く体部と直行する口縁部をもつ	外面　指おさえのあと横方向のヘラミガキ(0.5mm)さらに縦方向のヘラミガキを重ねる 内面　体部は縦方向のヘラミガキ、口縁部は横方向のヘラミガキ	灰黄褐色 角閃石を含む 胎土は密
58－D16	壺	(推)15.2 — 9.3	わずかに外傾する口頸部と直行する口縁部をもつ 端部は丸く終る	時計回りのヘラ描直線文(1mm)を施した間に竹管による刺突文(径3mm)とヘラ状の原体による刺突文が巡る 内面　横方向のヘラミガキ(4mm)	にぶい赤褐色 角閃石を含む 口縁端部に黒斑あり
58－D17	鉢	(推)19.0 — 5.0	平底、内湾気味に開く体部に外傾する面をなす口縁部をもつ 粘土紐の継目(外傾)	外面　指おさえのあとヘラミガキ(2mm) 内面　ナデ＋横方向のヘラミガキ(2mm)	にぶい黄褐色 黒斑あり
58－D18	甕・蓋	器高 6.3	笠形 つまみ部上面はやゆくぼむ 体部は外傾して下る	外面　下→上のヘラミガキ(3mm) つまみ部はヨコナデ＋指おさえ 内面　指おさえ、横方向のヘラミガキ	明赤褐色 角閃石を多量に含む
58－D19	甕	(推)24.0 — 11.6	張りのある体部と頸部でやゝしまり強く外反する口縁部をもつ 端部は丸みをもって終る	外面　調整不明、ヘラ描直線文が3条(時計回り)、端部はV字のヘラによる刻み目 内面　ナデ	黒褐色 煤が密に付着
58－D20	甕	(推)22.9 — 8.0	張りの少ない体部と「逆L字」に屈曲する口縁部をもつ 端部は丸みをもって終る	外面　右下→左上のハケ目(8本/原体) 端部にU字形の小さい刻み目 内面　調整不明（原体痕が残る）	角閃石を含む
58－D21	鉢・壺？	底部径10.9 — 8.3	上げ底気味の平底 斜め外上方に開く体部	外面　下→上のタテハケのあとヘラミガキ(3mm) 内面　調整不明	明褐色
58－D22	鉢・壺？	底部径9.1 — 6.1	上げ底気味の平底 やゝ内湾して開く体部	外面　下→上のヘラミガキ(4mm) 内面　風化のため調整不明(原体痕残る)	にぶい褐色 黒斑あり
59－D23	深鉢(縄文)	(推)25.8 — 6.0	張りのない体部と水平に短くのびる突帯をもつ 口縁端部は丸く終る	外面　突帯下に右→左の直線文が断続的に施される。突帯にV字の刻み目	灰黄褐色 角閃石を含む 船橋式
59－D24	鉢？壺	底部径11.0 — 8.5	突出気味の平底 斜め外上方に開く体部	外面　下→上のタテハケ(6本/cm)が密である 内面　横方向のヘラミガキ(4mm)	にぶい褐色 大つぶの角閃石がめだつ、黒斑あり
59－D25	鉢？壺	底部径10.2 — 7.8	突出気味の平底 体部は斜め外上方に開く	外面　下→上のタテハケ(11本/原体) 内面　横、斜め方向のヘラミガキ(4mm)	にぶい黄橙色 黒斑あり
59－D26	甕・壺	器高 7.2	笠形 体部は外傾して下る	外面　縦方向のヘラミガキ(3mm) 内面　斜め、横方向のヘラミガキ	にぶい黄橙色 黒斑あり 煤付着
59－D27	ミニチュア甕	(推) 8.2 — 5.4	平底 斜め外上方に開く体部と直行しやゝ肥厚した端部をもつ	外面　指おさえのあと右下→左上のハケ目(7本/cm)、底部はナデ 内面　台→左のハケ目	黄灰色
59－D28	ミニチュア壺	(推) 2.9 5.0 5.8	突出した上げ底 体部は「逆くの字」に屈曲し口縁はゆるやかに外反し、端部は丸く終る	内外面共に指おさえ＋ナデ	にぶい黄褐色 角閃石を含む
59－D29		径　5.2 器壁0.95	円形	内外面　ナデ、片面にのみわずかにハケ目が残る	にぶい橙色 角閃石を含む

A区　出　土　木　器

(単位　cm)

図番号	器　種	長さ(cm)	幅　(cm)	厚さ(cm)	特　徴
6－A5	不　明	30.0	3.7	1.2	板　状
6－A6	不　明	26.4	5.2	0.9	有孔板状
6－A7	不　明	31.0	6.0	2.3	
6－A8	不　明	16.4	3.4	1.8	中央に抉り
6－A9	不　明	62.4	3.2	1.0	細長い板状
6－A10	刺突具	13.2	0.8	0.6	両端尖る
6－A11	不　明	8.4	3.8	1.0	

B区　出　土　木　器

(単位　cm)

図番号	器　種	長さ(cm)	幅　(cm)	厚さ(cm)	特　徴
17－B68	平　鍬	35.0	17.0	4.0	未成品、舟形隆起が残る
17－B69	平　鍬	35.4	19.4	5.0	未成品
17－B70	不　明	27.0	20.0	5.4	
18－B71	不　明	42.8	5.0	2.2	細長い板状
18－B72	不　明	16.0	3.6	3.4	丸い棒状
18－B73	椀	口径14.2		器高 8.2	
18－B74	平　鍬	16.6	10.0	3.0	
18－B75	不　明	径　13.0	6.0	1.4	
18－B76	不　明	12.2	11.2	4.4	片面に抉り
18－B77	不　明	14.8	9.0	2.2	
18－B78	不　明	10.4	15.2	1.8	
18－B79	不　明	5.8	14.0	2.3	
18－B80	不　明	18.0	10.8	1.6	
18－B81	不　明	23.4		1.0	

C区　出　土　木　器

(単位　cm)

図番号	器　種	長さ(cm)	幅　(cm)	厚さ(cm)	特　徴
43－C78	杓　子	42.0	8.0	柄　2.8 3.8	柄のつけ根で折れている
43－C79	柱　根	28.0	8.2	6.0	一端は尖る
43－C80	不　明	14.0	12.6	1.8	
43－C81	不　明	14.4	3.8	1.8	

D区　出　土　木　器

(単位　cm)

図番号	器　種	長さ(cm)	幅　(cm)	厚さ(cm)	特　徴
62－D34	不　明	74.0	9.8	5.0	断面三角形、端面に切り込み

関西電力東大阪変電所保管の木器

図番号	器　種	長さ(cm)	幅　(cm)	厚さ(cm)	特　　徴
66－11	平　鍬	21.2	10.0	2.8	円形の隆起
66－12	平　鍬	19.8	12.0	3.2	柄が残存する、舟形の隆起をもつ
66－13	平　鍬	11.4 10.0	16.2 10.4	4.4 1.3	木製品　折損している
66－14	不　明	10.2	10.1	1.6	低い隆起が
66－15	平　鍬	11.6	5.1	2.2	舟形の隆起部分のみ
66－16	不　明	12.6	7.8	1.7	端面に切りこみ
66－17	平　鍬	11.4 11.6	9.6 10.2	3.8 2.2	未成品、折損している
66－18	平　鍬	7.2	10.4	4.4	舟形の隆起
67－19	又　鍬	26.8	9.8	1.4	両端に切りこみ
67－20	不　明	24.2	9.6	2.2	
67－21	平　鍬	8.6	6.2	3.0	舟形隆起部分
67－22	不　明	23.4	5.4	0.8	有孔板状
67－23	高　杯	底部径16.2		高さ10.4	一木
67－24	部　材	23.4	13.8	10.4	
67－25	杓　子	径　14.4		4.4	刳形の浅い飯杓子

B区 出 土 石 器

図番号	製品名	長さ(cm)	幅 (cm)	厚み(cm)	重さ(g)	特 徴
19－B82	石 斧	9.6	7.8	4.1	522	太型蛤刃石斧
19－B83	石 斧	6.4	2.8	2.8	57.2	柱状片刃石斧
20－B84	石 鏃	2.3	1.7	0.5	1.1	凹基式
20－B85	石 鏃	2.3	1.7	0.4	0.95	凹基式
20－B86	石 鏃	2.4	1.2	0.4	0.6	
20－B87	石 鏃	1.5	1.6	0.4	0.8	平基式
20－B88	石 鏃	2.8	1.7	0.5	1.4	凹基式
20－B89	石 鏃	3.4	1.4	0.6	2.1	尖基式
20－B90	石 鏃	3.4	2.5	0.7	2.3	凹基式
20－B91	石 鏃	3.0	2.0	0.5	1.4	平基式
20－B92	石 錐	4.4	1.5	0.5	2.5	
20－B93	石 錐	5.6	2.4	0.8	9.8	
20－B94	不 明	5.0	2.3	1.0	11.2	
20－B95	石 鏃	6.2	3.9	0.7	16.2	凹基式
20－B96	不 明	5.8	5.6	1.0	50.8	
21－B97	石 包 丁	4.3	10.9	0.6	43.1	孔３つ 緑泥片岩
21－B98	石 包 丁	4.7	3.8	0.4	12.5	粘板岩
21－B99	石 包 丁	5.4	7.1	0.5	37.9	外彎刃 緑泥片岩
21－B100	石 包 丁	2.4	3.7	0.5	4.9	流紋岩
21－B101	石 包 丁	3.8	4.8	0.2	12.8	緑泥片岩
22－B102	石 剣	8.1	3.1	1.6	57.1	柄部のみ残存
22－B103	石 棒	8.5	2.7	2.4	109.5	緑泥片岩
23－B104	石 斧	10.3	7.0	3.0	286.3	
23－B105	石 斧	5.5	6.4	3.0	167.7	

C区　出　土　石　器

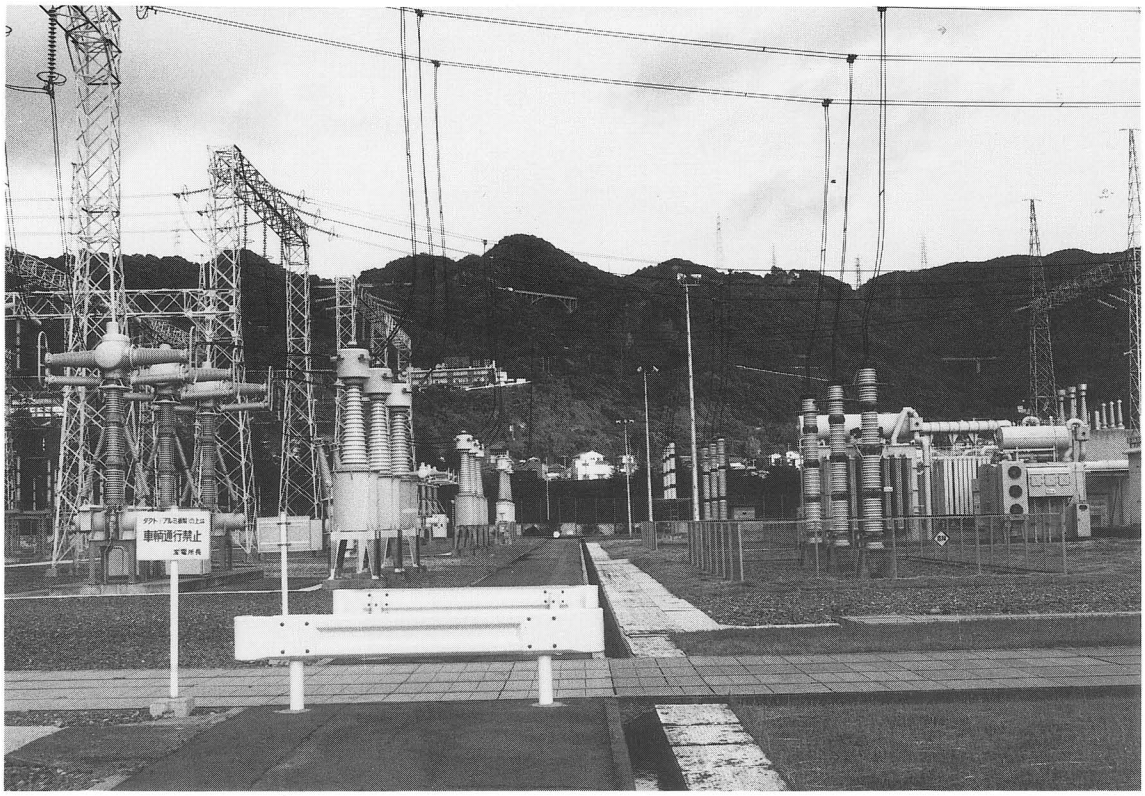
図番号	製品名	長さ(cm)	幅　(cm)	厚み(cm)	重さ(g)	特　　徴
44－C82	石　　槍	9.4	3.5	1.0	32.7	
44－C83	石　　鏃	2.4	1.7	0.3	1.8	未製品
44－C84	石　　鏃	2.7	1.8	0.5	1.8	凹基式
44－C85	石　　錐	3.0	1.1	0.6	1.9	
44－C86	石　　鏃	2.6	1.5	0.3	0.8	凹基式
44－C87	石　　鏃	3.1	1.5	0.5	1.3	凹基式
44－C88	石　　鏃	2.4	2.3	0.4	0.9	凹基式
44－C89	石　　鏃	2.1	1.3	0.5	0.8	凹基式
44－C90	石　　錐	4.7	2.2	1.0	9.8	
44－C91	石　　鏃	2.8	1.8	0.5	1.7	凹基式
45－C92	石　　槍	6.1	2.9	0.6	12.9	未製品
45－C93	不定形石器	3.5	1.4	0.8	4.6	
45－C94	不　　錐	4.0	1.2	0.6	2.9	
45－C95	石　　鏃	2.4	1.2	0.3	0.8	
45－C96	石　　鏃	3.0	2.1	0.5	1.9	凹基式
45－C97	石　　錐	3.8	1.2	0.8	2.8	
45－C98	不定形石器	4.1	2.0	0.6	3.8	
45－C99	石　　鏃	2.9	2.1	0.5	3.3	未製品
45－C100	石　　錐	3.6	1.5	0.9	4.2	
45－C101	石　　鏃	2.3	1.2	0.3	0.9	
45－C102	石　　鏃	2.7	2.1	0.5	2.3	平基式
45－C103	石　　錐	3.2	1.4	0.5	1.9	
45－C104	石　　鏃	1.3	1.4	0.4	0.6	平基式
45－C105	石　　鏃	2.5	1.5	0.4	1.0	凹基式

45－C106	石　錐	2.6	1.5	0.3	0.6	
46－C107	石包丁	6.0	9.8	0.9	77.5	緑泥片岩
46－C108	石包丁	4.6	6.1	0.7	34.7	外彎刃 緑泥片岩
46－C109	石包丁	5.9	6.0	0.9	36.6	
46－C110	石包丁	3.7	3.9	0.6	8.3	外彎刃
47－C111	石　斧	10.4	5.7	3.7	318.6	太型蛤刃石斧
47－C112	石　斧	9.9	5.2	4.4	317.5	太型蛤刃石斧
48－C113	石　斧	9.6	8.3	4.1	600	表面ガラス状溶融
48－C114	不　明	8.9	4.0	3.1	123.3	
48－C115	石　斧	5.9	1.3	1.2	16.6	柱状片刃石斧小型
49－C116	不　明	9.9	9.2	4.2	401.5	円形の窪み有
49－C117	不　明	4.6	7.8	0.9	35.3	板状緑泥片岩
49－C118	砥　石	6.2	5.5	5.2	341.4	砂岩
49－C119	不　明	4.4	5.0	0.6	22.6	円形板状

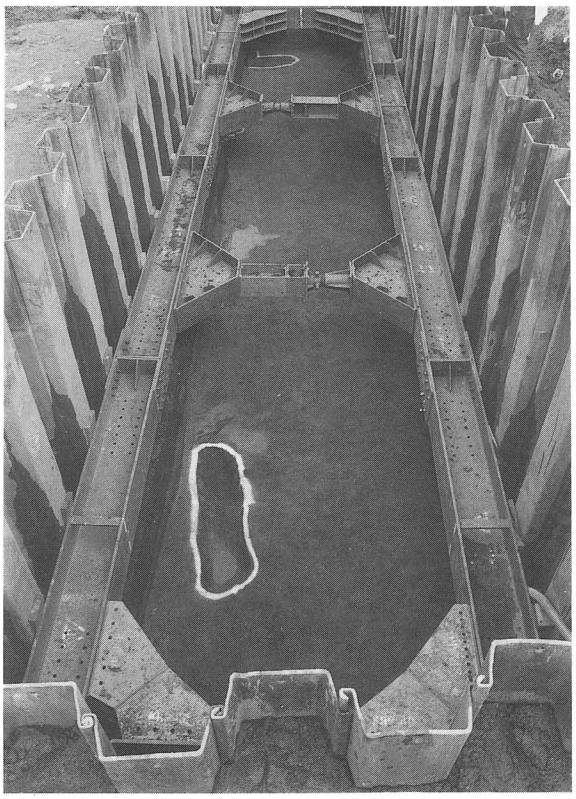
D区　出　土　石　器

図番号	製品名	長さ(cm)	幅　(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特　徴
60－D30	不　明	9.0	8.9	2.8	184.1	剝片　自然面を残す
60－D31	不　明	3.1	3.4	0.6	6.1	
60－D32	不　明	4.4	4.3	0.8	19.1	
61－D33	石包丁	4.2	14.2	0.8	66.4	

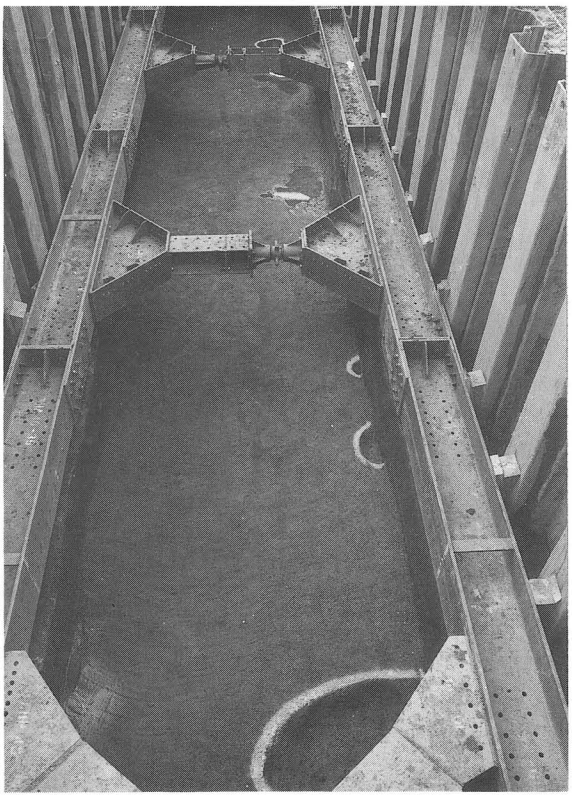
図　　版



調査地全景（後方の山は国見高地性遺跡）

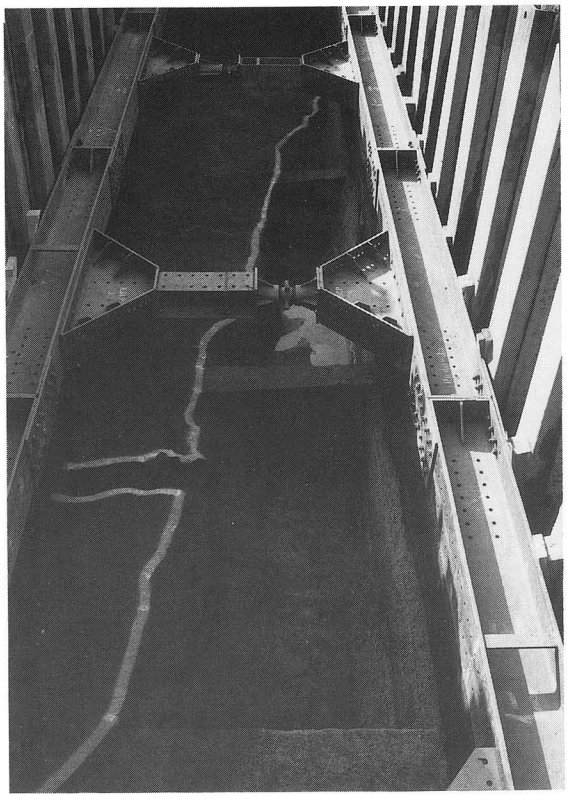


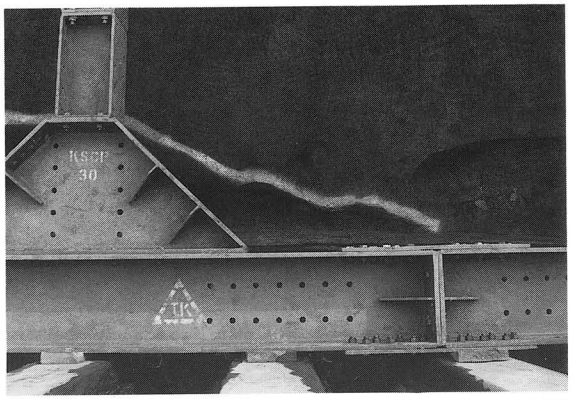
第１遺構面全景（西より）



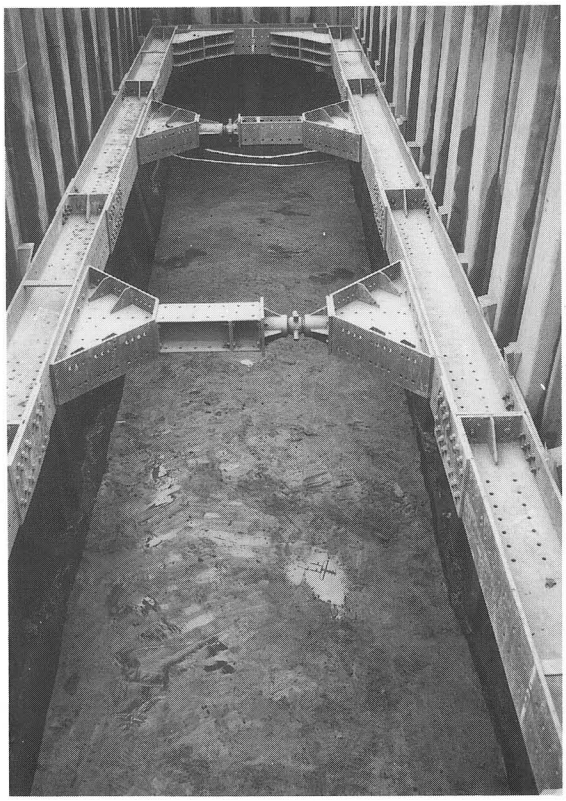
第１遺構面全景（東より）

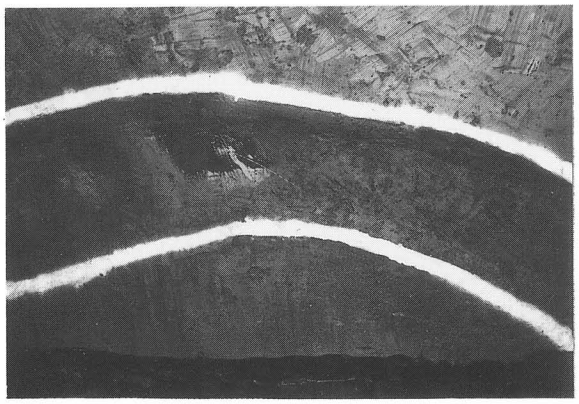
図版二　A区　遺構

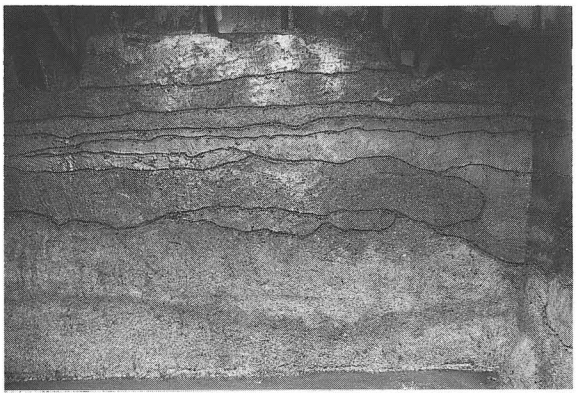




第２遺構面　ASR－1　上　ASR－1　下　ASR－1セクション断面



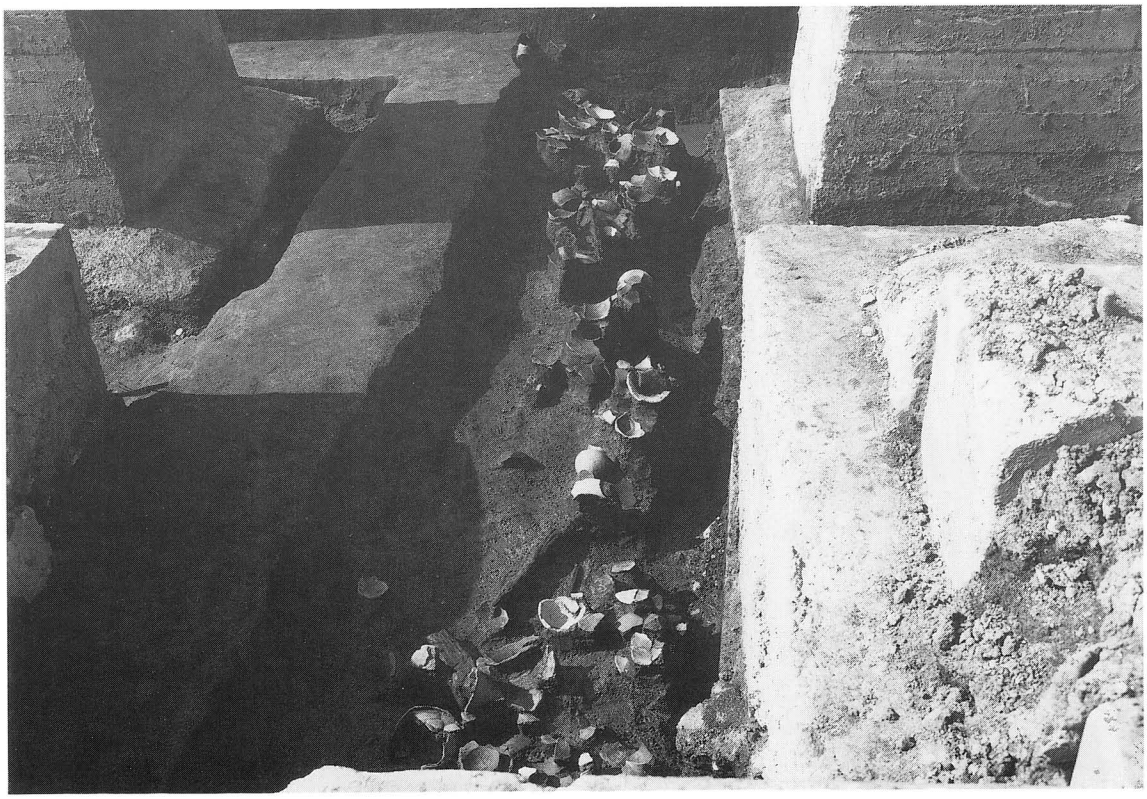




第３遺構面　ASD－2　　上　ASD－2　下　調査区西壁断面

図版三　B区　遺構

ＢＳＤ－１（北より）

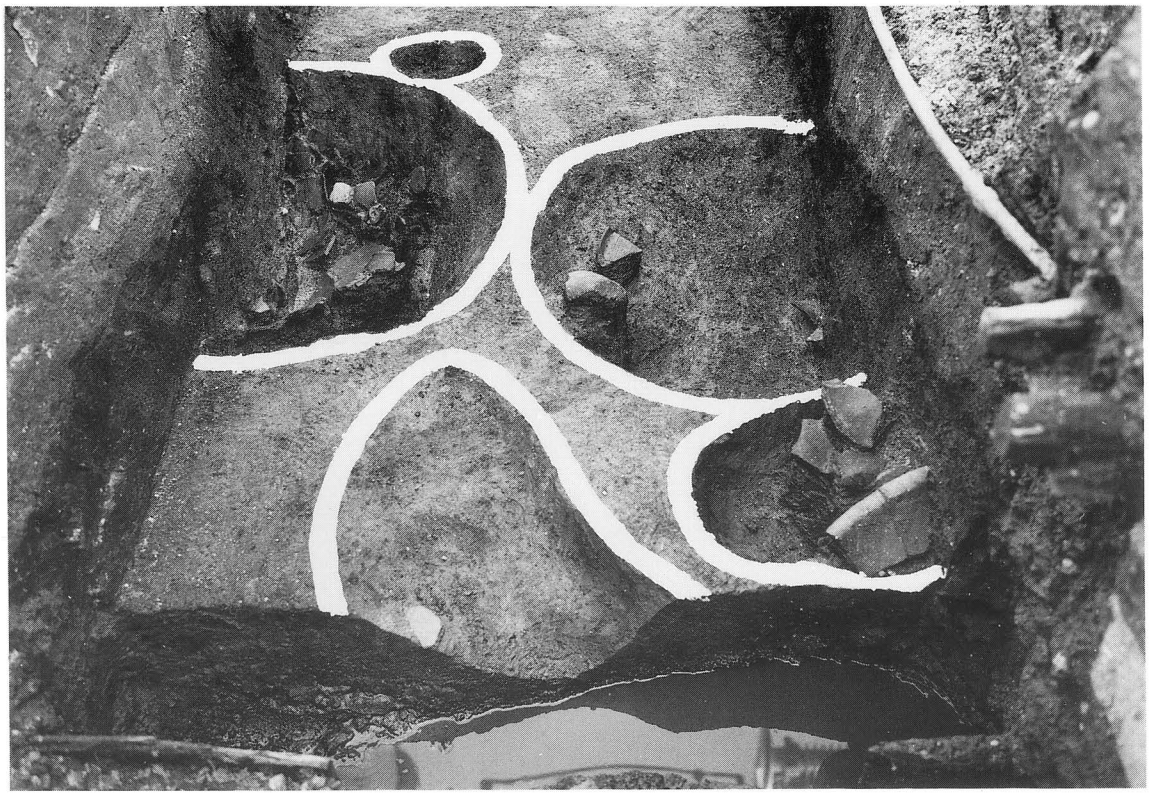


ＢＳＤ－１（南より）

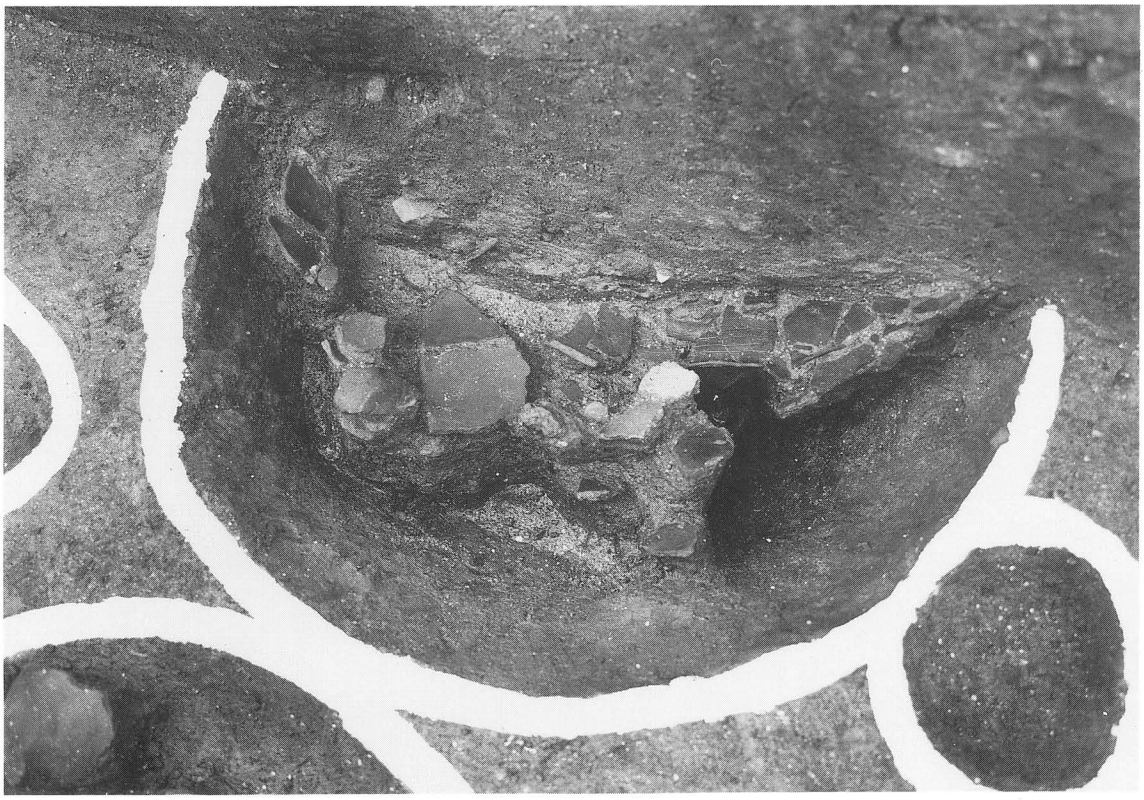
BSD－1　遺物出土状況（南端付近）

BSD－1　遺物出土状況（中央付近）

図版五　C区　遺構

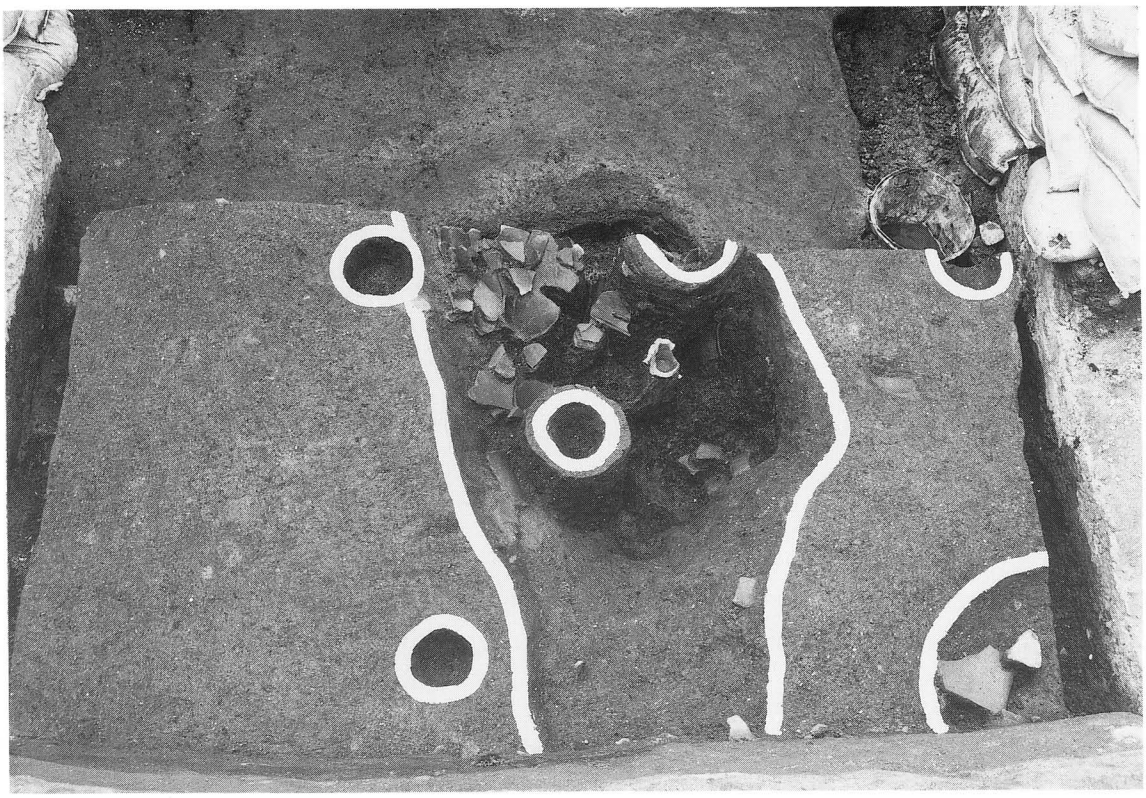


1区 第2遺構面上層（西より）CSK－3、4、5　CSD－5

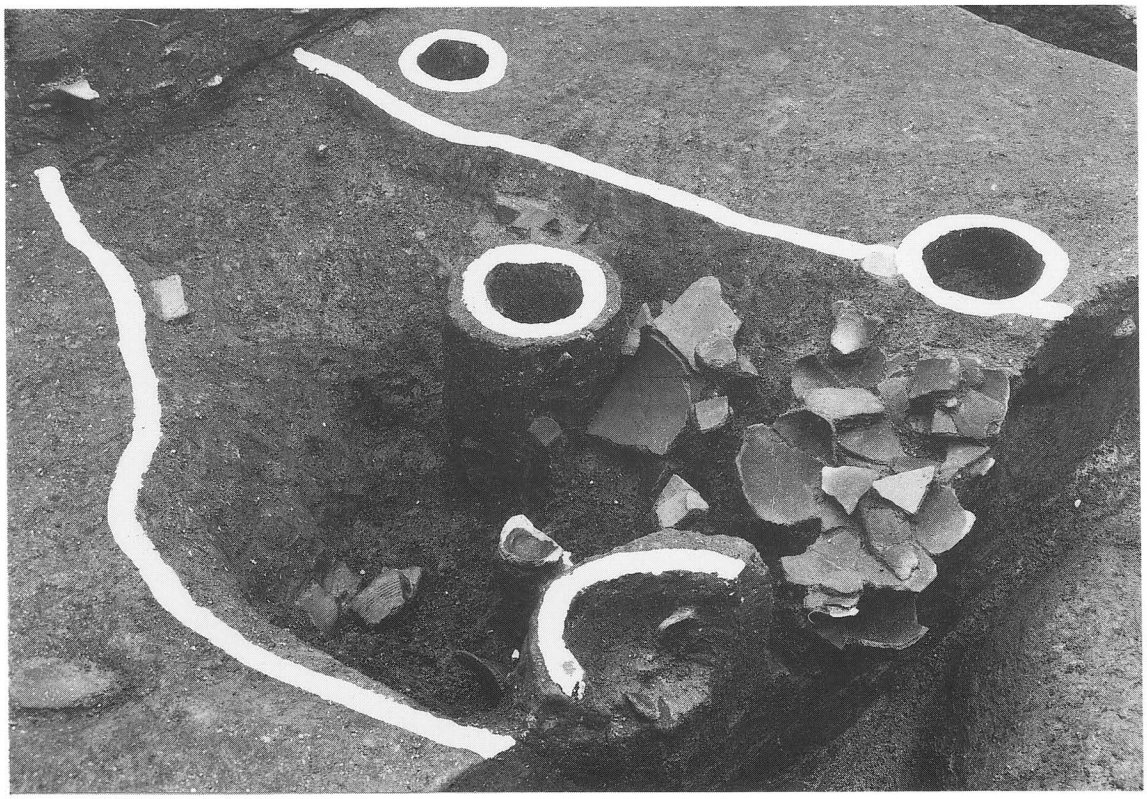


1区　CSD－5　遺物出土状況

図版六　C区　遺構

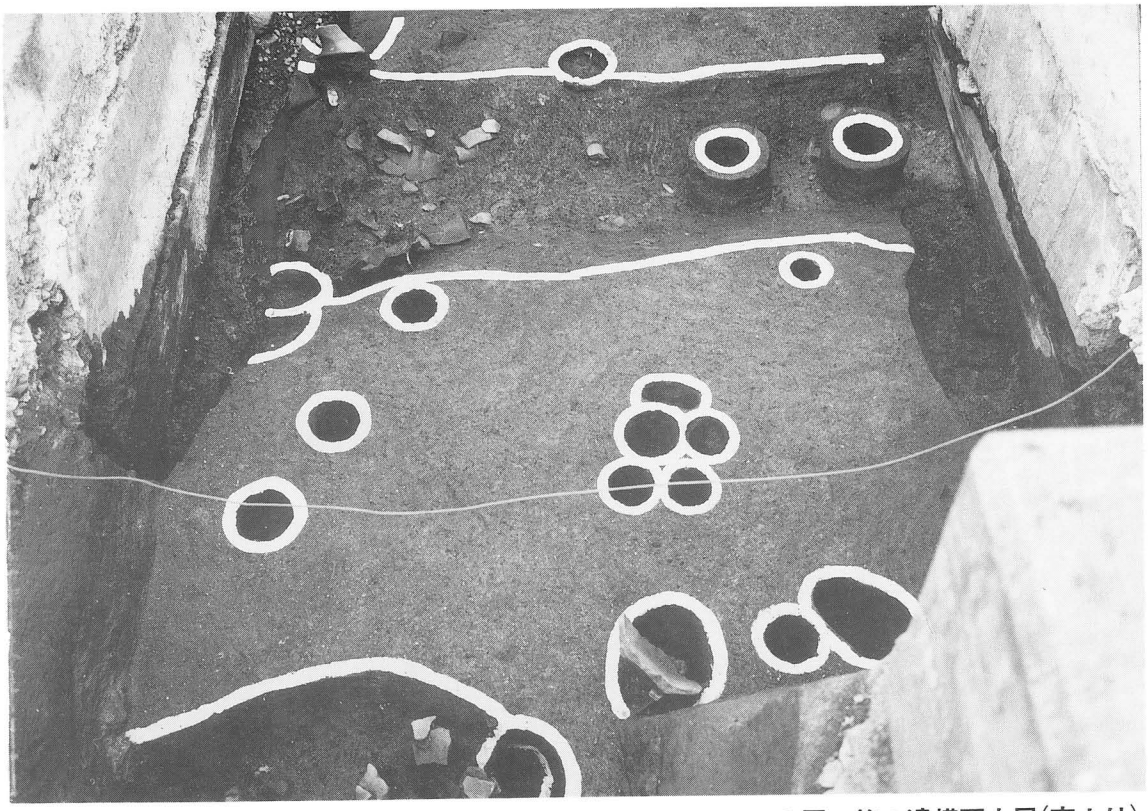


1区　第2遺構面上層（北より）



1区　CSD－5　遺物出土状況

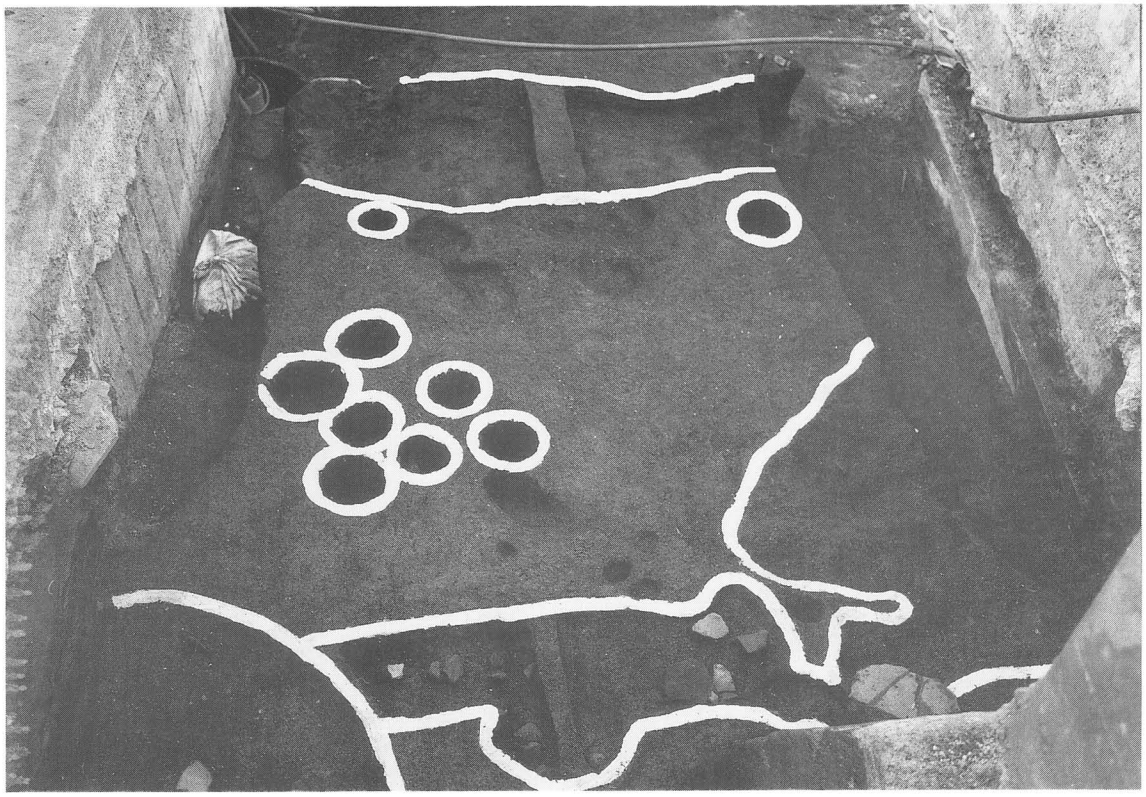
図版七　C区　遺構



３区　第２遺構面上層(南より)

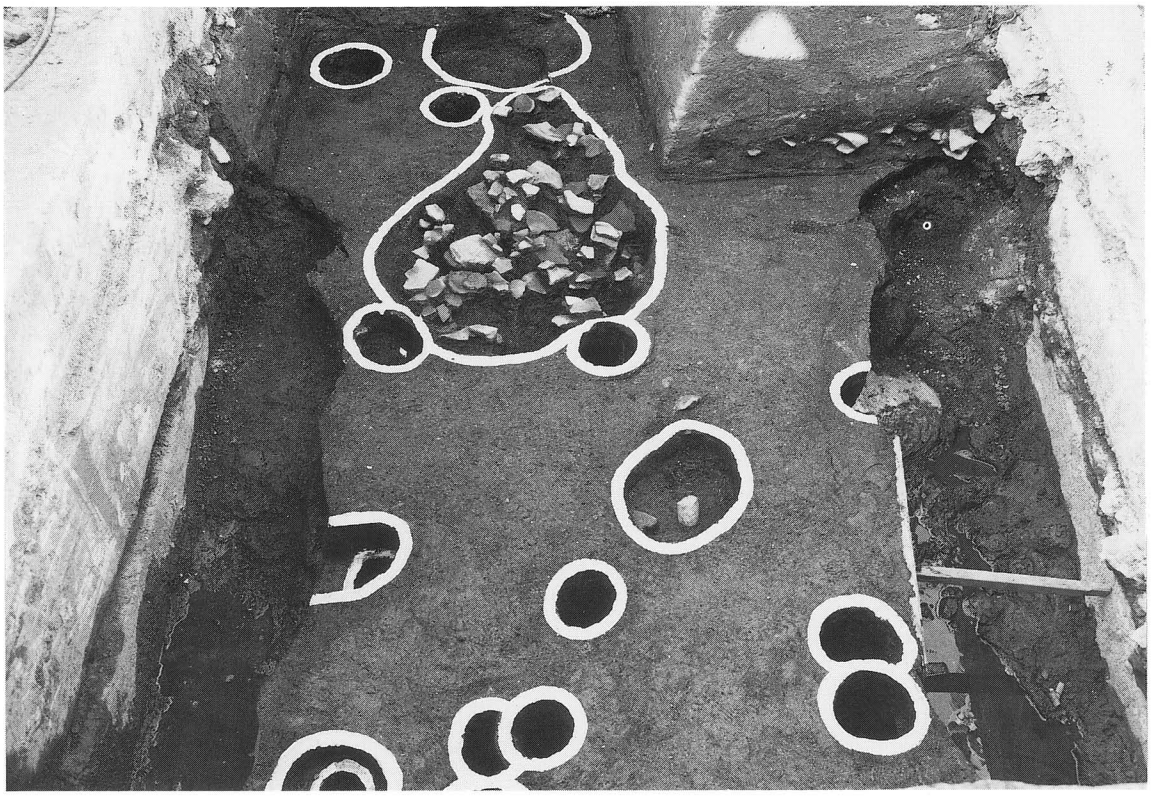
３区　CSD－6　遺物出土状況

図版八　C区　遺構

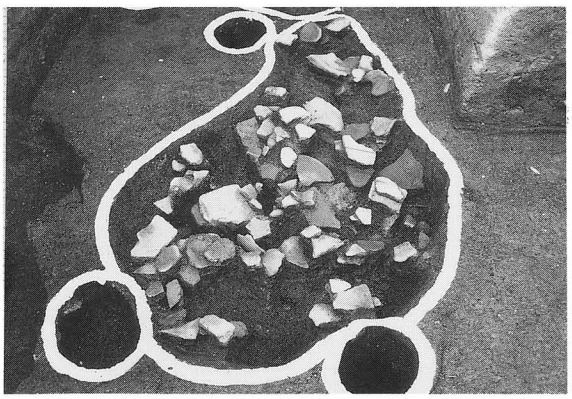


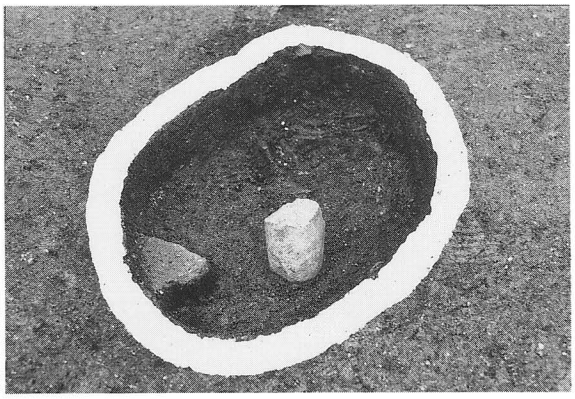
4区　第2遺構面上層（南より）CSD−6、11　CSK−14、15

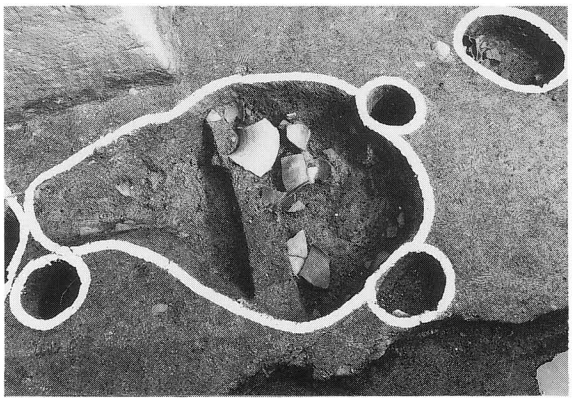
4区　CSD−6　遺物出土状況



5区　第2遺構面上層（南より）CSK−10、11、12、13

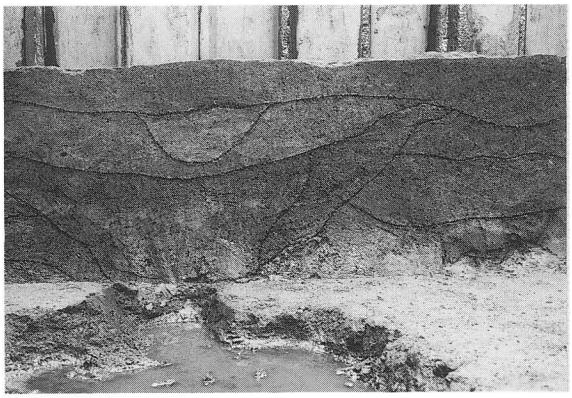






（左上）CSK−11　上層遺物出土状況
（左下）CSK−11　下層遺物出土状況
（右上）CSK−10　上層遺物出土状況
（右下）CSK−10　下層遺物出土状況

第４遺構面全景（南より）



（左上）ＤＳＲ－１　下層木器出土状況
（左下）ＤＳＲ－１　下層セクション断面
（右上）調査区西壁断面（下層）
（右下）ＤＳＰ－５

図版十一　BSD—1出土土器

B1

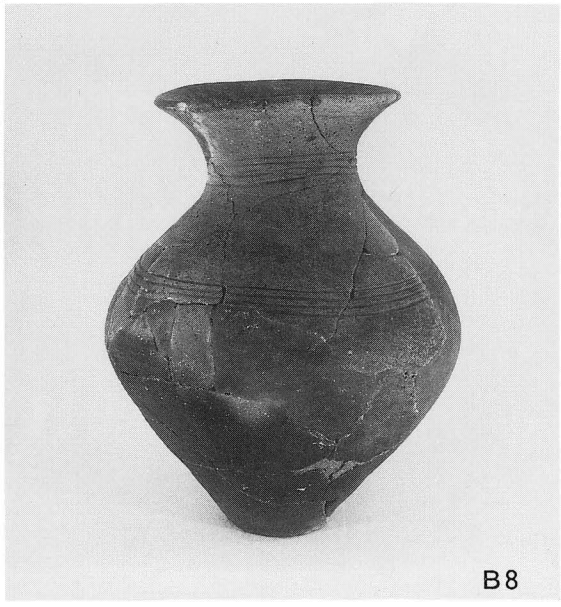
B2

B3

B9

B6

B7

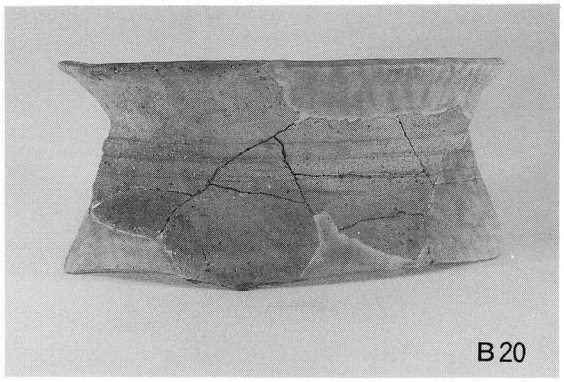

B8

図版十二　BSD—1出土土器

B13

B14

B19

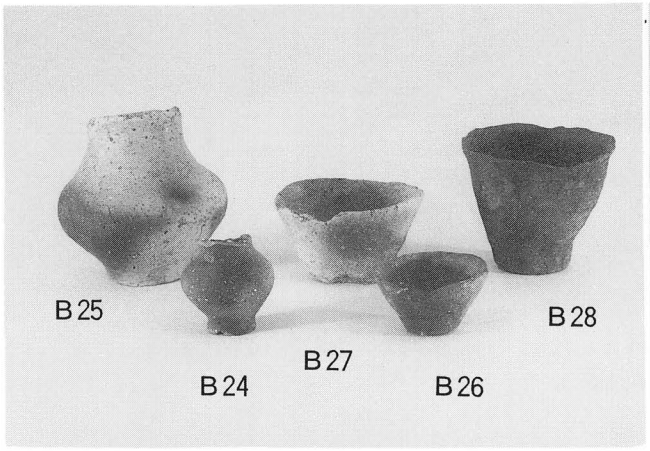

B20

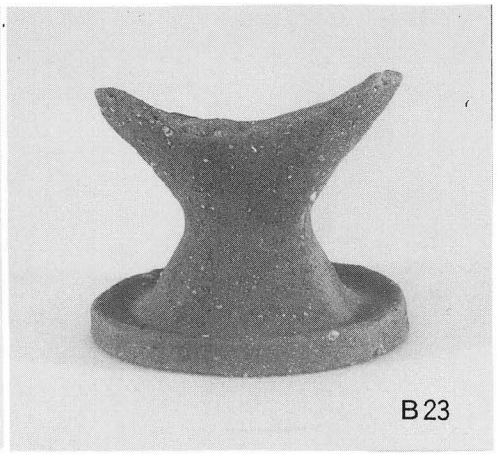
B15

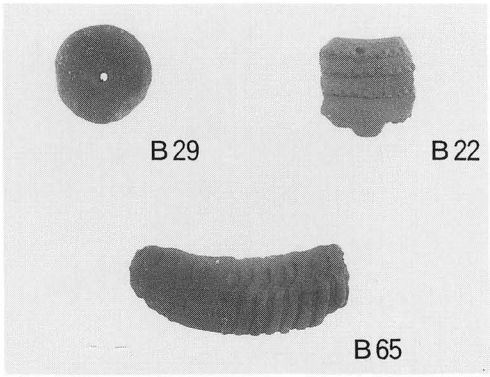
B16

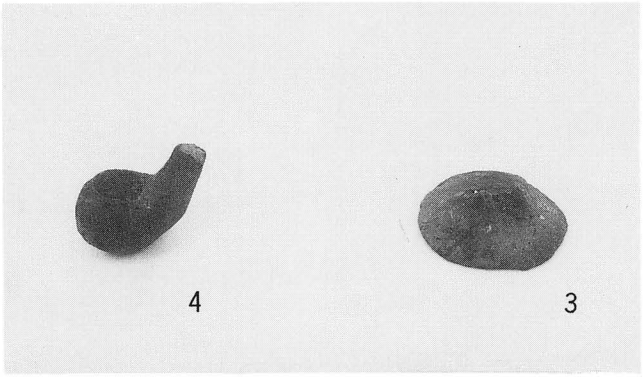
B17

図版十三　BSD—1出土土器、B区包含層出土土器、蓋形土製品、匙形土製品









図版十四　BSD—1　出土土器

B30

B33

B31

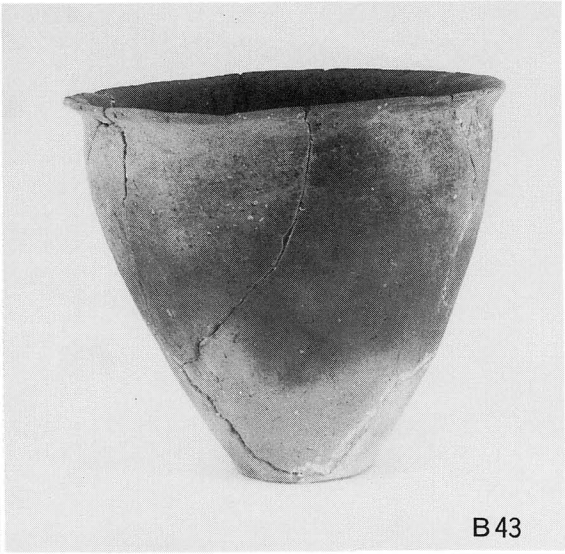
B34

B32

B37

図版十五　BSD—1出土土器

B41


B43

B44

B46

B49

B50

図版十六　BSD—1出土土器

B58

B59

図版十七　BSD—1出土土器、B区包含層出土土器

B54

B55

B56

B57

B63

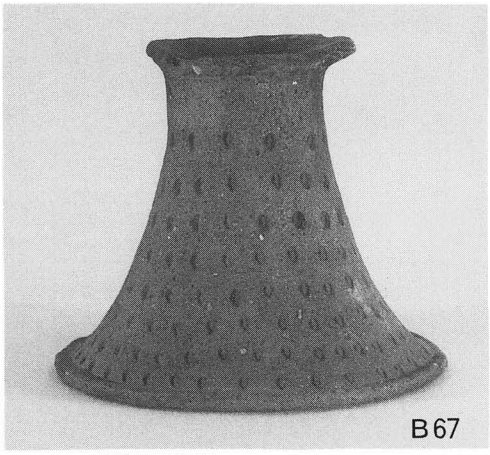
B64

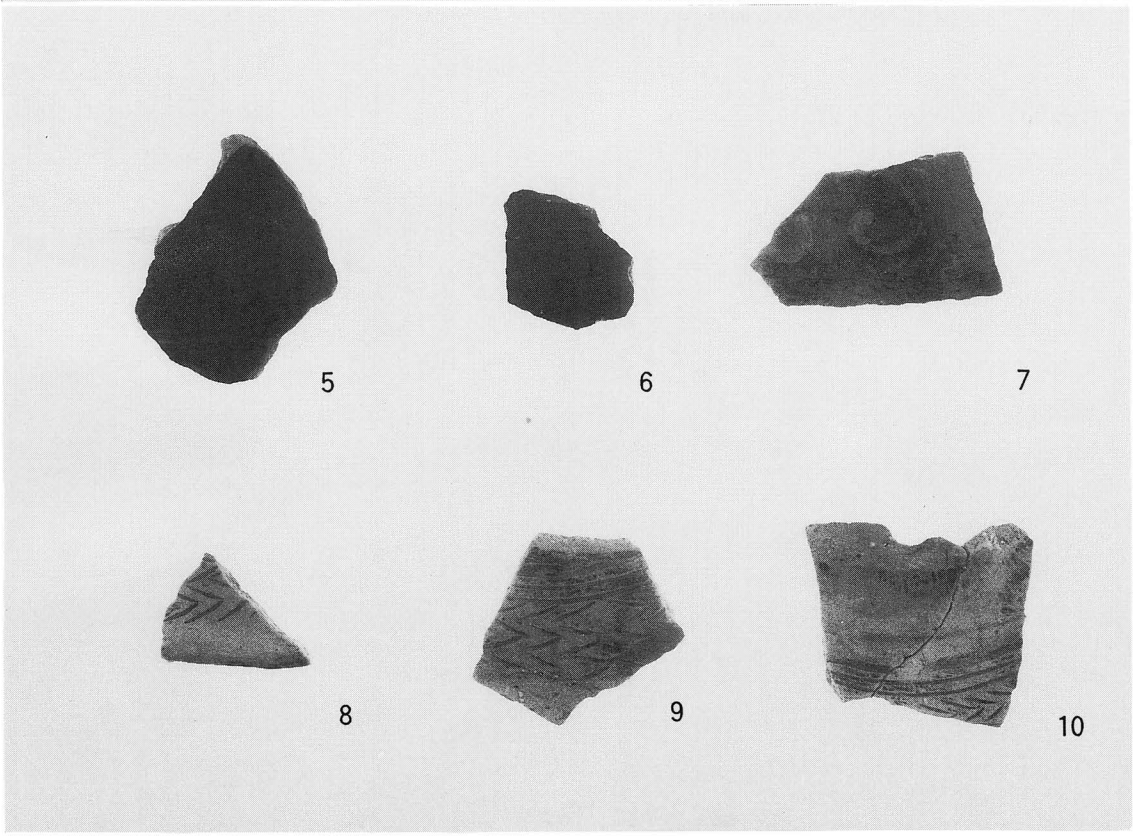
図版十八　B区包含層出土土器及び外部の特徴を持つ土器

B60

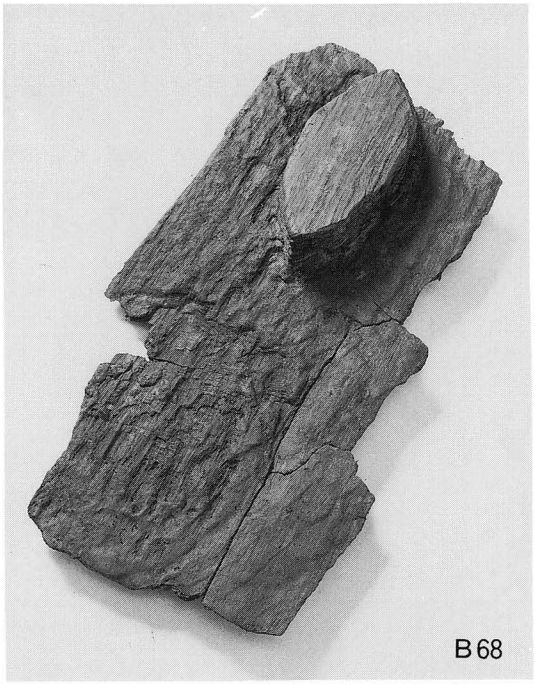
B61

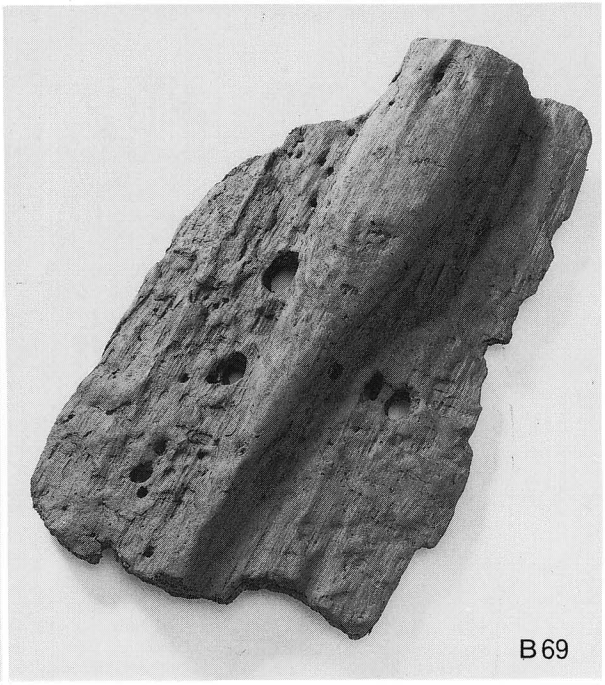
B62

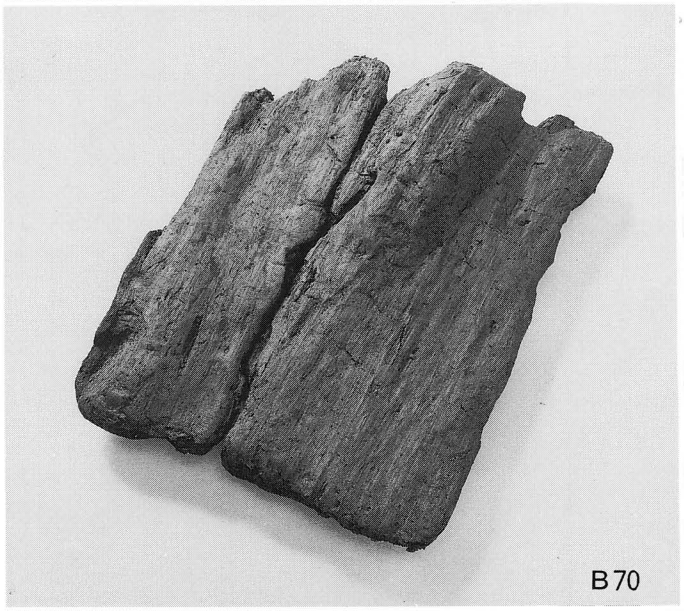

B67



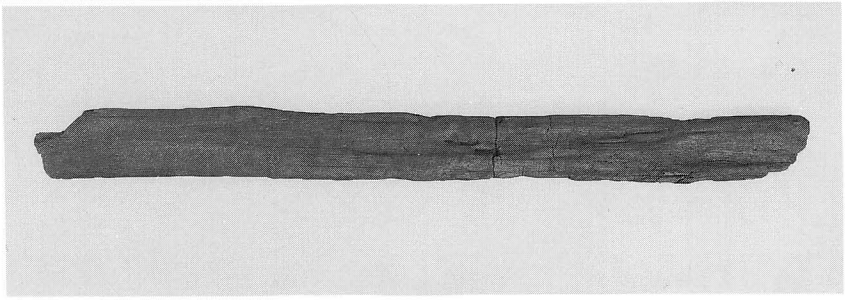
図版十九　B区　出土木器


B68

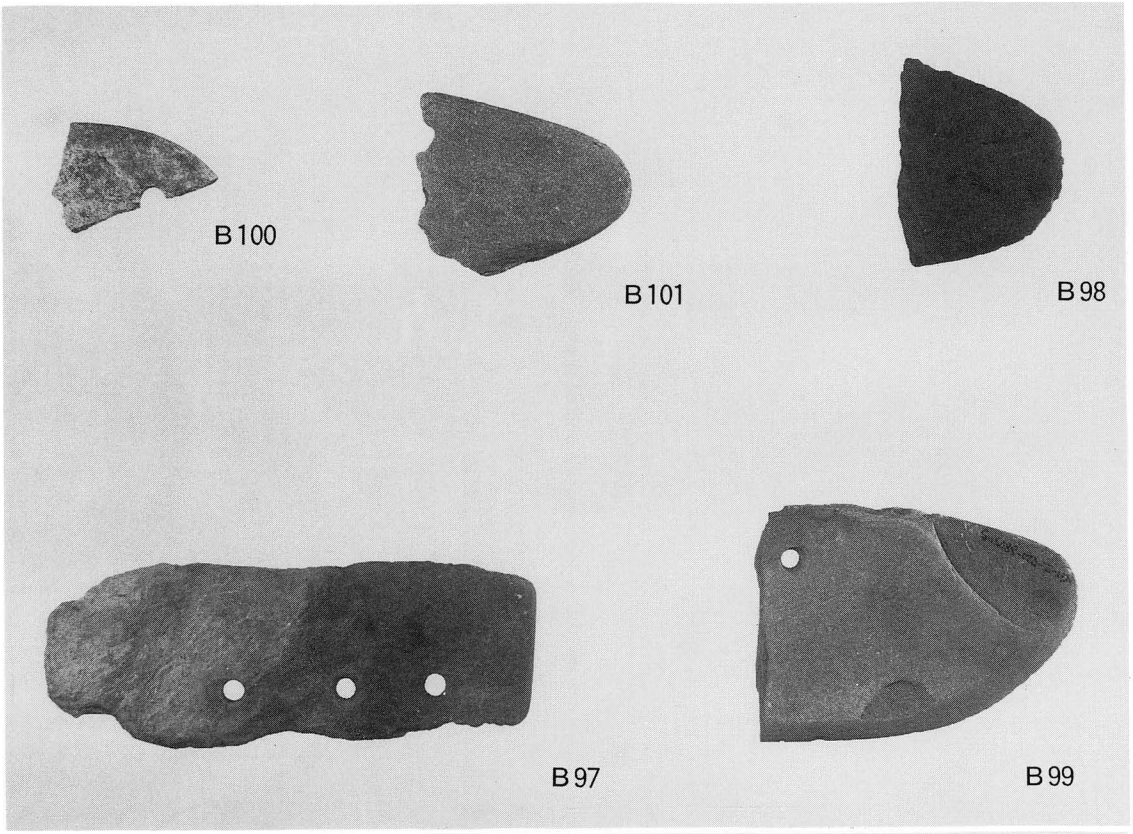

B69

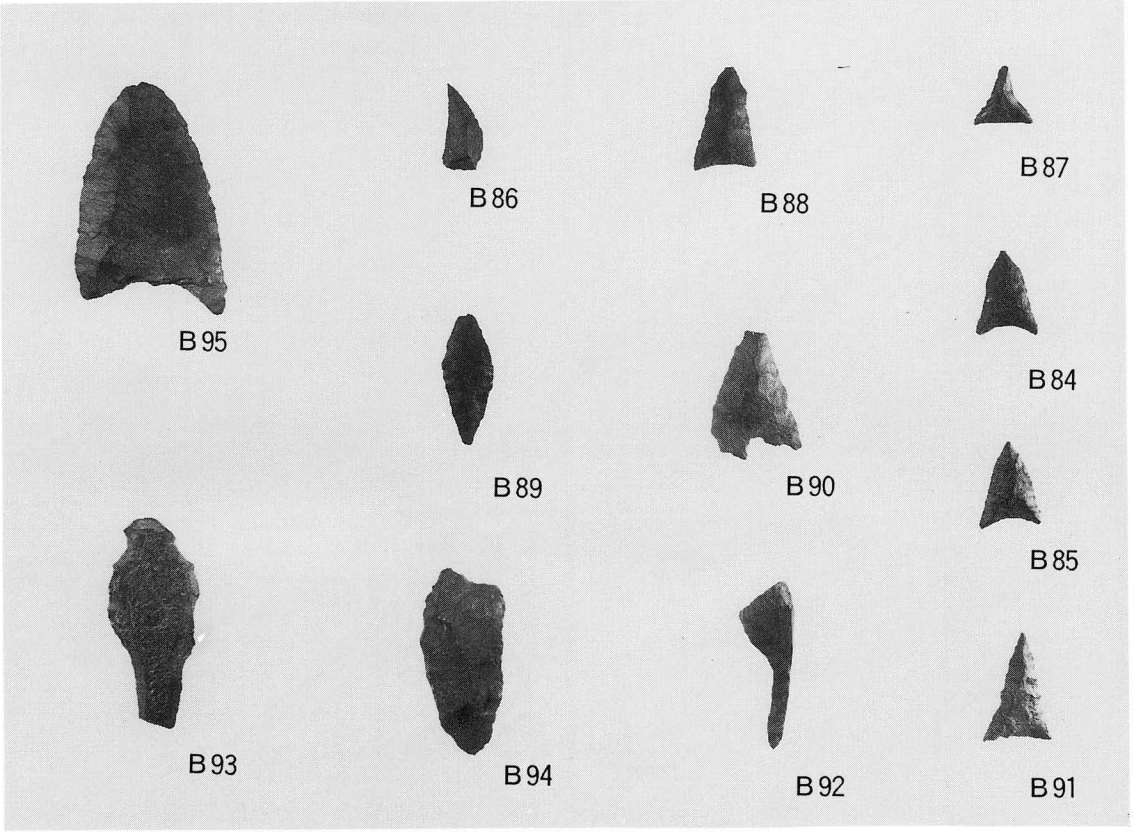

B70

B74

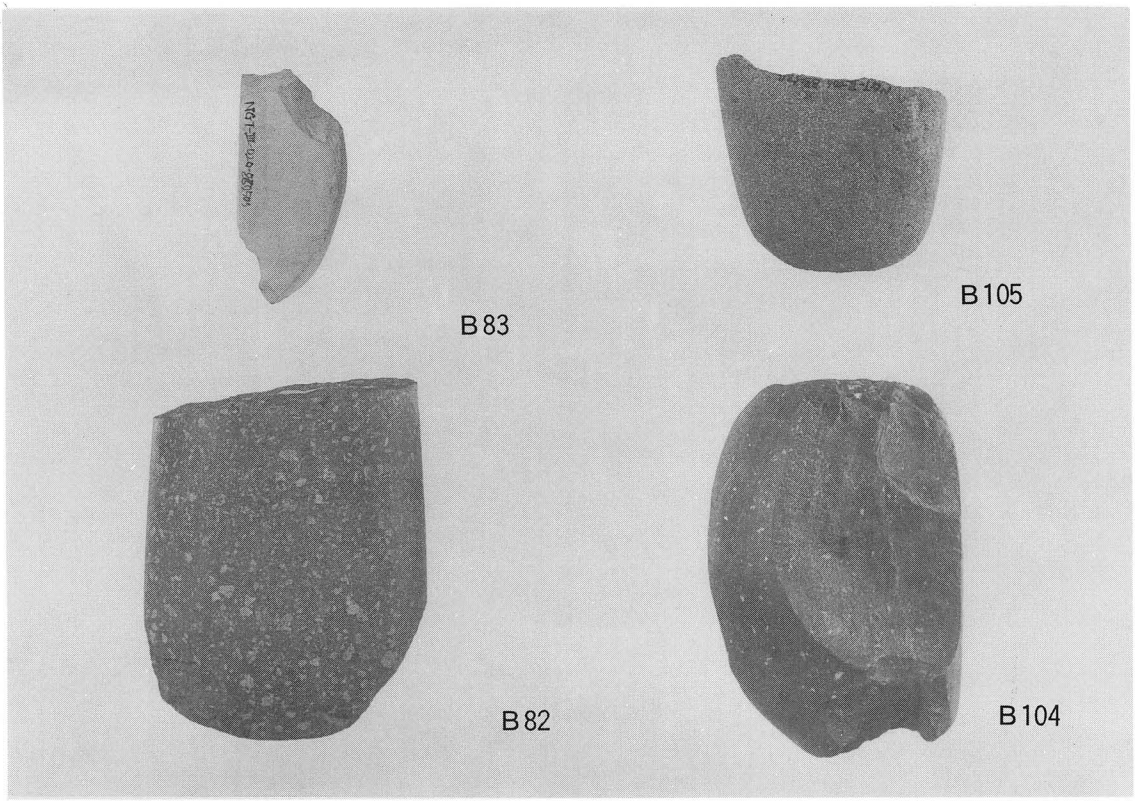


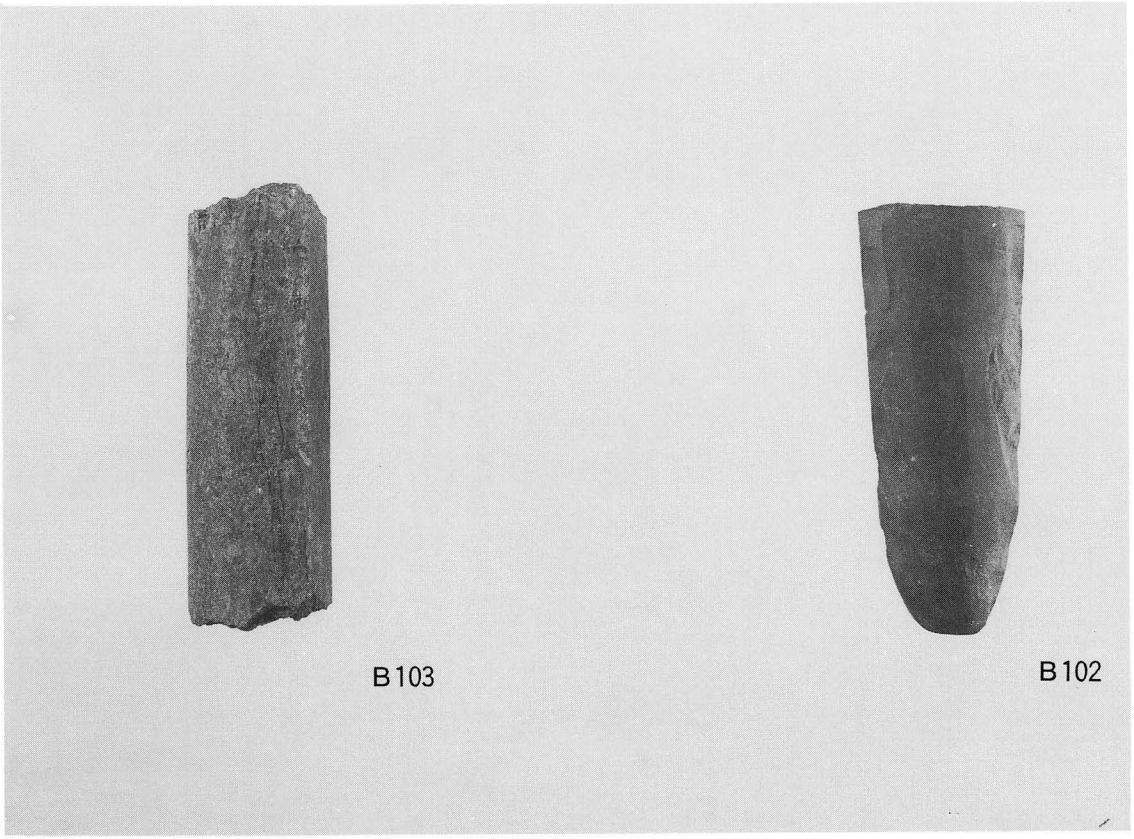
図版二十　B区　包含層出土石器



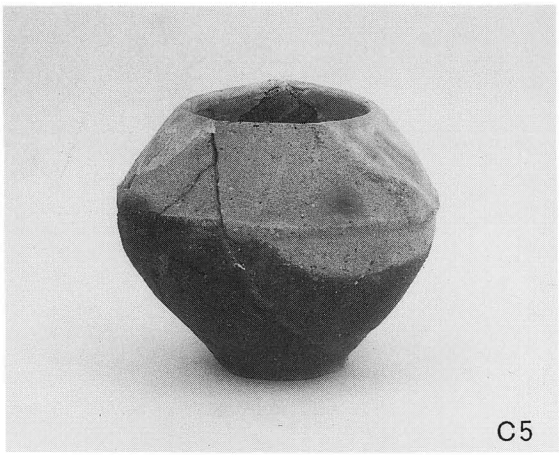


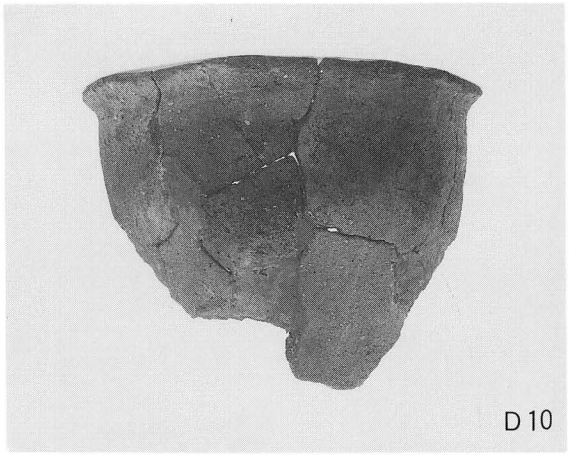
図番二十一　BSD—1出土石器、B区包含層出土石器

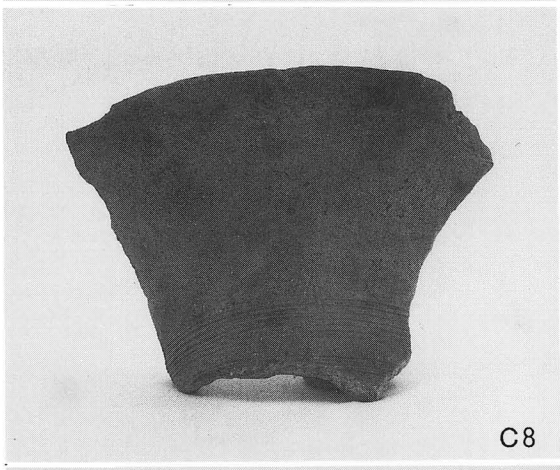




図版二十二　CSK—4、5、6、10、11及びCSD—5出土土器

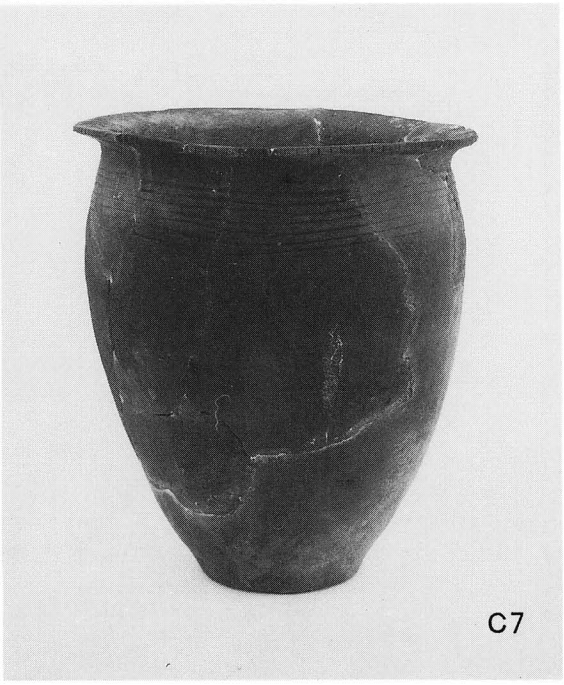

C5


D10


C8

C27

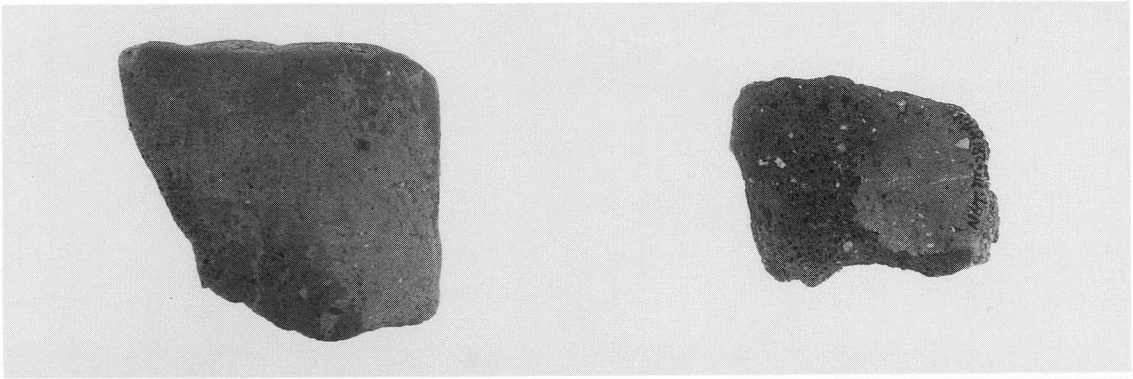
C6

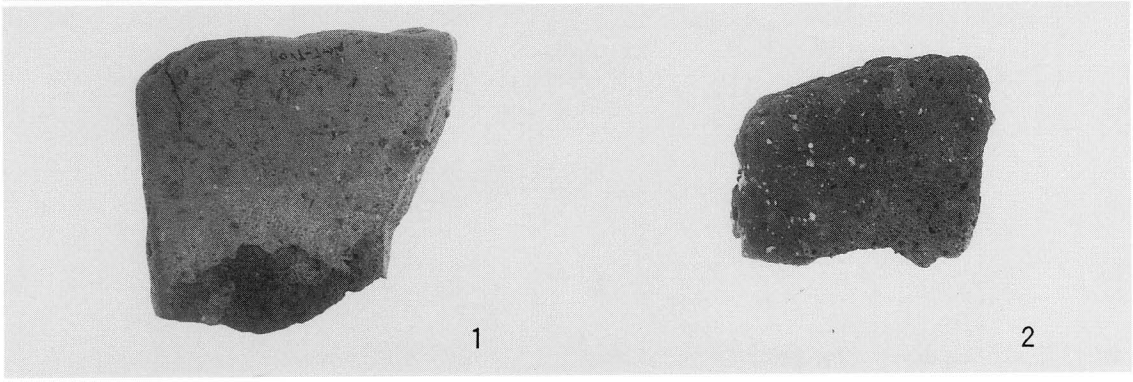

C7

図版二十三　C区土器群、CSD—5出土土器及び高熱を受けた跡の残る土器片

C31

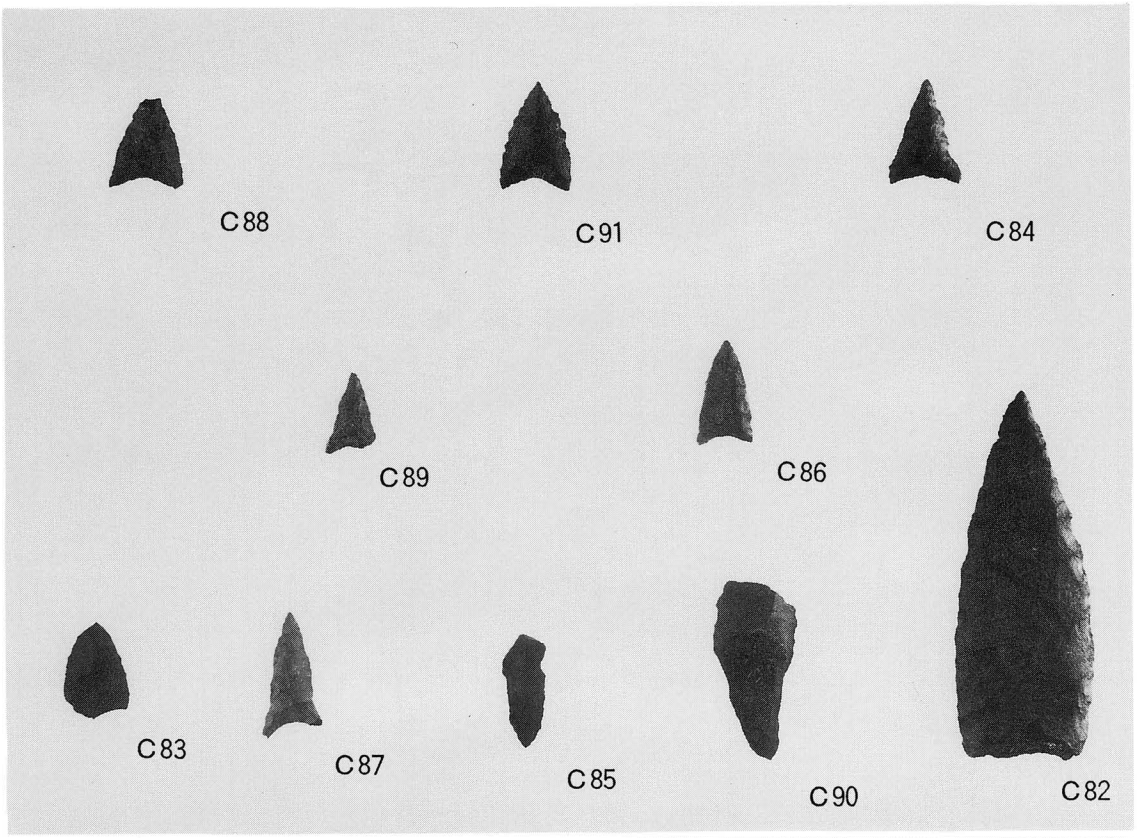
C66

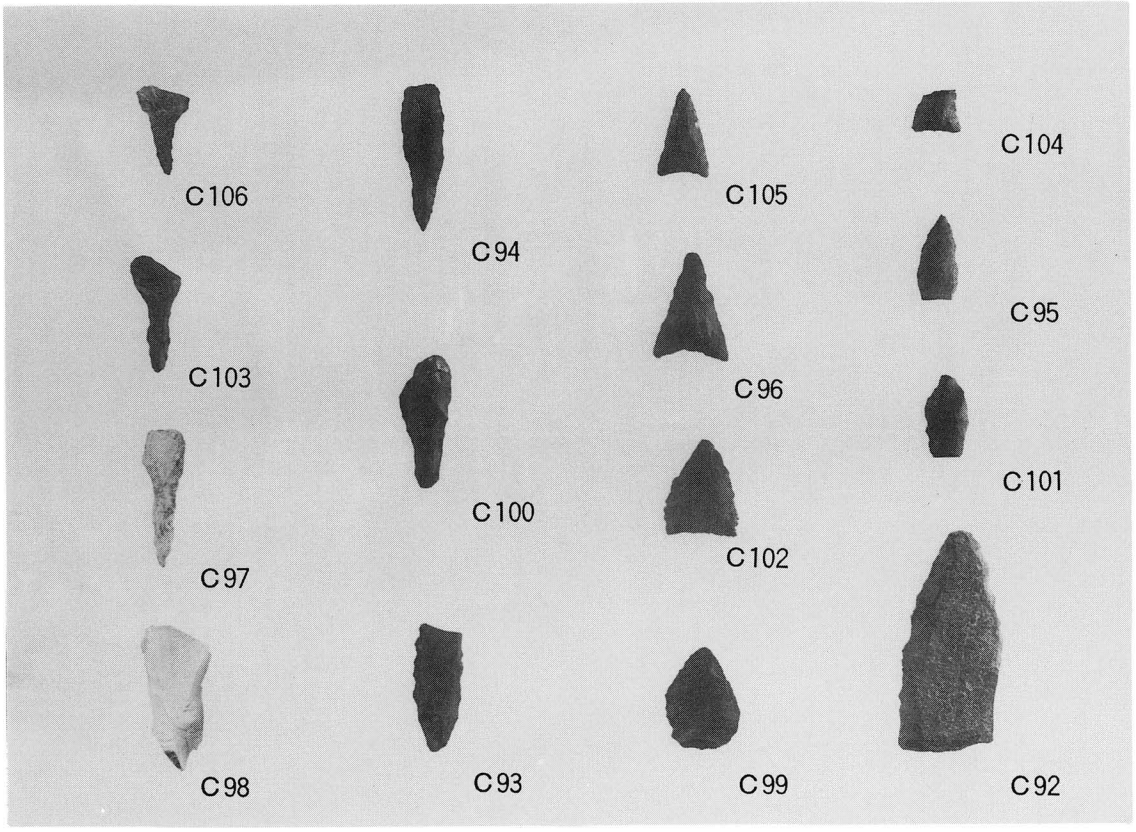




1　2

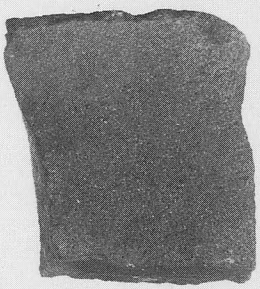
図版二十四　C区　出土石器





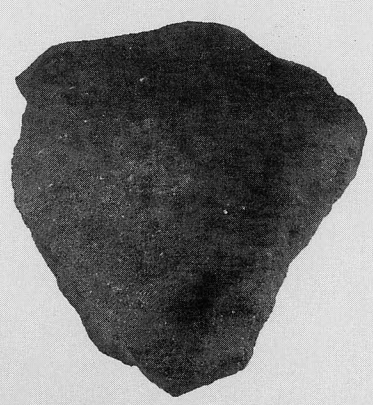
図版二十五　C区　出土石器

C113



C118

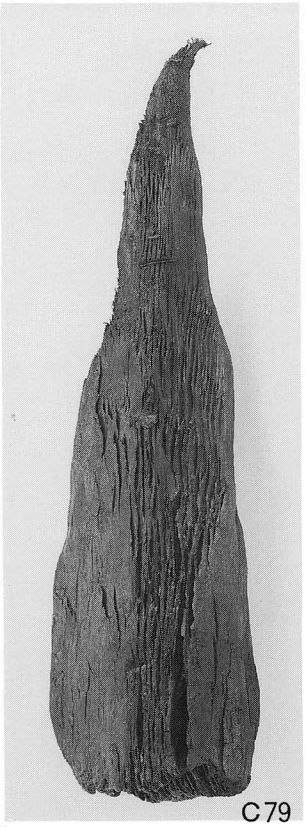
C112



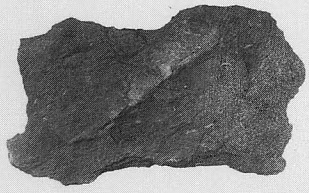
C116

C111

図版二十六　C区　出土木器及び石器

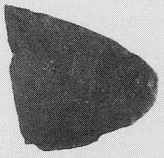

C79

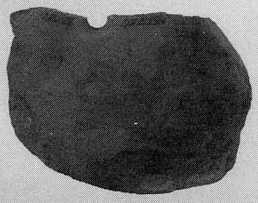
C78

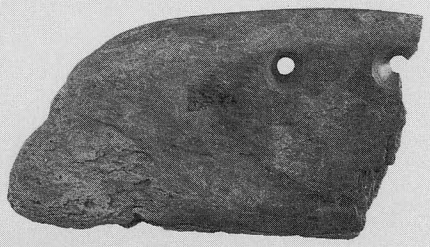

C117

C115

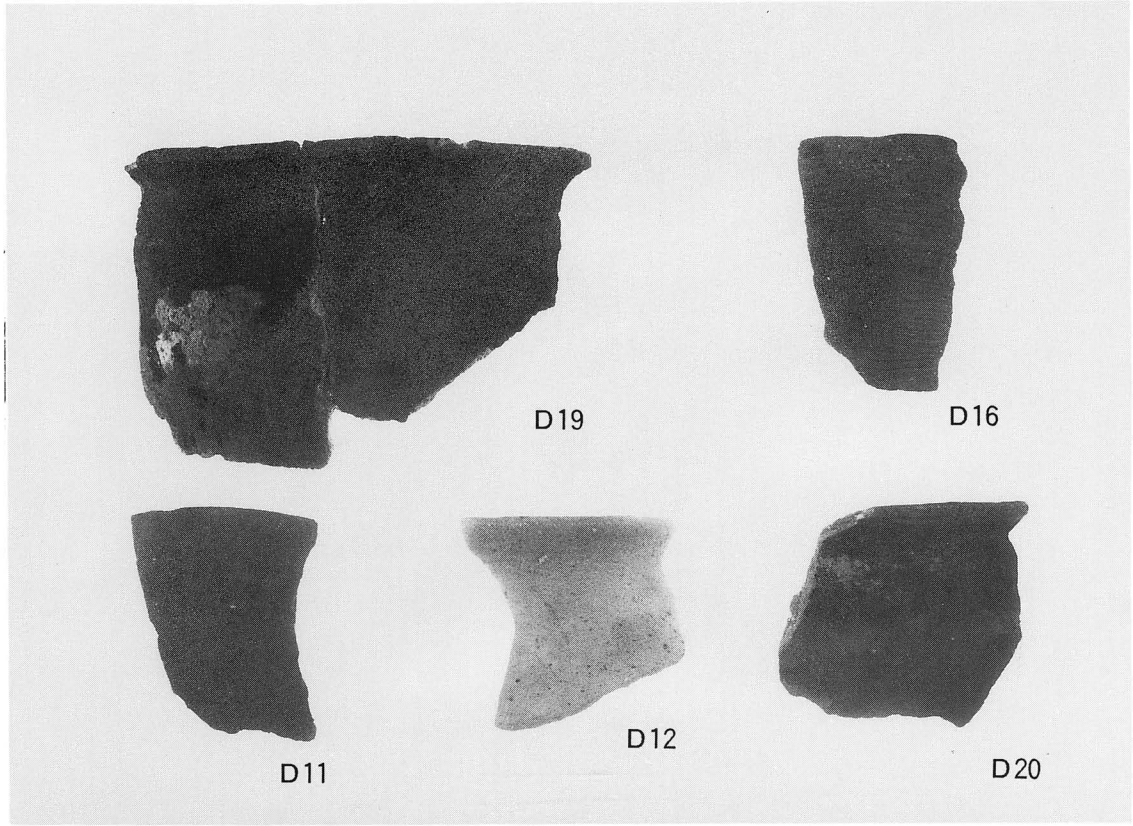
C109

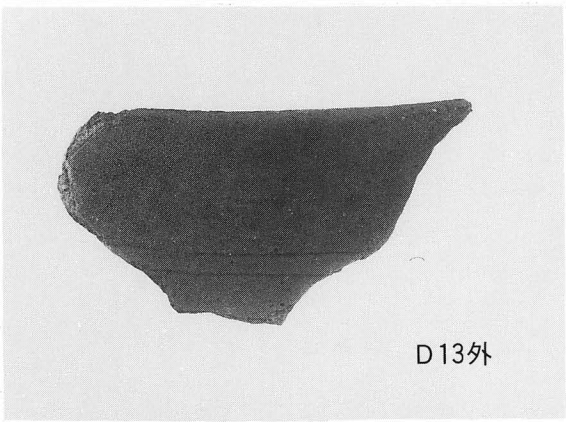

C110

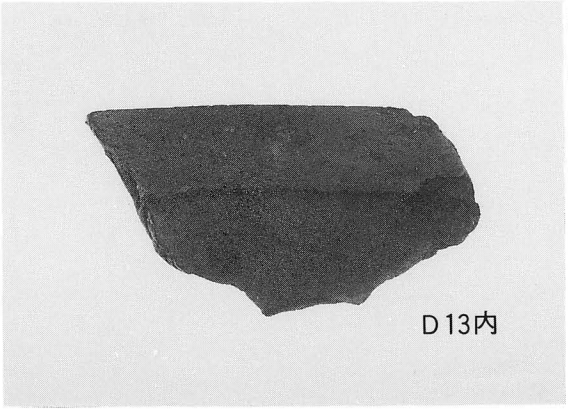

C108

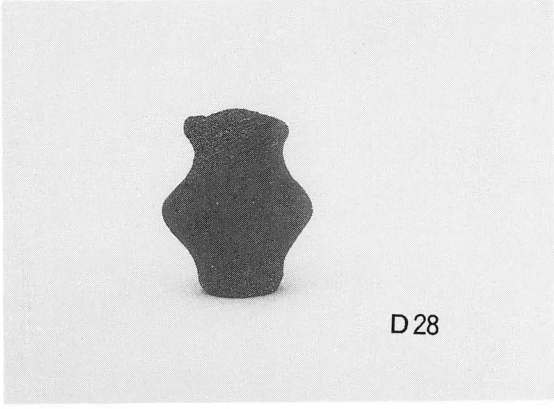

C107

図版二十七　D区　包含層出土土器



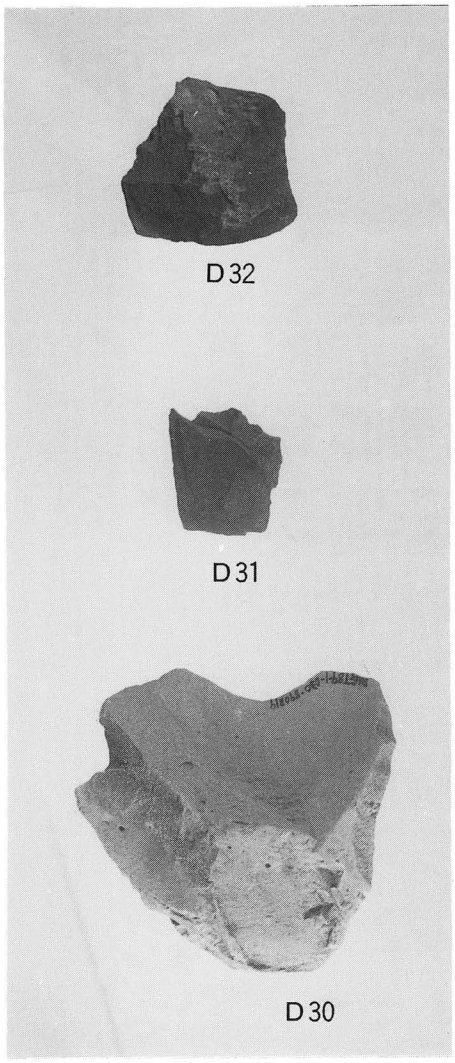






図版二十八　DSR—1下層出土木器及びD区出土石器

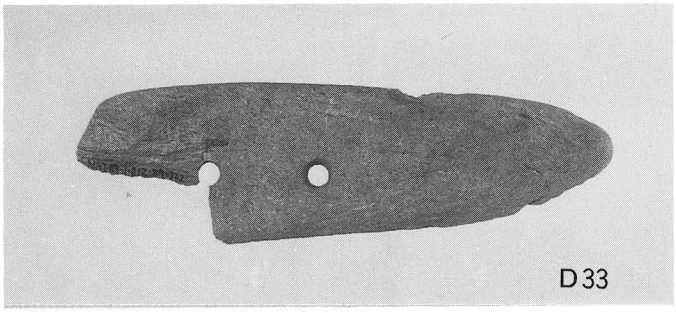
D34



D32

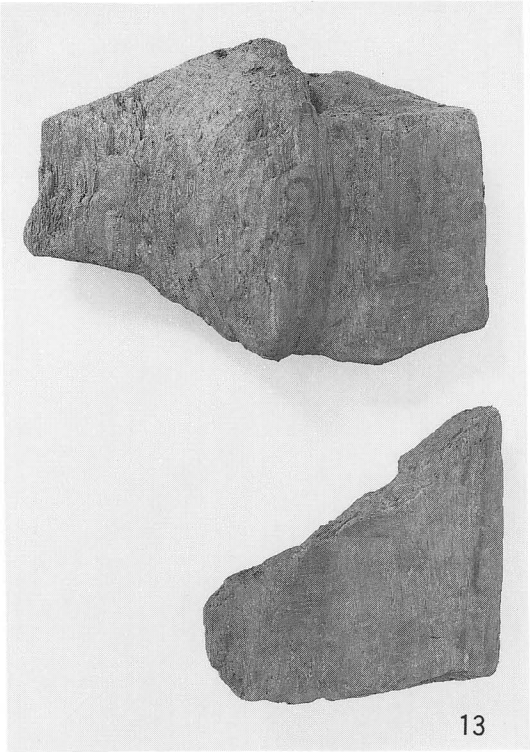
D31

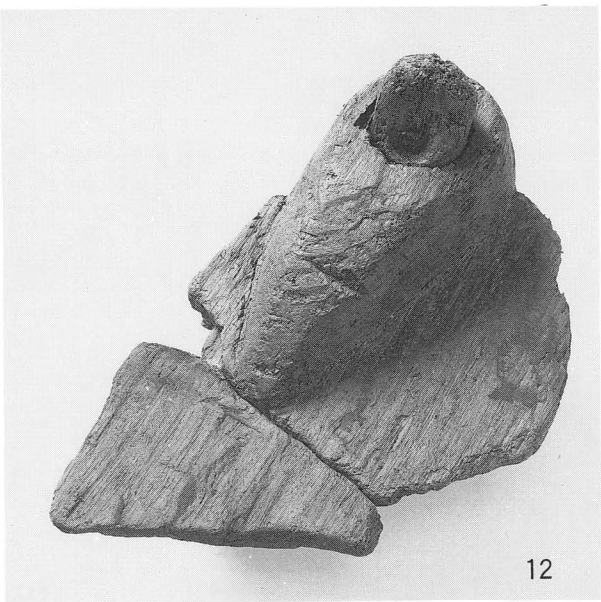
D30

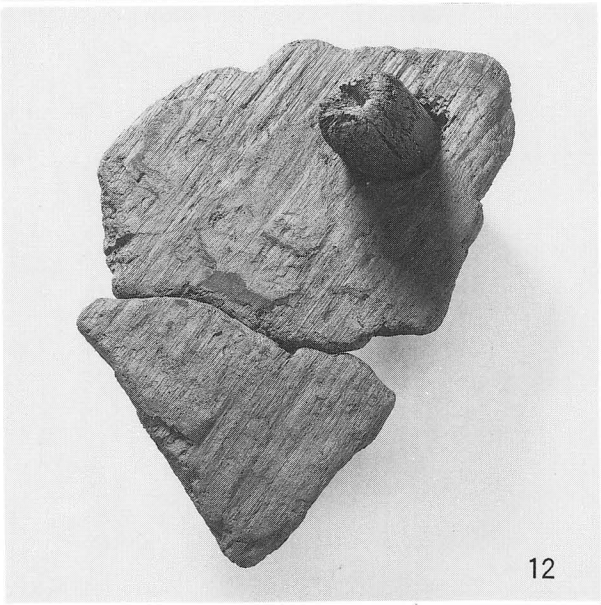


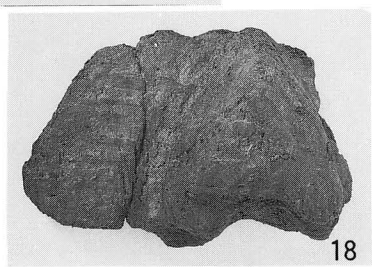
D33

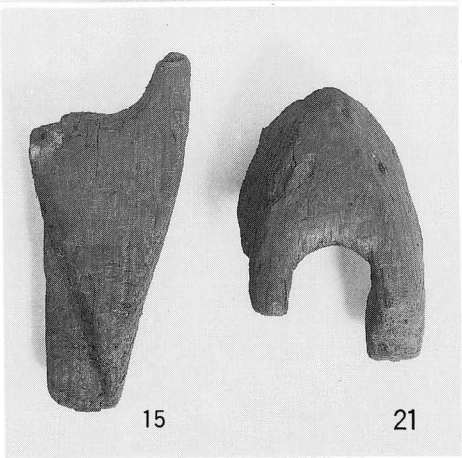
図版二十九　関西電力東大阪変電所保管の木器









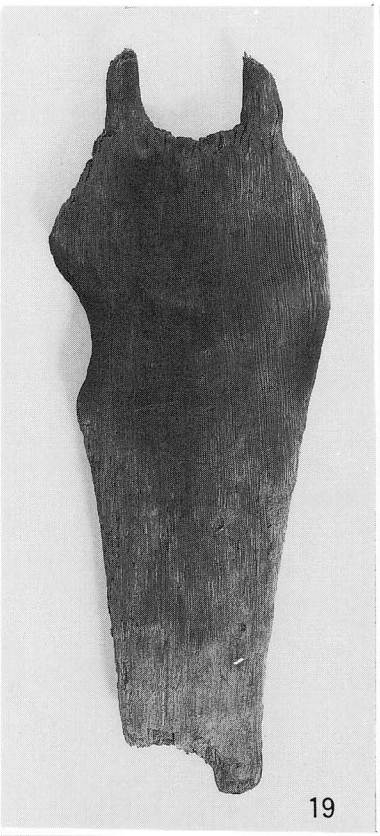
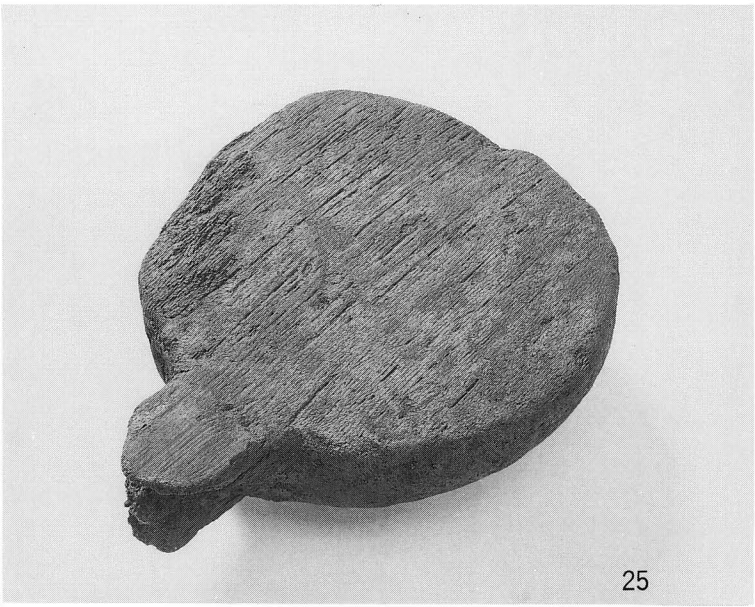
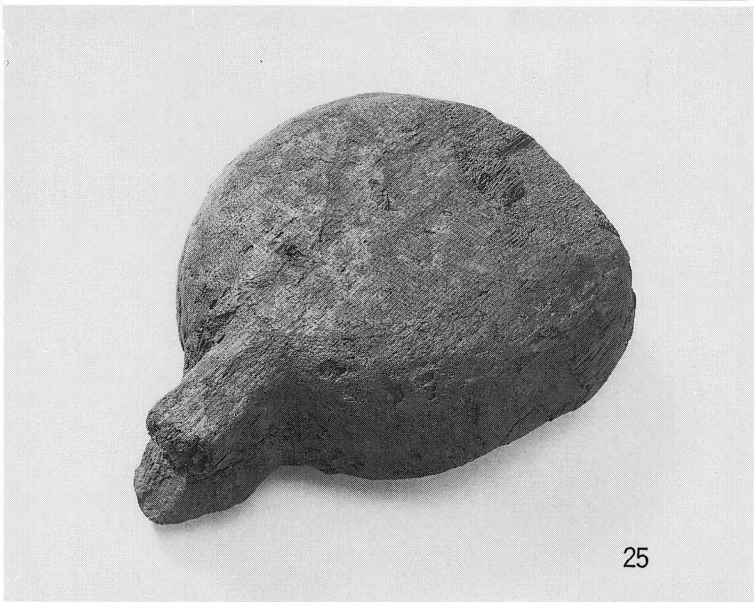
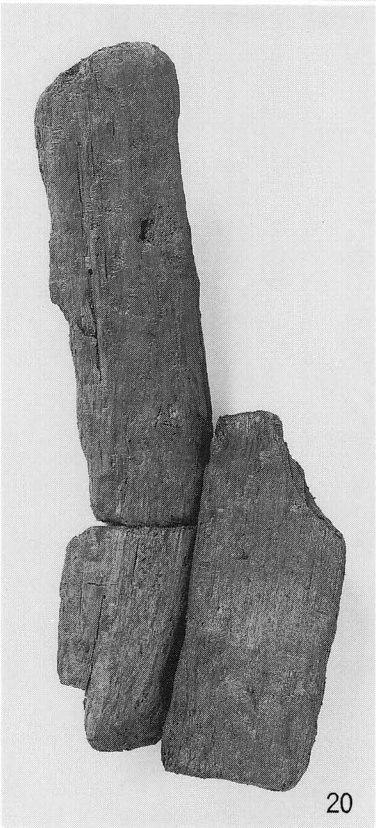
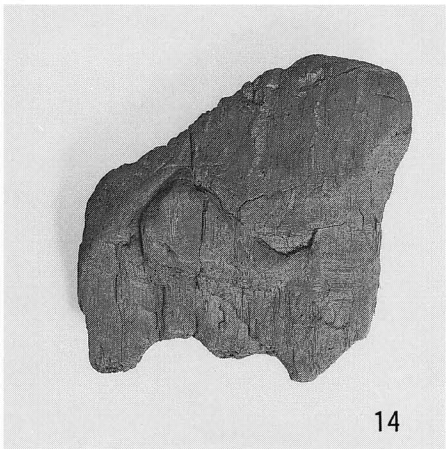
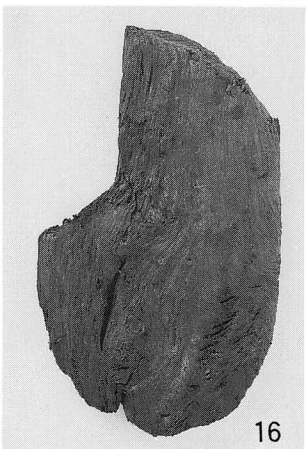


図版三十　関西電力東大阪変電所保管の木器

22

11

23

17

図版三十一　関西電力東大阪変電所保管の木器